

(35) 義務教育学校の周知度

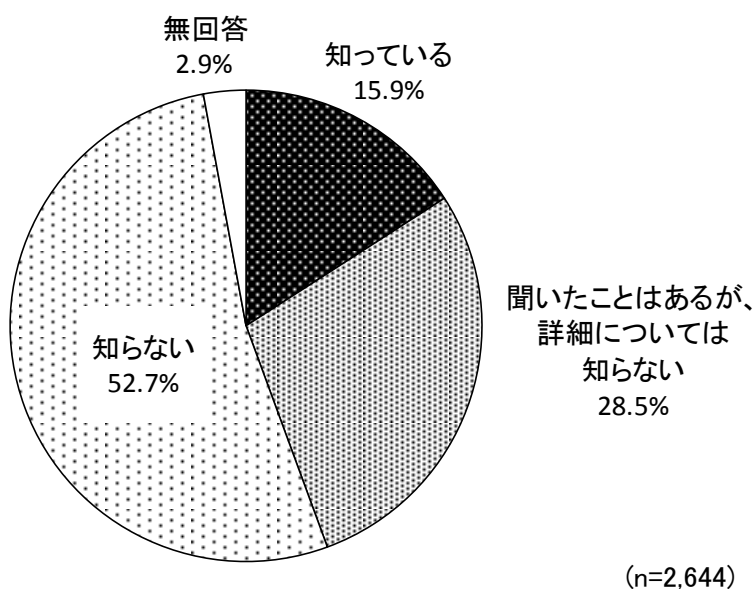
◇「知っている」が1割台半ば

問36 現在、第六小学校・第三中学校（いずみの森小中学校）は、小中一体型施設の義務教育学校として2020年4月の開校に向けて準備を進めています。あなたは、義務教育学校についてご存知ですか。（○は1つだけ）

※義務教育学校とは・・・

平成27年（2015年）6月に法により制度化されたもので、義務教育9年間の学びを一つの学校で行う学校。在籍する9学年の子どもたちの指導・支援を全教職員で行います。

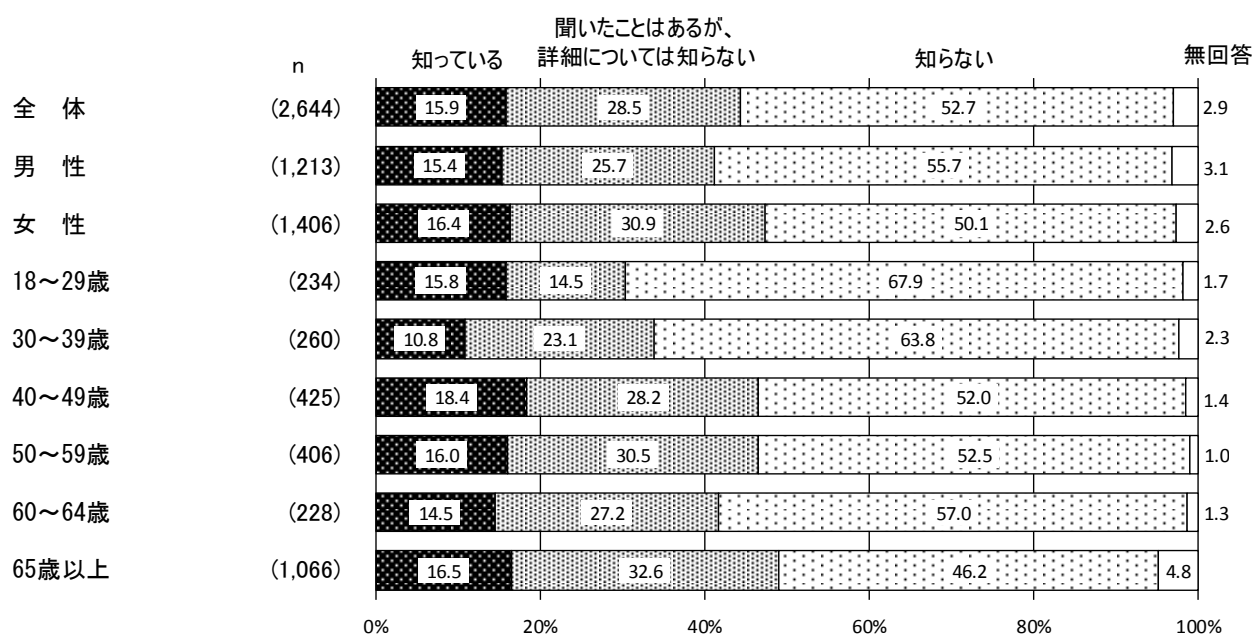
図3-35-1 義務教育学校の周知度－全体



（注）新規の設問のため、経年比較はない。

義務教育学校について知っているか聞いたところ、「知っている」（15.9％）は1割台半ばで、「聞いたことはあるが、詳細については知らない」（28.5％）が3割近くとなっており、「知らない」（52.7％）が5割強と多くなっている。（図3-35-1）

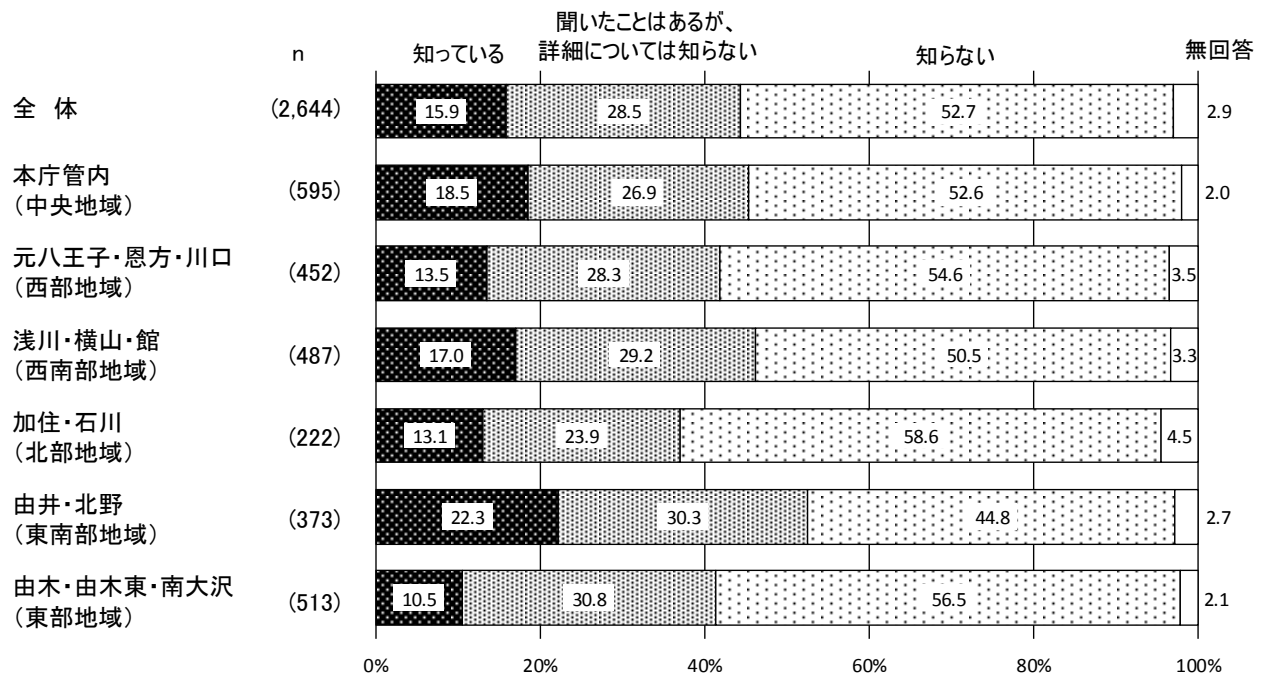
図 3-35-2 義務教育学校の周知度－性別、年齢別



性別にみると、「聞いたことはあるが、詳細については知らない」は女性（30.9%）が男性（25.7%）より5.2ポイント高く、「知らない」は男性（55.7%）が女性（50.1%）より5.6ポイント高くなっている。

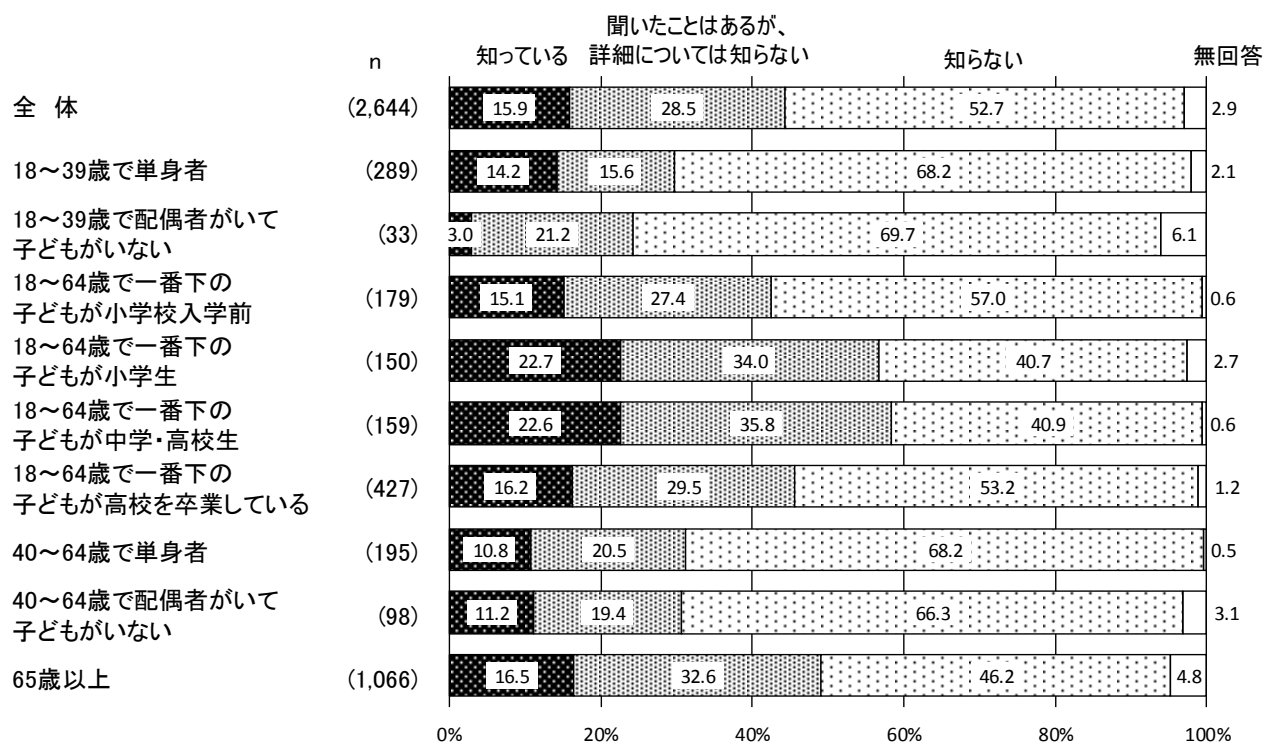
年齢別にみると、「知っている」は40～49歳（18.4%）で2割近くと多く、30～39歳（10.8%）で約1割と少なくなっており、「知らない」は18～29歳（67.9%）と30～39歳（63.8%）でともに6割台と多くなっている。（図 3-35-2）

図 3－35－3 義務教育学校の周知度－居住地域別



居住地域別にみると、「知っている」は由井・北野（東南部地域）（22.3％）で2割強と多くなっており、「知らない」は加住・石川（北部地域）（58.6％）と由木・由木東・南大沢（東部地域）（56.5％）の両地域でともに6割近くと多くなっている。（図 3－35－3）

図 3-35-4 義務教育学校の周知度－ライフステージ（9区分）別



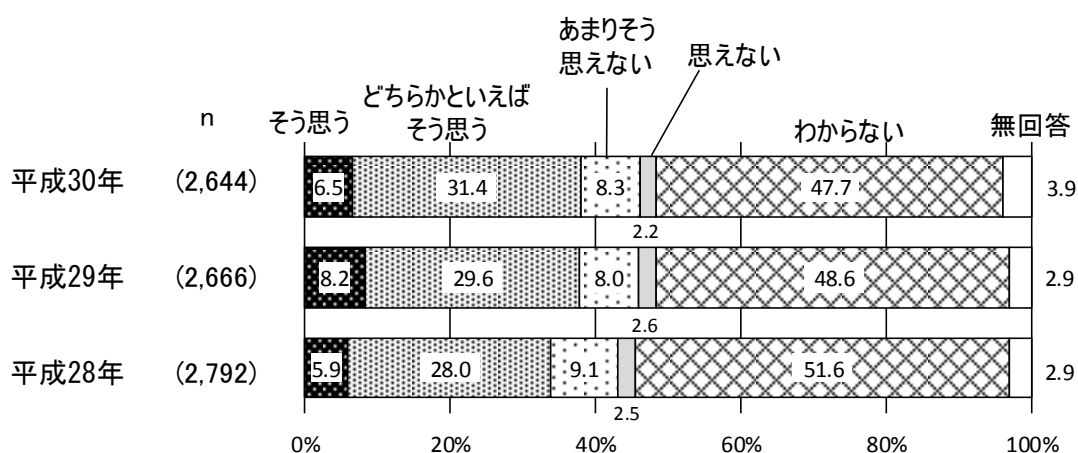
ライフステージ（9区分）別にみると、「知っている」は18～64歳で一番下の子どもが小学生（22.7%）と中学・高校生（22.6%）の両層でともに2割強と多くっており、「聞いたことはあるが、詳細については知らない」も18～64歳で一番下の子どもが中学・高校生（35.8%）と小学生（34.0%）の両層で3割台半ばと多くになっている。一方、「知らない」は18～39歳で単身者（68.2%）と18～39歳で配偶者がいて子どもがいない夫婦（69.7%）の両層や40～64歳で単身者（68.2%）と40～64歳で配偶者がいて子どものいない夫婦（66.3%）の両層でそれぞれ6割台後半と多くになっている。（図 3-35-4）

(36) 市などの支援による子育ての状況

◇《《そう思う》》が4割近く

問37 あなたは、子育てをしている方々が、市などの様々な支援により、安心して子育てができていますか。（○は1つだけ）

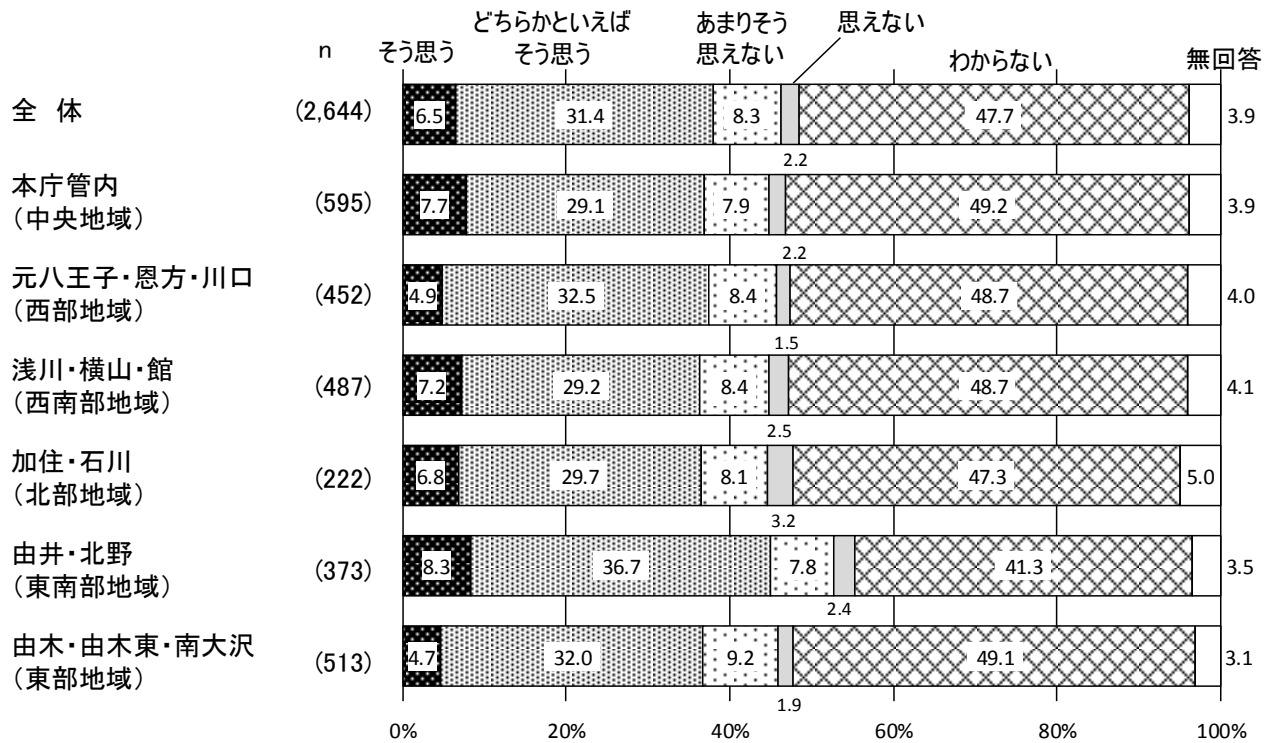
図3-36-1 市などの支援による子育ての状況－全体、経年比較



子育てをしている方々が、市などの様々な支援により、安心して子育てができていると思うか聞いたところ、「そう思う」（6.5％）と「どちらかといえばそう思う」（31.4％）を合わせた《《そう思う》》（37.9％）が4割近くとなっている。一方、「あまりそう思えない」（8.3％）と「思えない」（2.2％）を合わせた《《そう思えない》》（10.5％）は約1割となっている。

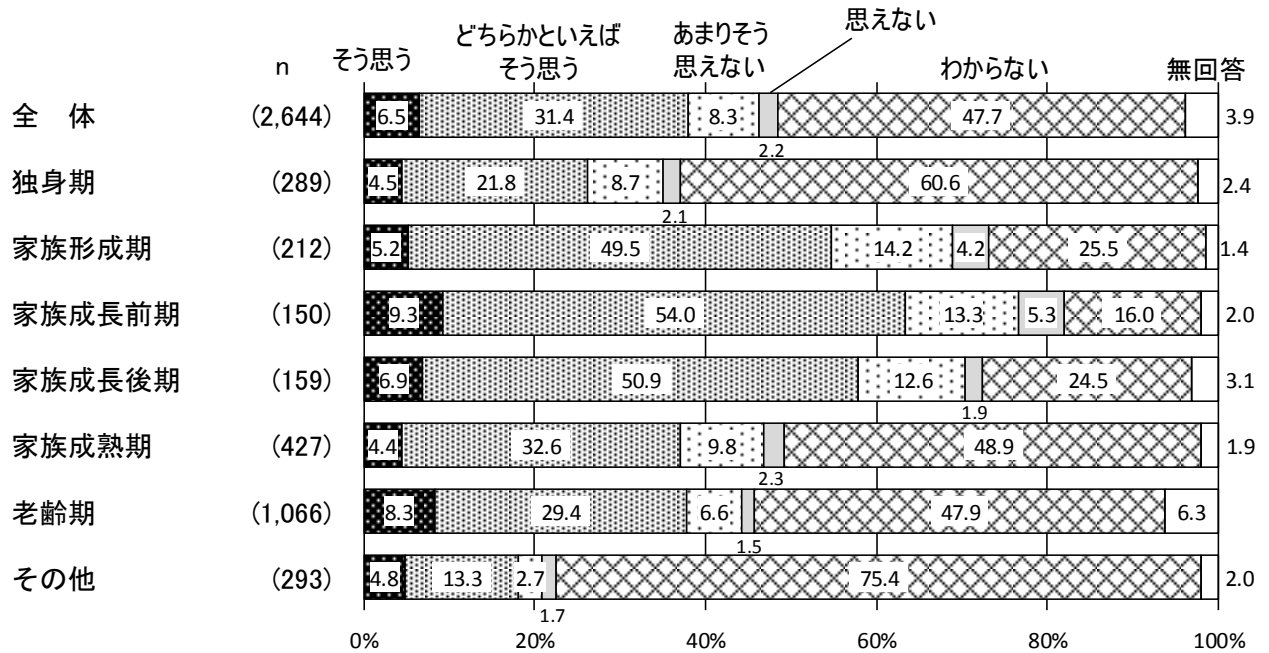
前回までの調査と比較すると、平成29年と似た回答分布となっており、平成29年からの大きな傾向の違いはみられない。（図3-36-1）

図 3-36-2 市などの支援による子育ての状況－居住地地域別



居住地地域別にみると、《そう思う》が由井・北野（東南部地域）（45.0%）で多くなっているのを除くと、大きな傾向の違いはみられない。（図 3-36-2）

図 3-36-3 市などの支援による子育ての状況－ライフステージ別



ライフステージ別にみると、「《そう思う》」は家族形成期から家族成長前期、家族成長後期の3層で5割を超えて多く、中でも家族成長前期（63.3%）で6割強と多くなっているが、「《そう思えない》」もこの3層で多く、中でも家族成長前期（18.6%）と家族形成期（18.4%）の両層で2割近くと多くなっている。（図 3-36-3）

(37) 安心した子育てができていないと思う理由（自由意見）

（問37で「あまりそう思えない」または「思えない」とお答えの方に）

問37－1 そのように感じる理由があれば、お書きください。（自由記述）

子育てをしている方々が、市などの様々な支援により、安心して子育てができていくのかについて「あまりそう思えない」または「思えない」と答えた278人に、そのように思う理由を自由記述形式で聞いたところ、190人から回答があった。その中から抜粋した意見を掲載した。なお、内容については、記述の趣旨を損なわないように留意しながら一部要約したものがある。

○市の支援が少なく、質や内容もあまり良くない。もっと簡単に手続きができ、満足いく支援がほしい。（女性18～29歳）

○子供が3人いて経済的に苦しさを感じる。将来、経済的な理由で教育に差がでないか心配。

（男性30～39歳）

○障害のある子どものいる家庭の困りごとを相談できる場所がない。（男性30～39歳）

○小・中学校などで発達障害と思われるお子さんが増えているのに、支援がなく生きづらそうにしている場面をよくみるため。（女性40～49歳）

○他の市と比べると、放課後に学校に残ることもできず、学童も有料で、しかも待機児童も多く、2年生で学童に入れず困ったりしている姿をみる。また学童の充実度が、小学校ごとに違うのも気になる。（女性40～49歳）

○地域との関わりが少なくなっているのを感じる。大人が子供にあまり関心がない。小、中学校の運動会の時期にでる音楽や子供たちの歓声に苦情を入れる住民がいるのは残念。（男性40～49歳）

○学童に預けられる期間が小学3年生までで、その後はほとんどがかぎっ子になってしまう。昼間は校庭や公園で遊び、夕方には同じような子供たちが集まって勉強やコミュニケーションできる場所があれば良いと思う。（男性40～49歳）

○何をどう支援してくれるのかが伝わってこないし、情報がない。申請すれば受けられる補助金や助成金など、知らなければ損をする風潮があり、有益な情報が平等に分かち合えていないと感じる。（男性40～49歳）

○八王子市内の地域格差が大きく、それにより子どもの学力の差もあると感じている。一律な支援では、各地域のニーズに対応できていないことに不安がある。（女性40～49歳）

○保育所がまだ不足しているし、やっと入所できても自宅から離れていてかなり大変。

（女性40～49歳）

○中学校給食が充実していない。（男性50～59歳）

○不登校児への対応。学校と保護者だけで抱えずに、対応できない場合は他の支援につなげていくべき。（女性50～59歳）

○地域の公園の整備や、近隣住民からの苦情で保育園児が自由に園庭で遊べないことなど、市としてもっと対策を行ってほしい。細やかな環境整備は市の仕事であると思う。（女性60～64歳）

○保育園が足りない状況下で、園庭もなく、すし詰め状態の保育室でも、認可園としており、保育水準を下げていると思う。もっと保育の質を良くし、環境を良くしてほしい。また、保育士の賃金向上や、研修なども実施し、安心して子供を預けられるようにしてほしい。（女性65歳以上）

(38) 市民協働の進捗状況

◇《そう思う》が5割強

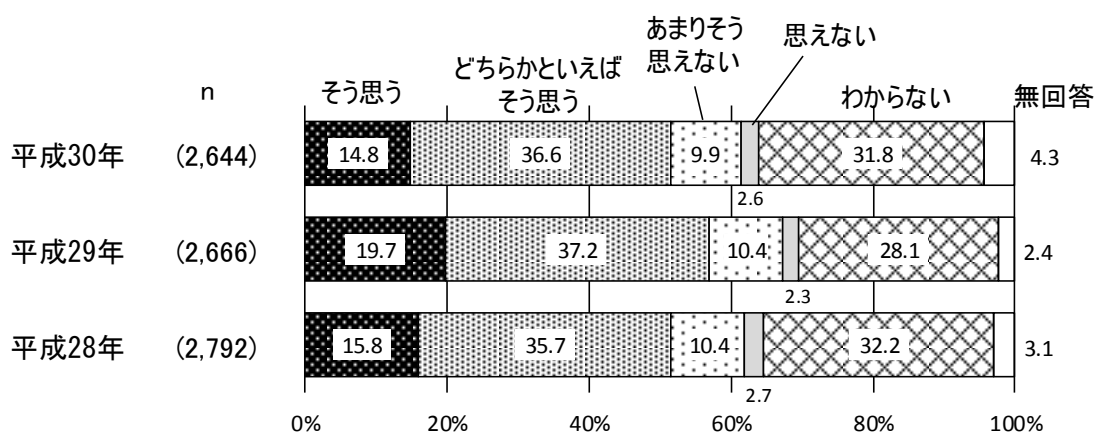
問38 あなたは、市が、市民と協力してまちづくりを行う「市民協働」を進めていると思いますか。(○は1つだけ)

※市民協働によるまちづくりとは・・・

- 八王子まつり、いちょう祭り、環境フェスティバルなどを市民と市が協力して開催
- 町会・自治会等が主体となって行う防犯・防災活動や環境美化活動
- 公園や道路の維持活動（清掃や除草などのボランティア活動）を地域の住民の方が担う
アドプト制度
- 各種審議会や市の計画策定などに参加していただく市民委員の公募
- 計画、条例等の作成過程におけるパブリックコメント（意見募集）の実施

など

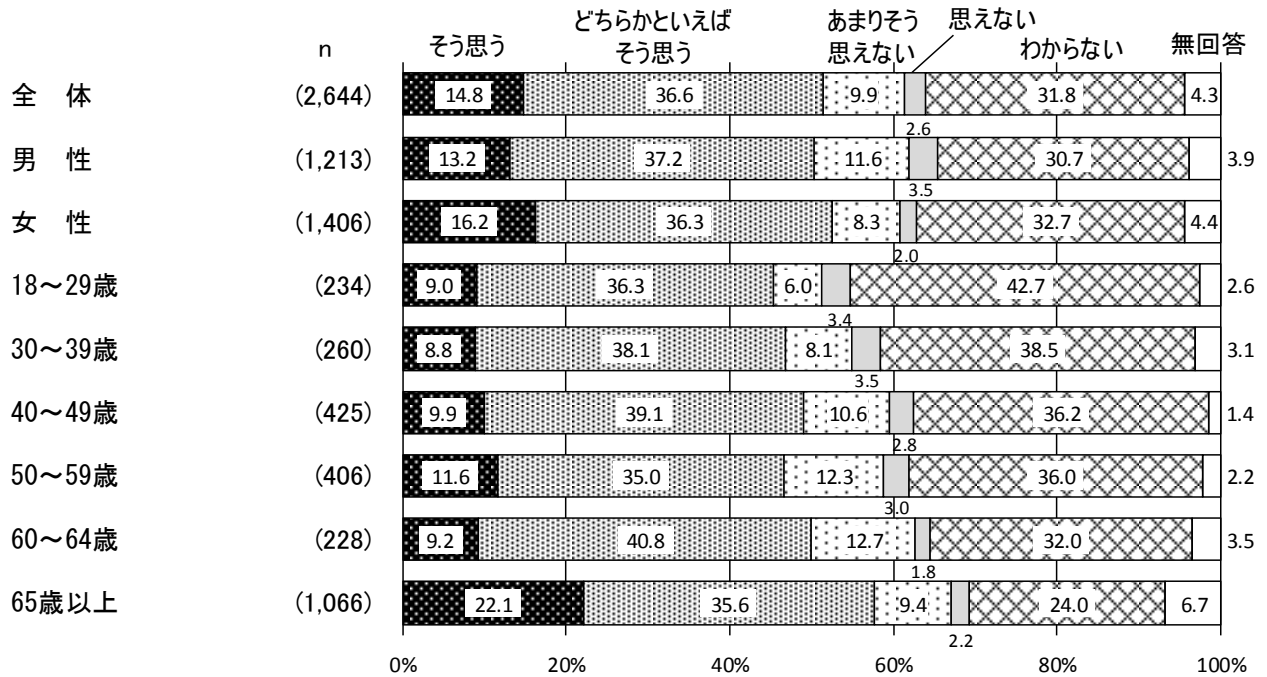
図3-38-1 市民協働の進捗状況－全体、経年比較



市が、市民と協力してまちづくりを行う「市民協働」を進めていると思うか聞いたところ、「そう思う」(14.8%)と「どちらかといえばそう思う」(36.6%)を合わせた《そう思う》(51.4%)が5割強となっている。一方、「あまりそう思えない」(9.9%)と「思えない」(2.6%)を合わせた《そう思えない》(12.5%)は1割強となっている。

前回までの調査と比較すると、《そう思う》は、平成29年(56.9%)より5.5ポイント減少し、平成28年(51.5%)と同程度となっている。(図3-38-1)

図 3-38-2 市民協働の進捗状況－性別、年齢別

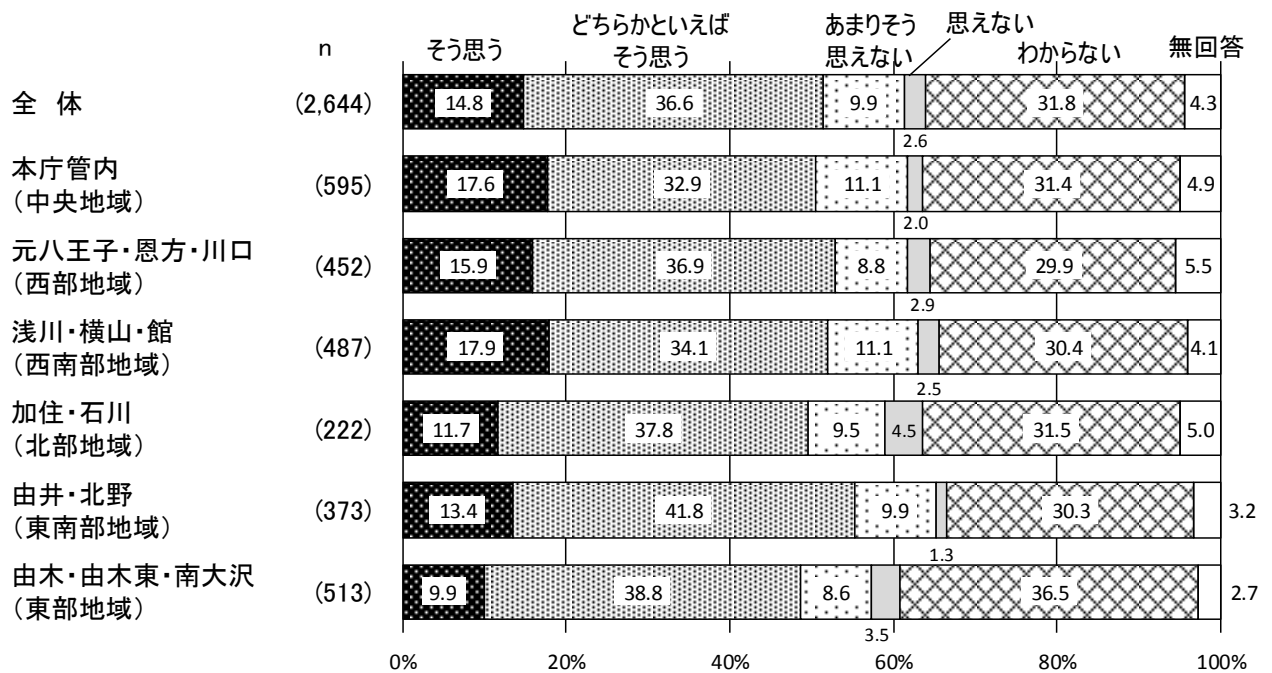


性別にみると、「《そう思えない》」は男性（15.1%）が女性（10.3%）より4.8ポイント高くなっている。

年齢別にみると、65歳以上で「《そう思う》」（57.7%）が6割近くと多くなっている。

（図 3-38-2）

図 3-38-3 市民協働の進捗状況－居住地域別



居住地域別にみると、「《そう思う》」は由井・北野（東南部地域）（55.2%）で多くなっている。

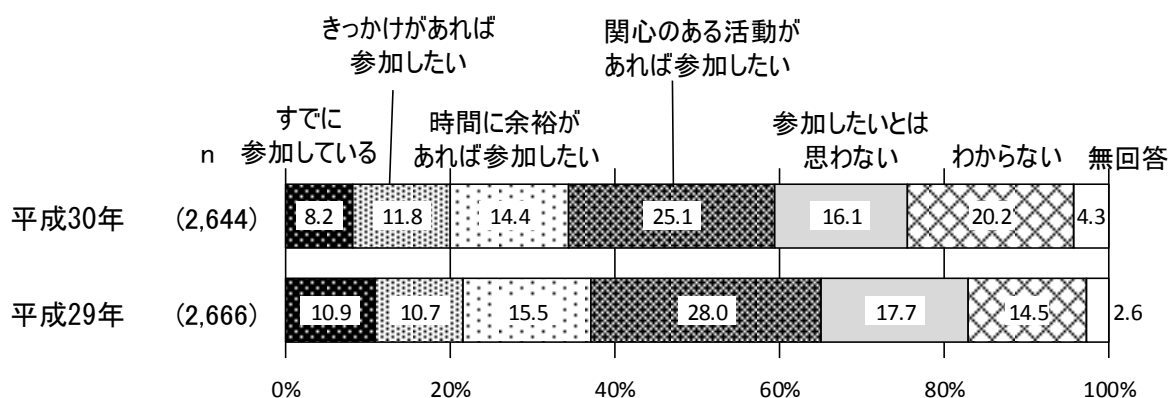
（図 3-38-3）

(39) 市民協働によるまちづくりへの参加意向

◇「関心のある活動があれば参加したい」が2割台半ば

問39 あなたは、問38で例示したような市民協働によるまちづくりに参加したいと思いますか。
(○は1つだけ)

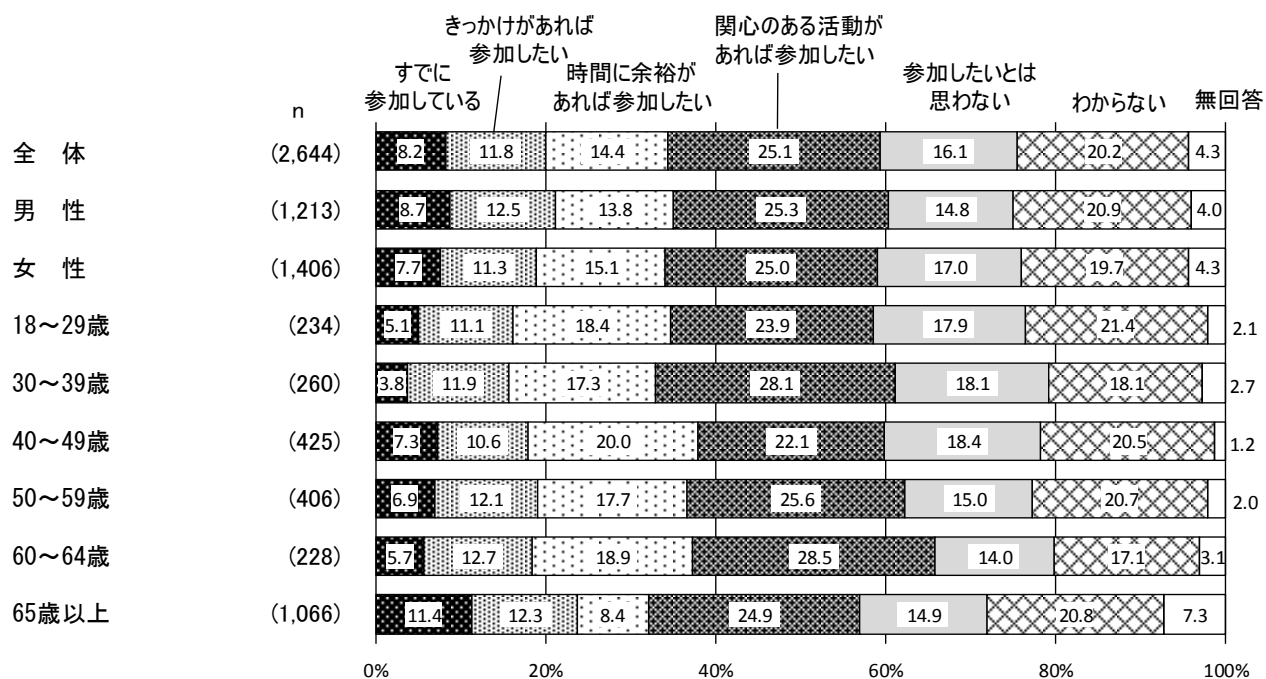
図3-39-1 市民協働によるまちづくりへの参加意向－全体、経年比較



市民協働によるまちづくりに参加したいと思うか聞いたところ、「すでに参加している」(8.2%)は1割近くとなっている。なお、「関心のある活動があれば参加したい」(25.1%)が2割台半ば、「時間に余裕があれば参加したい」(14.4%)が1割台半ば、「きっかけがあれば参加したい」(11.8%)が1割強となっており、これら3項目を合わせた《参加したい》(51.3%)は5割強となっている。一方、「参加したいとは思わない」(16.1%)は2割近くとなっている。

前回の結果と比較すると、「すでに参加している」(2.7ポイント減)と《参加したい》(2.9ポイント減)はともに減少している。(図3-39-1)

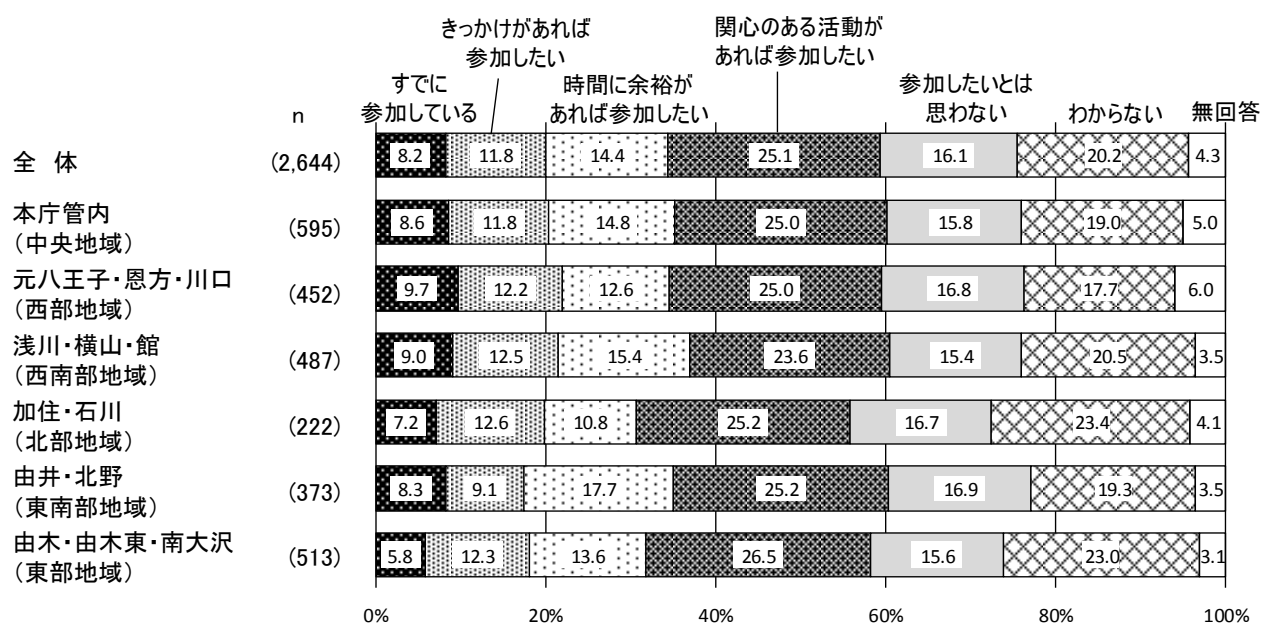
図 3-39-2 市民協働によるまちづくりへの参加意向－性別、年齢別



性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、大きな傾向の違いはみられないが、「～参加したい」の3項目を合わせた《参加したい》は60～64歳（60.1%）が約6割と多くなっている。（図3-39-2）

図 3-39-3 市民協働によるまちづくりへの参加意向－居住地域別



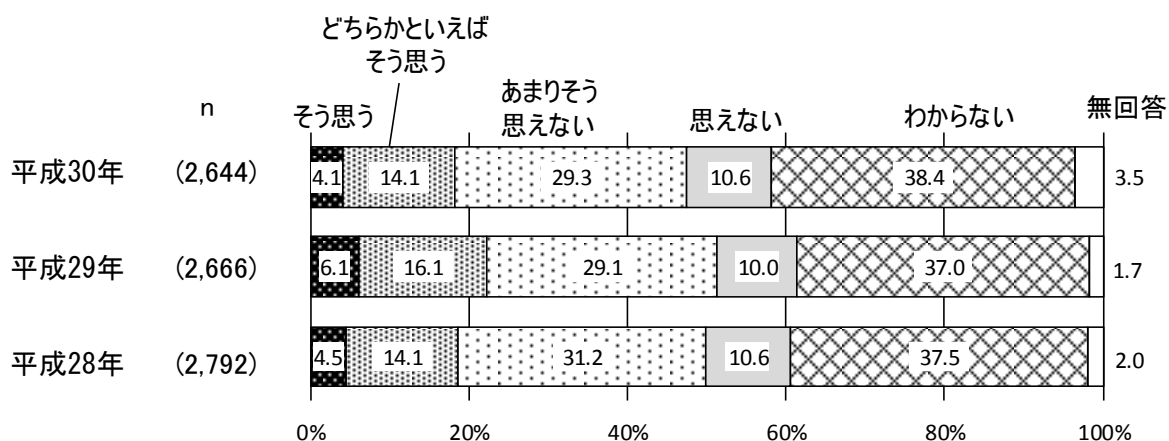
居住地域別にみると、加住・石川（北部地域）で「～参加したい」の3項目を合わせた《参加したい》（48.6%）が少なくなっている。（図3-39-3）

(40) 大学等のまちづくりへの活用

◇《《そう思う》が2割近く

問40 あなたは、市内およびその周辺地域に立地している大学・短大・高等専門学校の高度な専門的知識や学生の活力が、まちづくりに活かされていると思いますか。(○は1つだけ)

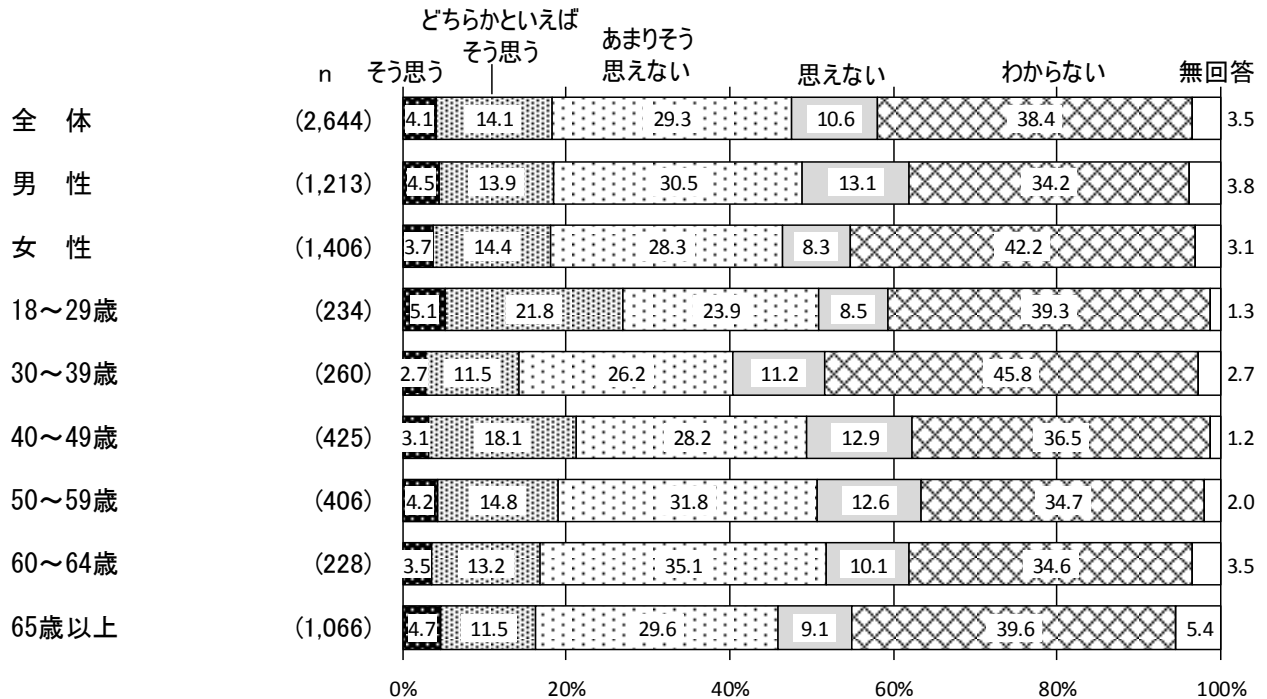
図3-40-1 大学等のまちづくりへの活用－全体、経年比較



大学・短大・高等専門学校の高度な専門的知識や学生の活力がまちづくりに活かされていると思うか聞いたところ、「そう思う」(4.1%)と「どちらかといえばそう思う」(14.1%)を合わせた《《そう思う》》(18.2%)が2割近くとなっている。一方、「あまりそう思えない」(29.3%)と「思えない」(10.6%)を合わせた《《そう思えない》》(39.9%)は4割弱となっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は平成29年(22.2%)より4.0ポイント減少し、平成28年(18.6%)と同程度となっている。(図3-40-1)

図 3-40-2 大学等のまちづくりへの活用—性別、年齢別

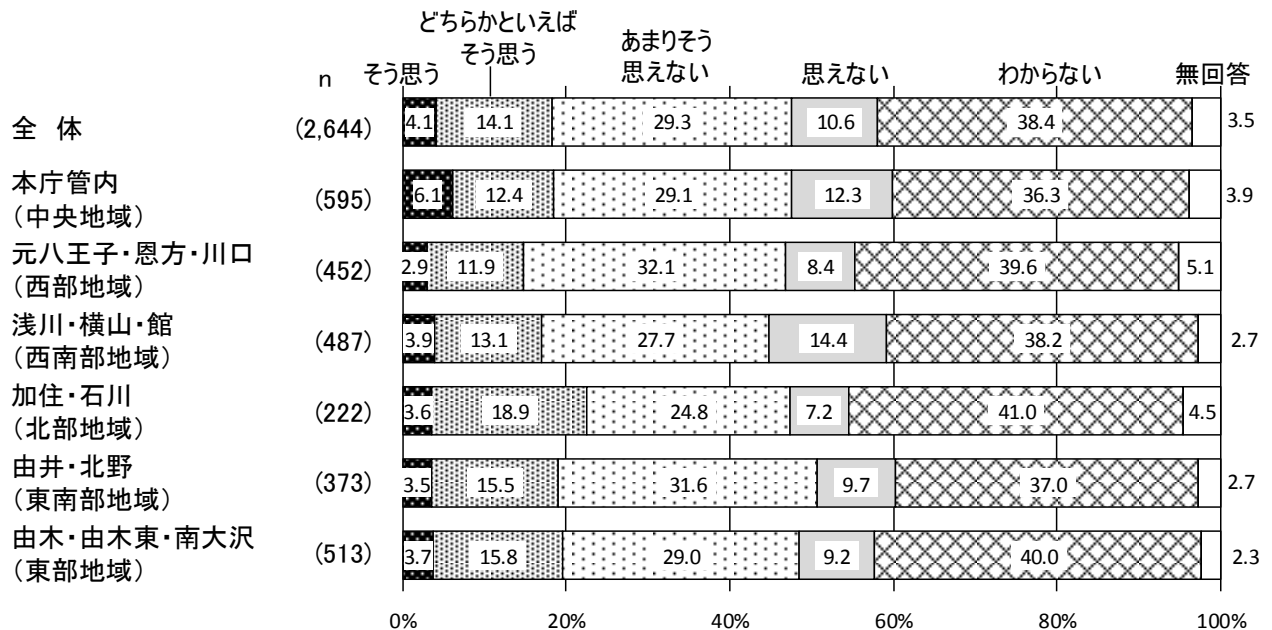


性別にみると、「思えない」は男性（43.6%）が女性（36.6%）より7.0ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「そう思う」は18～29歳（26.9%）で3割近くと多くなっている。一方、「思えない」は60～64歳（45.2%）と50～59歳（44.4%）が4割台半ばで多くなっている。

（図 3-40-2）

図 3-40-3 大学等のまちづくりへの活用—居住地域別



居住地域別にみると、加住・石川（北部地域）で「そう思う」（22.5%）が多くなっている。

（図 3-40-3）

(41) この1年間の文化芸術活動への参加頻度

◇「半年に1～2回程度」が2割近く

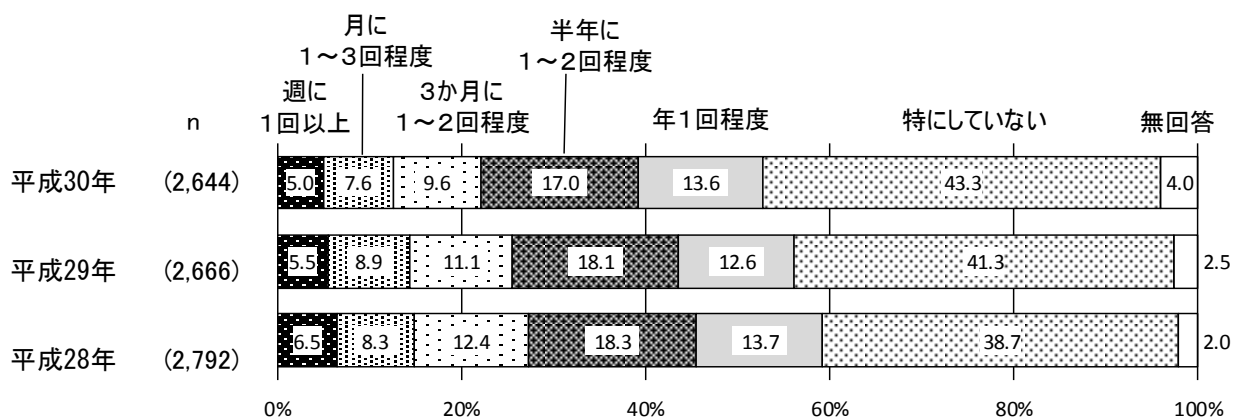
問41 あなたは、この1年間にどのくらいの頻度で文化芸術活動に参加（観賞も含みます）しましたか。（○は1つだけ）

※文化芸術活動とは・・・

- 音楽（オペラ、オーケストラ、合唱、吹奏楽、ジャズなど）
- ポップス（J-POP（日本の若者向けポピュラー音楽）など）
- 美術（絵画、版画、彫刻、工芸、陶芸、書、写真など）
- メディア芸術（映画、マンガ、アニメーション、メディアアートなど）
- 伝統芸能（歌舞伎、落語、車人形、雅楽、能楽など）
- 歴史的な建物や遺跡（建造物、史跡、名勝など）
- 文学（小説、詩、短歌、俳句など）
- 生活文化（茶道、華道、書道、囲碁、将棋など）
- 演劇（現代演劇、ミュージカル、人形劇など）
- 舞踊（日本舞踊、バレエ、コンテンポラリーダンスなど）
- 芸能（落語、講談、浪曲、漫才など）

など

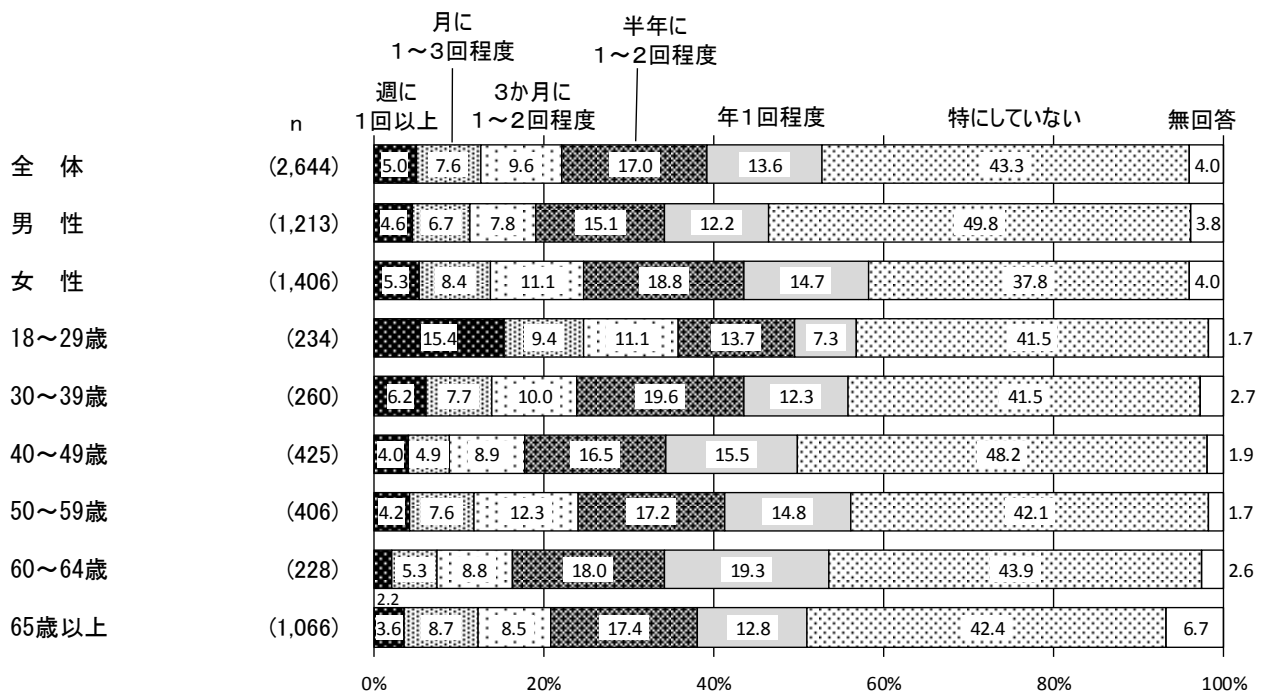
図3-41-1 この1年間の文化芸術活動への参加頻度－全体、経年比較



この1年間にどのくらいの頻度で文化芸術活動に参加したか聞いたところ、「半年に1～2回程度」（17.0％）が2割近く、「年1回程度」（13.6％）が1割強となっている。一方、「特にしていない」（43.3％）は4割強となっている。

前回までの調査と比較すると、「特にしていない」が2年続けて微増しており、文化芸術活動参加者は2年続けて少なくなっている。（図3-41-1）

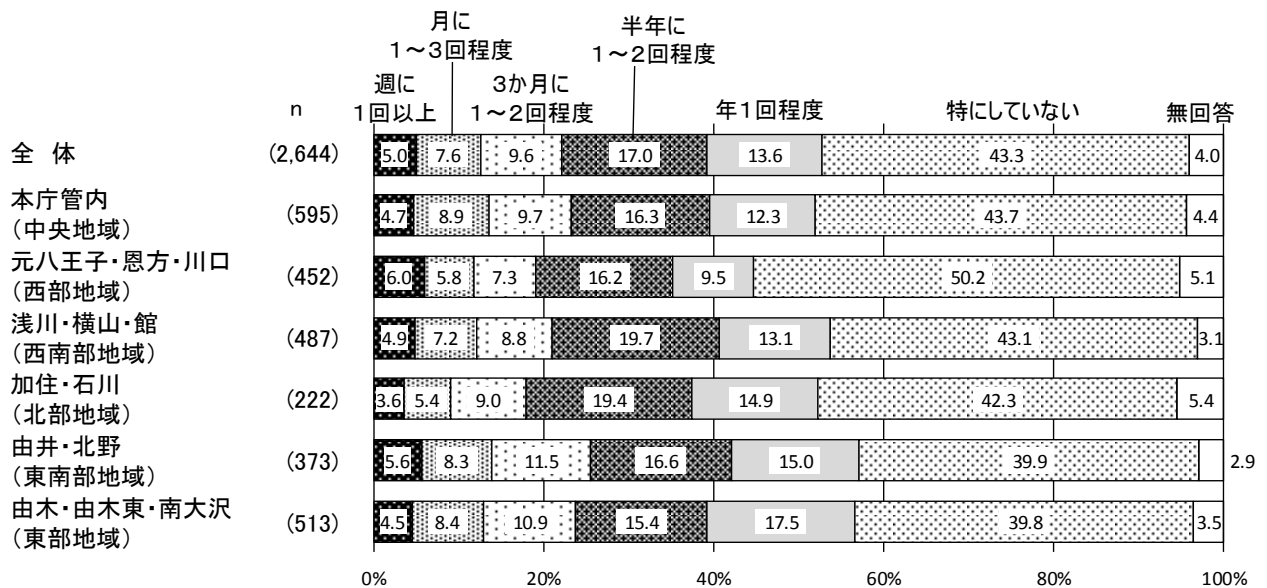
図 3-41-2 この1年間の文化芸術活動への参加頻度－性別、年齢別



性別にみると、「特にしていない」は男性（49.8%）が女性（37.8%）より12.0ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「週に1回以上」は18～29歳（15.4%）で1割台半ばと多くっており、「特にしていない」は40～49歳（48.2%）で5割近くと多くになっている。（図3-41-2）

図 3-41-3 この1年間の文化芸術活動への参加頻度－居住地域別



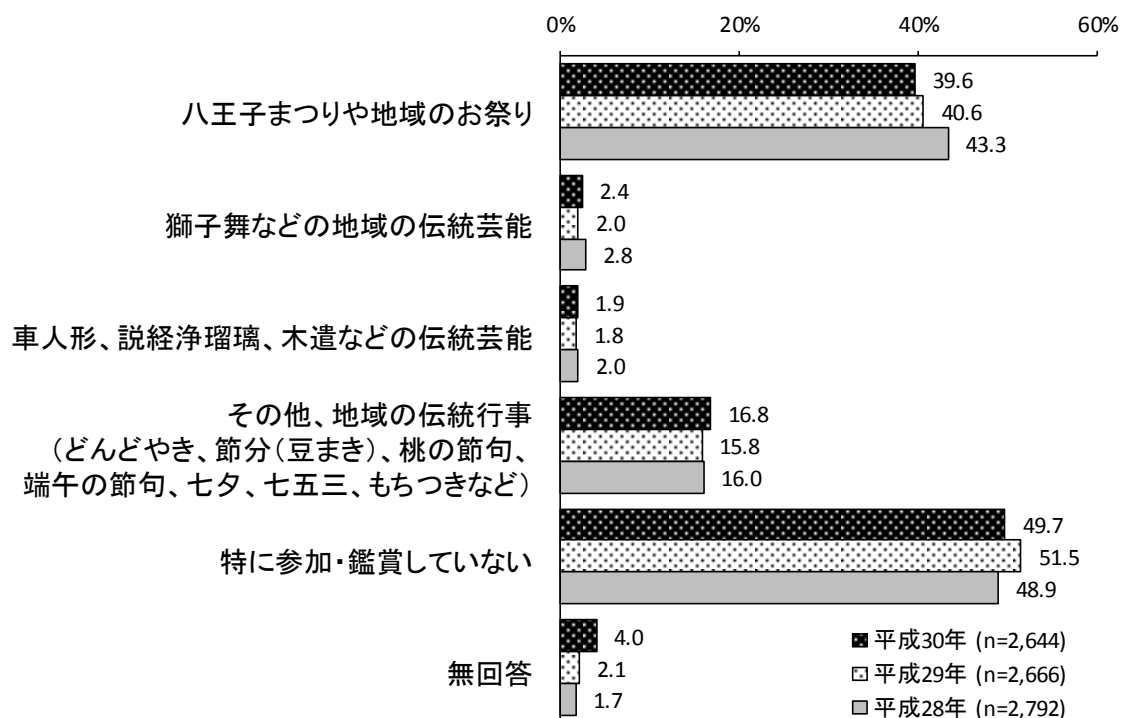
居住地域別にみると、「特にしていない」が元八王子・恩方・川口（西部地域）（50.2%）で約5割と多くになっている。（図3-41-3）

(42) この1年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況

◇「八王子まつりや地域のお祭り」が4割弱

問42 あなたは、この1年間に、次のような地域の伝統行事や伝統芸能に参加（鑑賞も含みます）しましたか。（○はいくつでも）

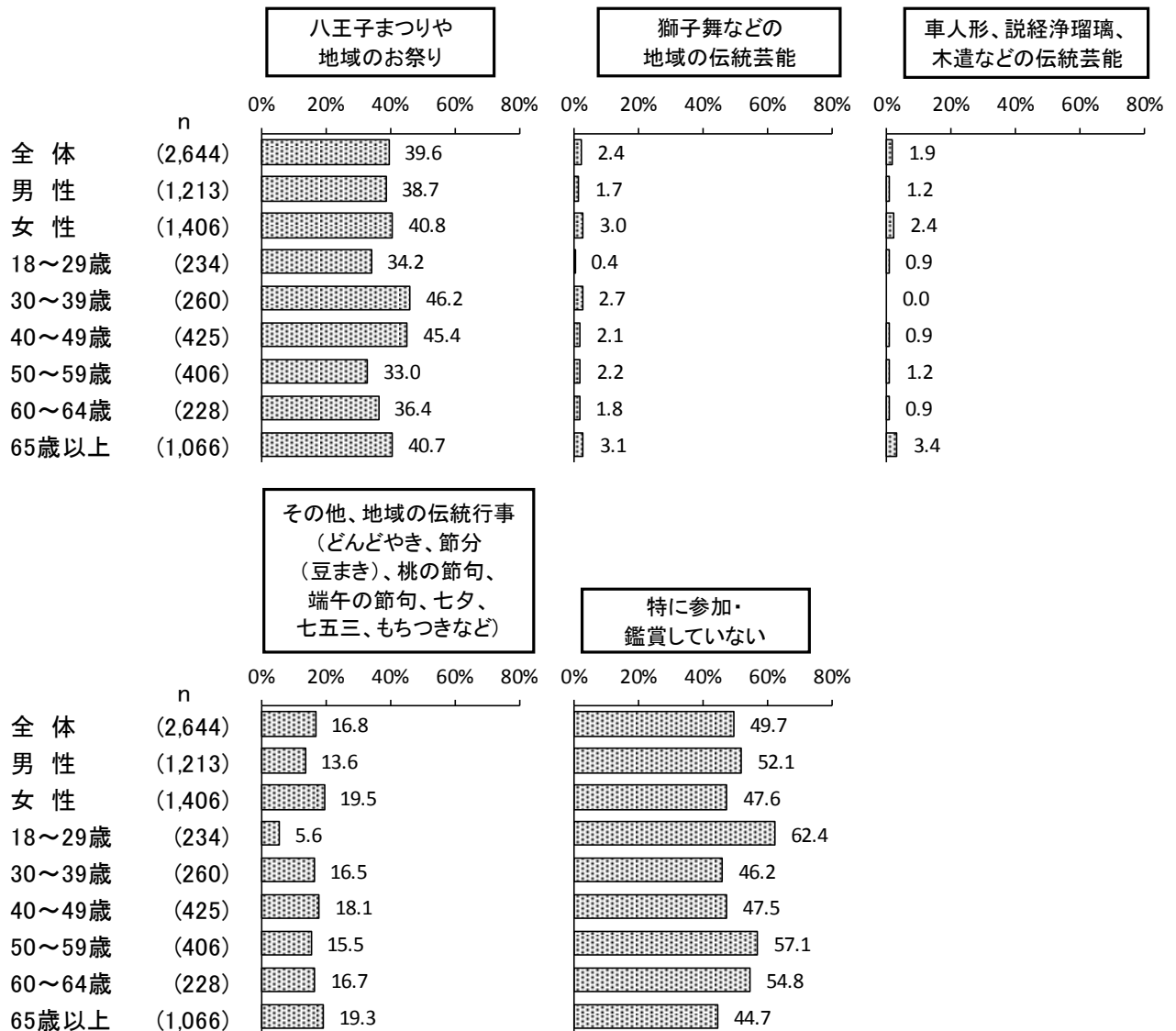
図3-42-1 この1年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況－全体、経年比較



この1年間に地域の伝統行事や伝統芸能に参加したか聞いたところ、「八王子まつりや地域のお祭り」(39.6%)が4割弱で最も多く、「その他、地域の伝統行事(どんとやき、節分(豆まき)など)」(16.8%)が2割近くで続くが、「獅子舞などの地域の伝統芸能」(2.4%)と「車人形、説経浄瑠璃、木遣などの伝統芸能」(1.9%)はそれぞれ1割に満たない。なお、「特に参加・鑑賞していない」(49.7%)は5割弱となっている。

前回までの調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられないが、「八王子まつりや地域のお祭り」は2年連続で微減傾向となっている。(図3-42-1)

図 3-42-2 この1年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況－性別、年齢別

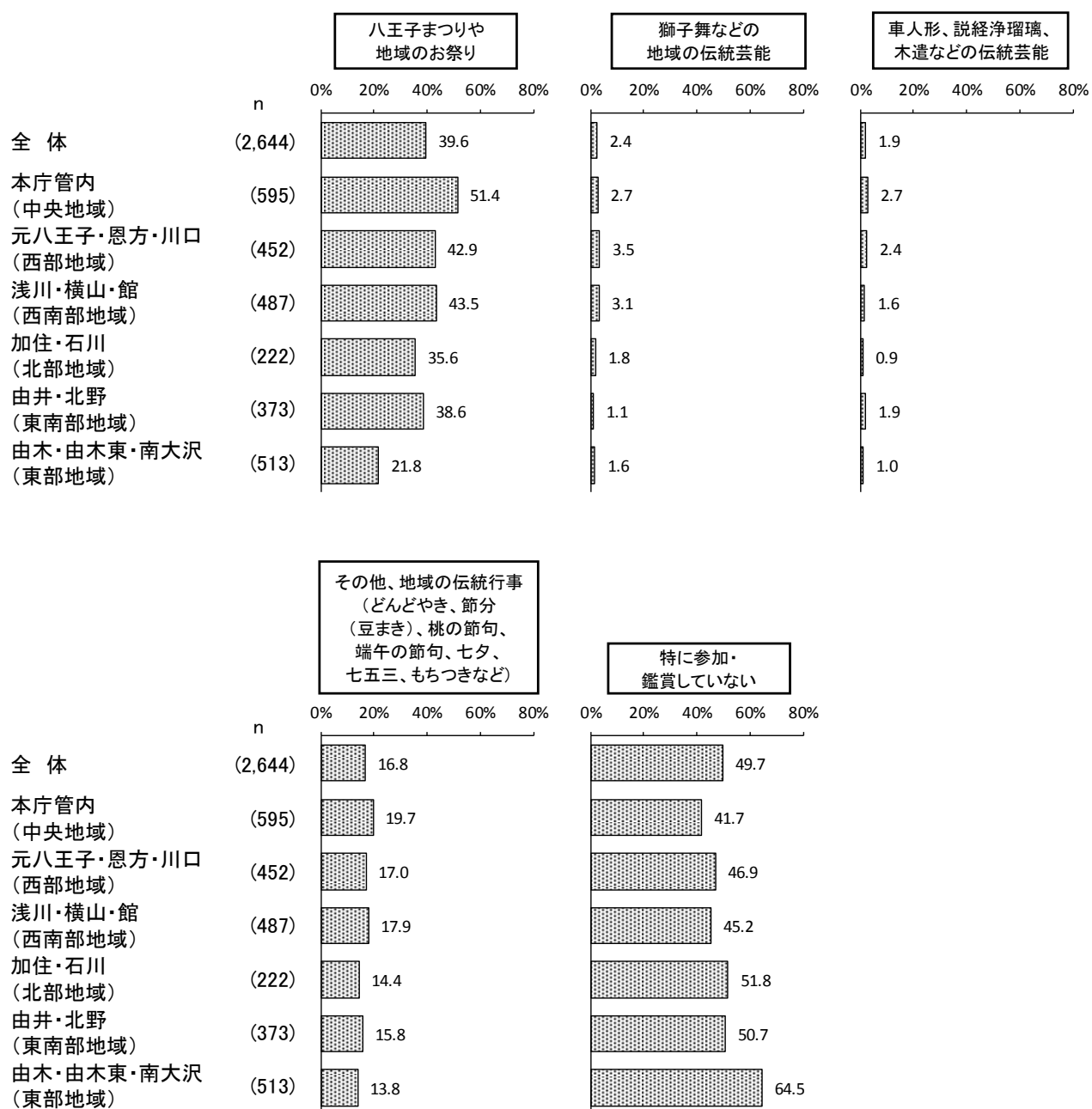


性別にみると、「その他、地域の伝統行事（どんどやき、節分（豆まき）など）」で女性（19.5%）が男性（13.6%）より5.9ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「八王子まつりや地域のお祭り」は30～39歳（46.2%）と40～49歳（45.4%）で4割台半ば～5割近くと多くなっている。一方、「特に参加・鑑賞していない」は18～29歳と50～59歳、60～64歳の各層で多く、中でも18～29歳（62.4%）で6割強と最も多くなっている。

（図 3-42-2）

図 3-42-3 この1年間の地域の伝統行事や伝統芸能への参加状況－居住地域別



居住地域別にみると、「八王子まつりや地域のお祭り」は本庁管内（中央地域）（51.4％）で5割強と多くなっている。一方、「特に参加・鑑賞していない」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（64.5％）で6割台半ばと多くなっている。（図 3-42-3）

(43) 海外友好交流都市の周知度

◇《知っている》が4割近く

問43 あなたは、市が海外友好交流都市との交流を進めていることを知っていますか。

(○は1つだけ)

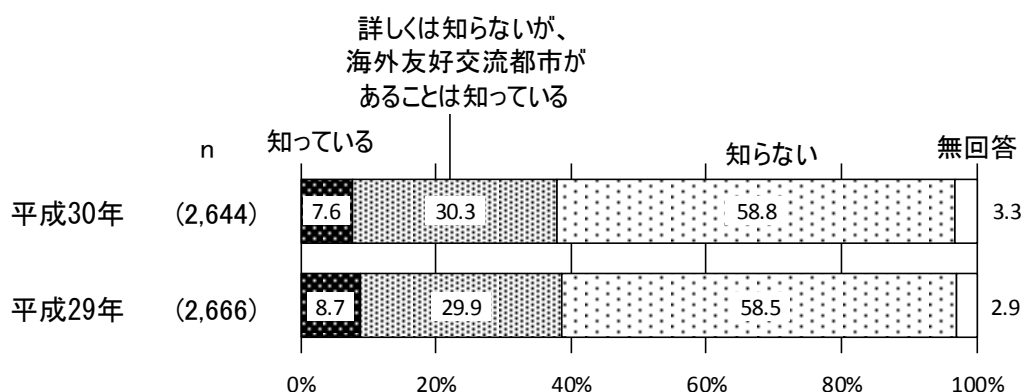
※「海外友好交流都市との交流」とは・・・

○平成18年の市制施行90周年を機に、幅広い市民交流が実現できるよう、市は中国・泰安（たいあん）市、台湾・高雄（たかお）市、韓国・始興（しふん）市の3都市との間で友好交流協定を締結し、文化・教育・スポーツなど様々な面で交流を実施しています。

交流実績：海外友好交流都市写真展、八王子まつりへの出演、サッカー交流 など

○また、市制100周年の節目である平成29年に、本市中町出身の医師・肥沼 信次（こえぬまのぶつぐ）博士ゆかりのドイツ・ヴリーツェン市と新たな友好交流協定を締結しました。

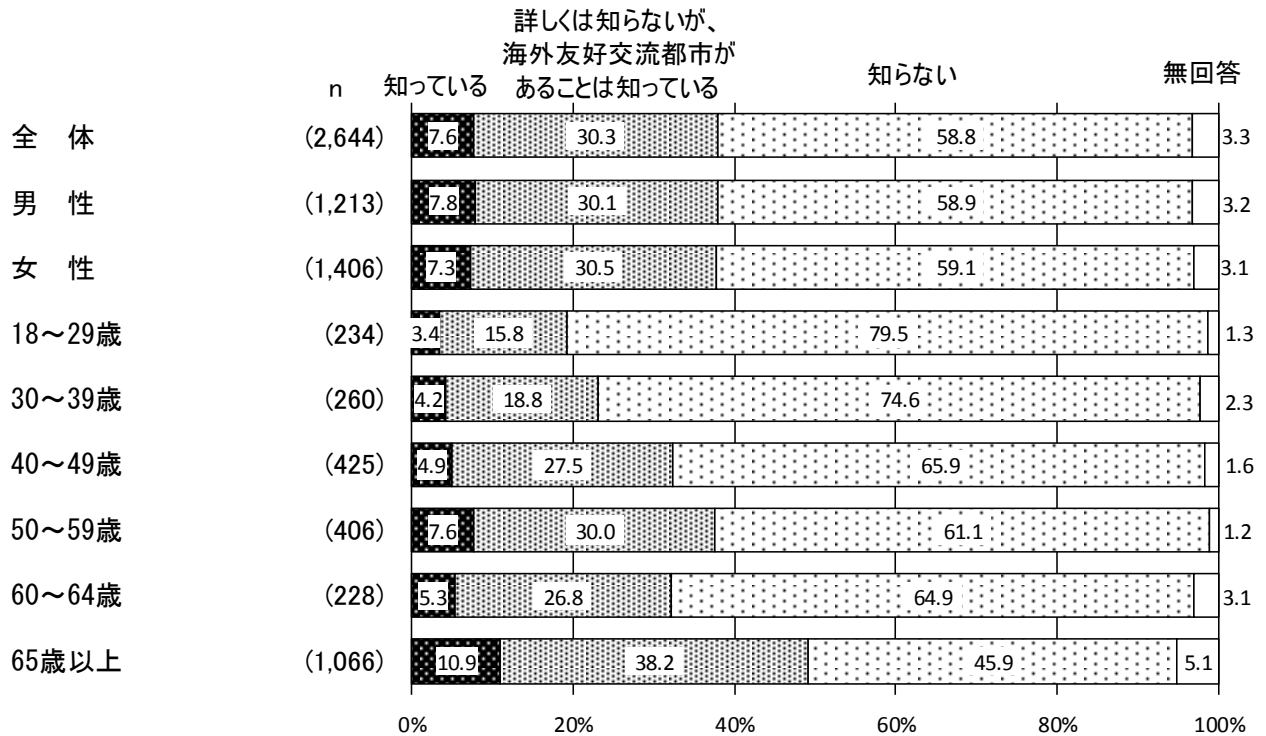
図3-43-1 海外友好交流都市の周知度－全体、経年比較



市が海外友好交流都市との交流を進めていることを知っているか聞いたところ、「知っている」（7.6%）と「詳しくは知らないが、海外友好交流都市があることは知っている」（30.3%）を合わせた《知っている》（37.9%）は4割近くとなっており、「知らない」（58.8%）が6割近くと多くなっている。

前回調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられない。（図3-43-1）

図 3-43-2 海外友好交流都市の周知度－性別、年齢別

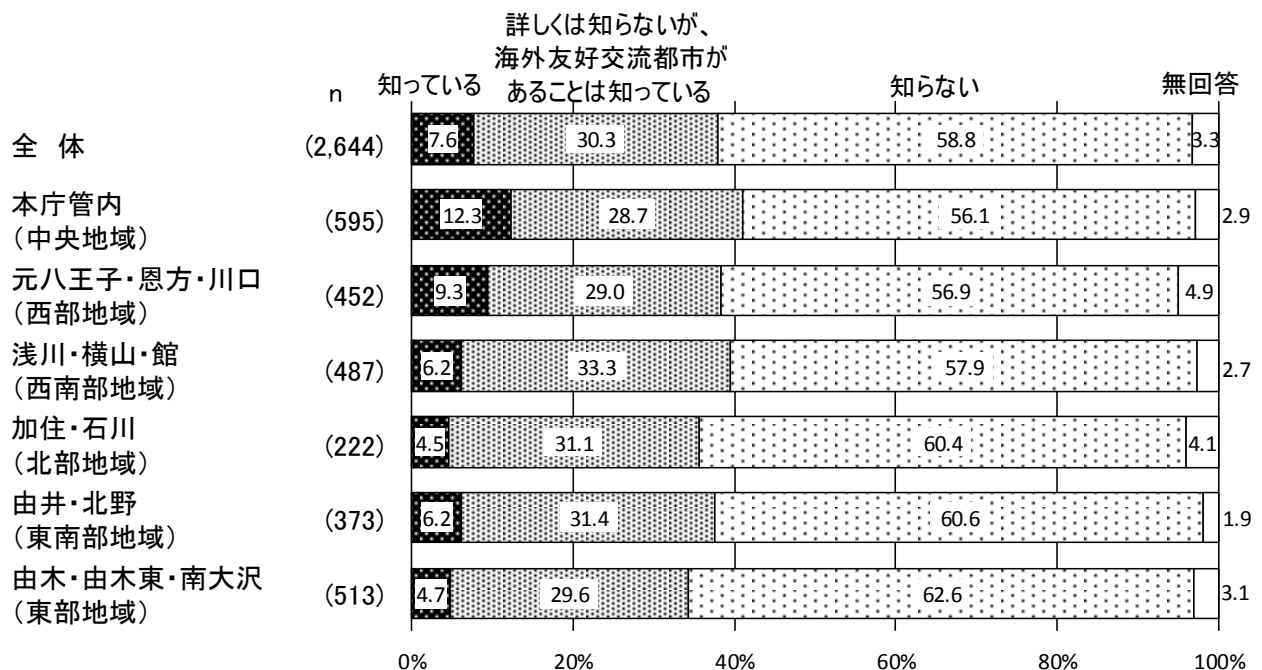


性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、「知っている」は65歳以上（49.1%）で5割弱と多くっており、「知らない」は18～29歳（79.5%）で8割弱、30～39歳（74.6%）で7割台半ばと多くなっている。

（図 3-43-2）

図 3-43-3 海外友好交流都市の周知度－居住地域別



居住地域別にみると、「知っている」が本庁管内（中央地域）（41.0%）で4割強と多くなっている。（図 3-43-3）

(44) 障害のある方への理解や配慮

◇《している》が7割近く

問44 あなたは日ごろ、障害のある方に対して、理解や適切な配慮をしていますか。

(○は1つだけ)

※「適切な配慮」とは・・・

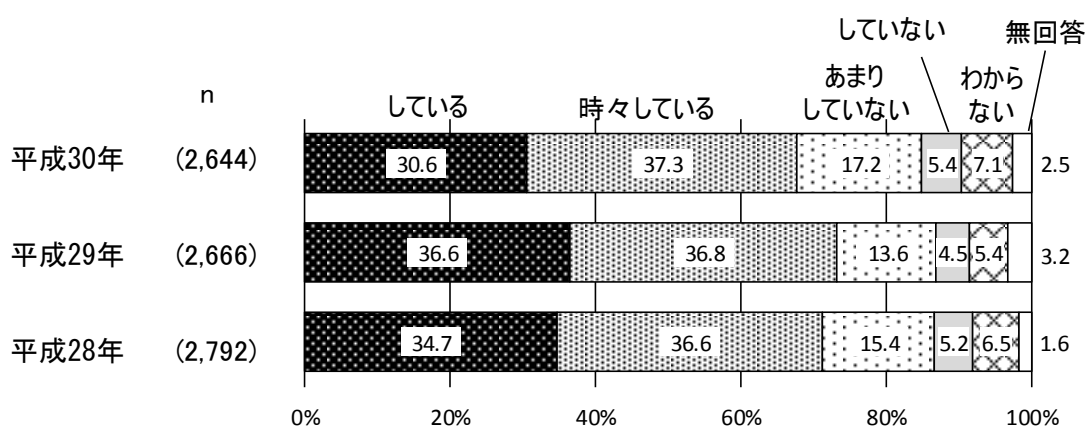
○困っている様子の方を見かけたら、声をかける。

○ゆっくりわかりやすく話すなどしたり、筆談したりするなど障害特性に応じたわかりやすいコミュニケーションの方法に心配りする。

○優先席、思いやり駐車スペース、点字ブロックなどを必要としている方の妨げにならないように配慮する。(聴覚障害、内部障害、難病など、外見からは障害がわかりにくい方々もいます。)

など

図3-44-1 障害のある方への理解や配慮－全体、経年比較

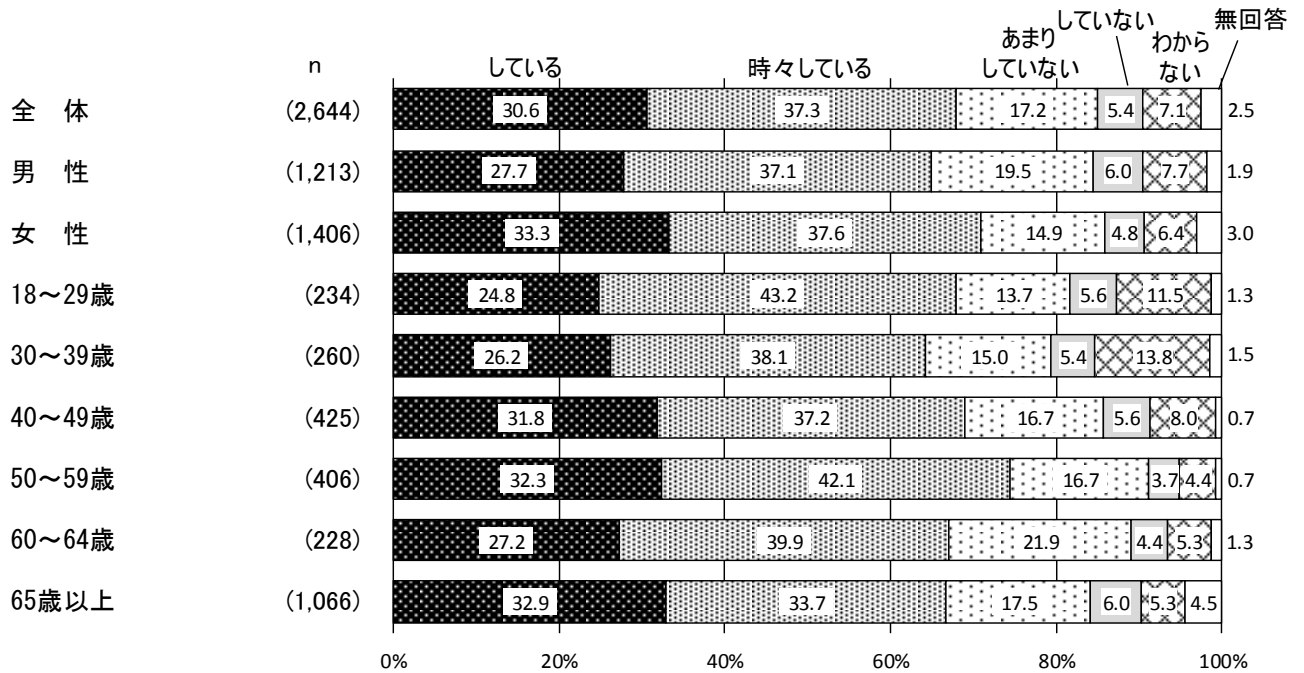


日ごろ、障害のある方に対して、理解や適切な配慮をしているか聞いたところ、「している」(30.6%)と「時々している」(37.3%)を合わせた《している》(67.9%)が7割近くとなっている。一方、「あまりしていない」(17.2%)と「していない」(5.4%)を合わせた《していない》(22.6%)が2割強となっている。

前回までの調査と比較すると、「している」が平成29年から6.0ポイント減少しており、「している」及び《している》の割合は平成30年が最近3年間の中で最も少なくなっている。

(図3-44-1)

図 3-44-2 障害のある方への理解や配慮－性別、年齢別

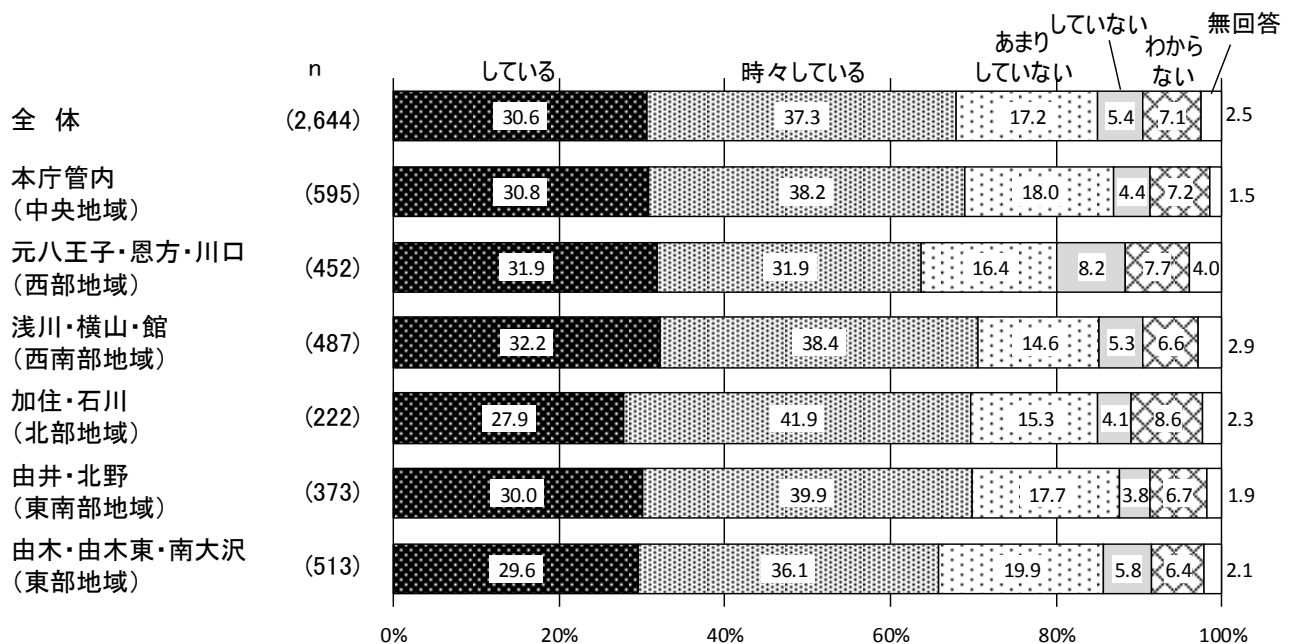


性別にみると、《している》は女性（70.9％）が男性（64.8％）より6.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《している》は50～59歳（74.4％）が7割台半ばで多くなっている。

（図 3-44-2）

図 3-44-3 障害のある方への理解や配慮－居住地域別



居住地域別にみると、《している》が浅川・横山・館（西南部地域）（70.6％）で約7割と最も多くなっている。（図 3-44-3）

(45) 高齢者ボランティア・ポイント制度の周知度

◇「知っている」は2割近く

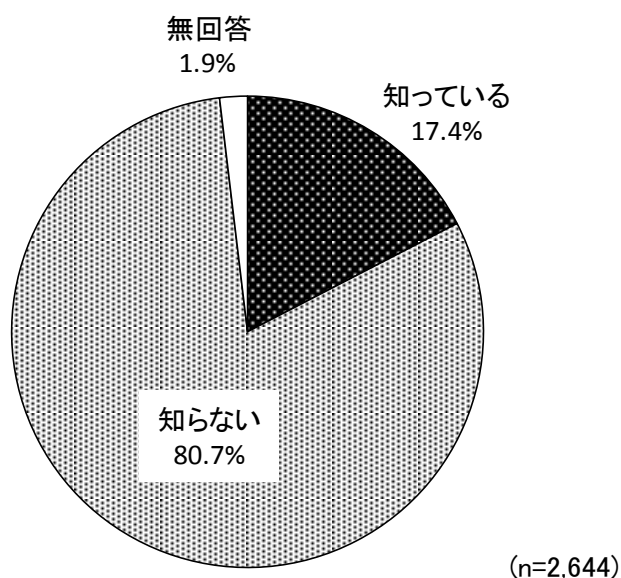
問45 あなたは、「高齢者ボランティア・ポイント制度」を知っていますか。

(○は1つだけ)

※高齢者ボランティア・ポイント制度とは・・・

65 歳以上の方が特別養護老人ホーム等の施設や団体、高齢者の自宅などでボランティア活動を行い、その成果を交付金や「道の駅八王子滝山」等で利用可能な共通利用券などと交換できる制度です。

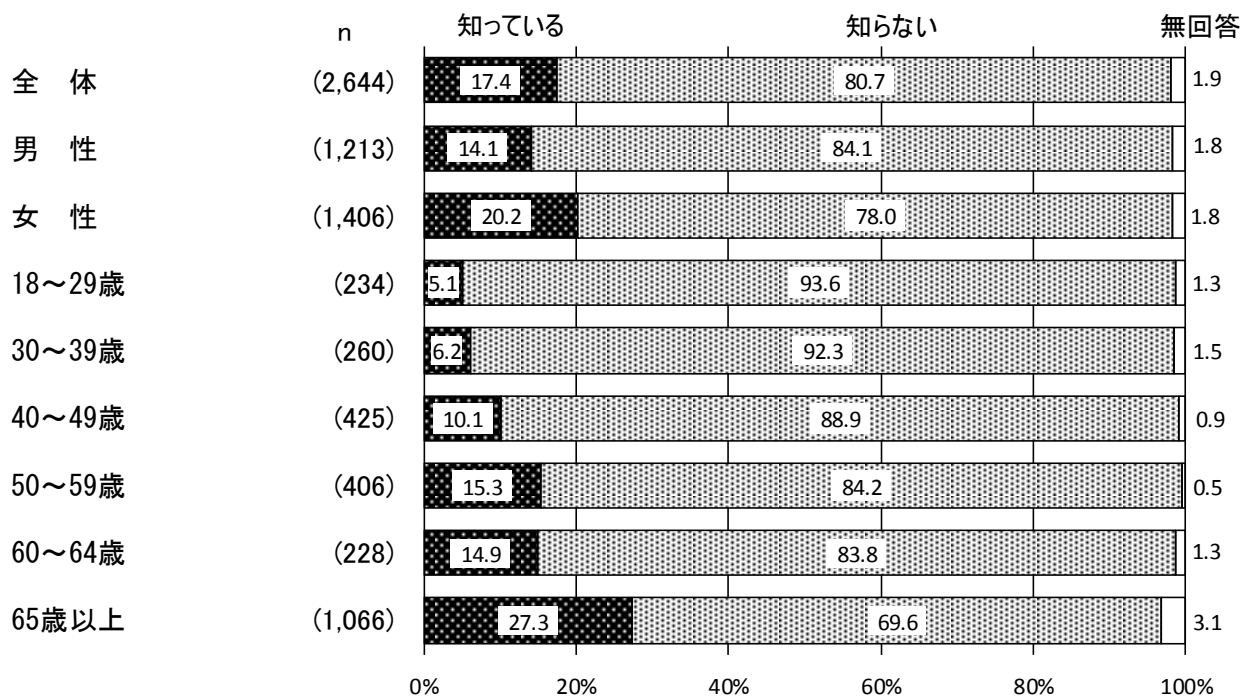
図 3-45-1 高齢者ボランティア・ポイント制度の周知度－全体



(注) 新規の設問のため、経年比較はない。

高齢者ボランティア・ポイント制度を知っているか聞いたところ、「知っている」(17.4%)は2割近くで、「知らない」(80.7%)が約8割となっている。(図 3-45-1)

図 3-45-2 高齢者ボランティア・ポイント制度の周知度－性別、年齢別

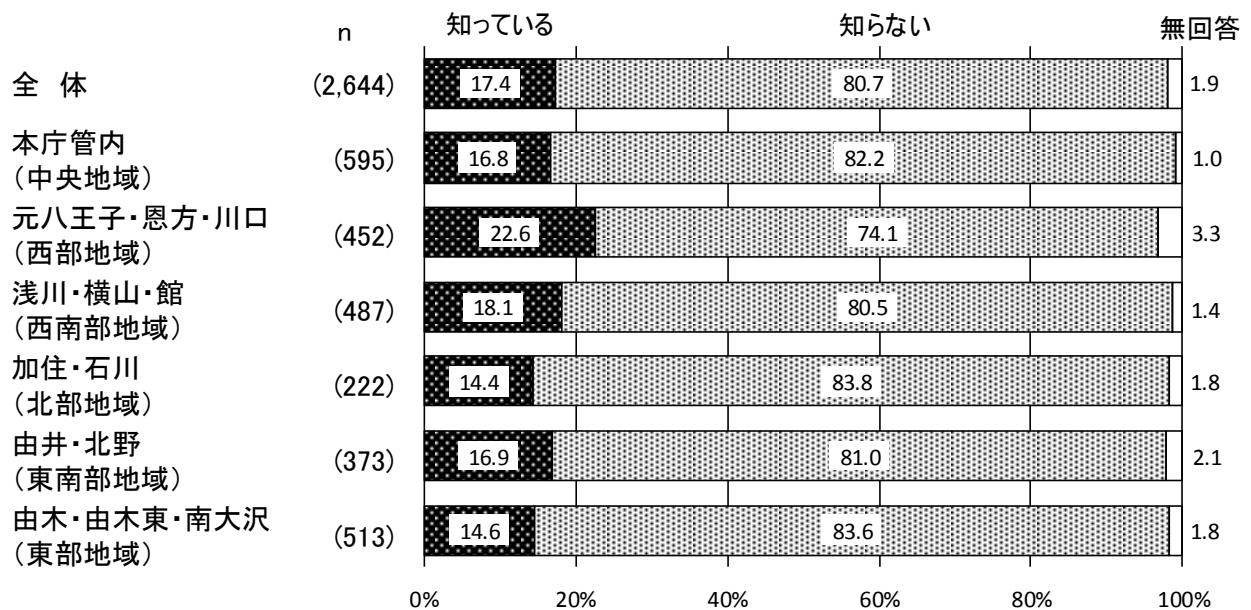


性別にみると、「知っている」は女性（20.2%）が男性（14.1%）より6.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「知っている」は65歳以上（27.3%）で3割近くと多くなっている。

（図 3-45-2）

図 3-45-3 高齢者ボランティア・ポイント制度の周知度－居住地域別



居住地域別にみると、「知っている」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（22.6%）が2割強で多くなっている。（図 3-45-3）

(46) 高齢者あんしん相談センターの周知度

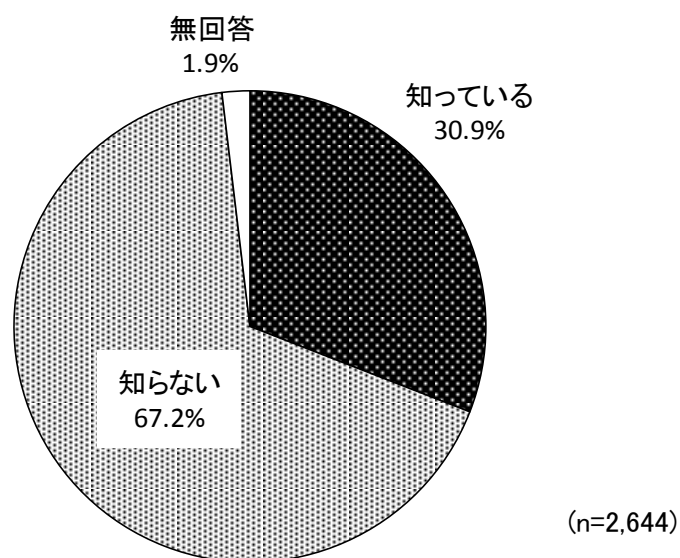
◇「知っている」が約3割

問46 あなたは、「高齢者あんしん相談センター」を知っていますか。(○は1つだけ)

※高齢者あんしん相談センターとは・・・

高齢者が住み慣れた地域でいつまでも自分らしく暮らせるよう、地域の身近な相談窓口として市内に17か所設置している施設です。介護保険法に規定された地域包括支援センターのことで、八王子市では親しみやすいようこの愛称を付けています。

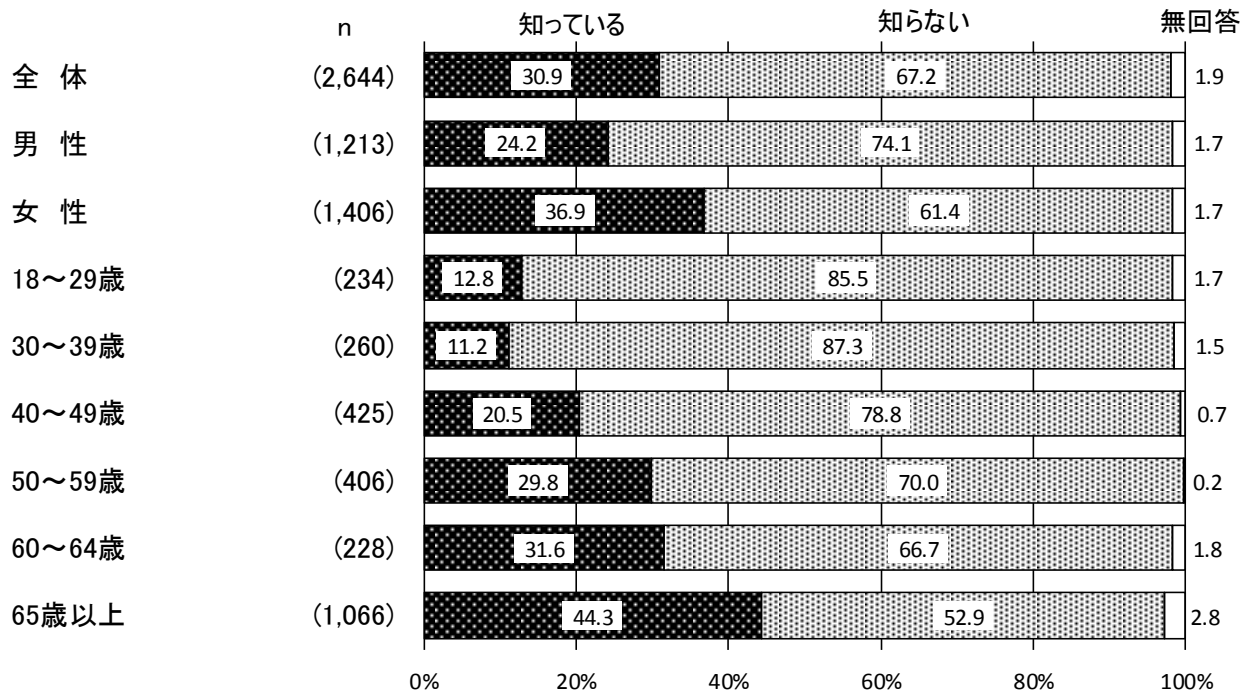
図3-46-1 高齢者あんしん相談センターの周知度－全体



(注) 新規の設問のため、経年比較はない。

高齢者あんしん相談センターを知っているか聞いたところ、「知っている」(30.9%)は約3割で、「知らない」(67.2%)が7割近くとなっている。(図3-46-1)

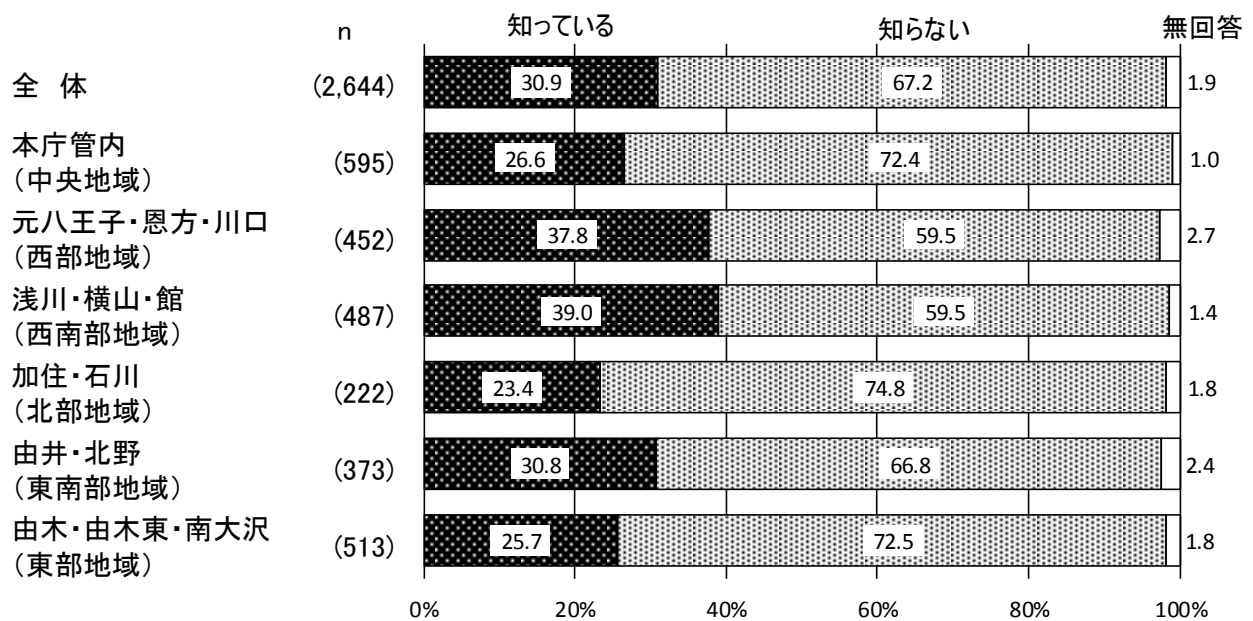
図 3-46-2 高齢者あんしん相談センターの周知度－性別、年齢別



性別にみると、「知っている」は女性（36.9％）が男性（24.2％）より12.7ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「知っている」は65歳以上（44.3％）で4割台半ばと多くなっている。（図3-46-2）

図 3-46-3 高齢者あんしん相談センターの周知度－居住地域別



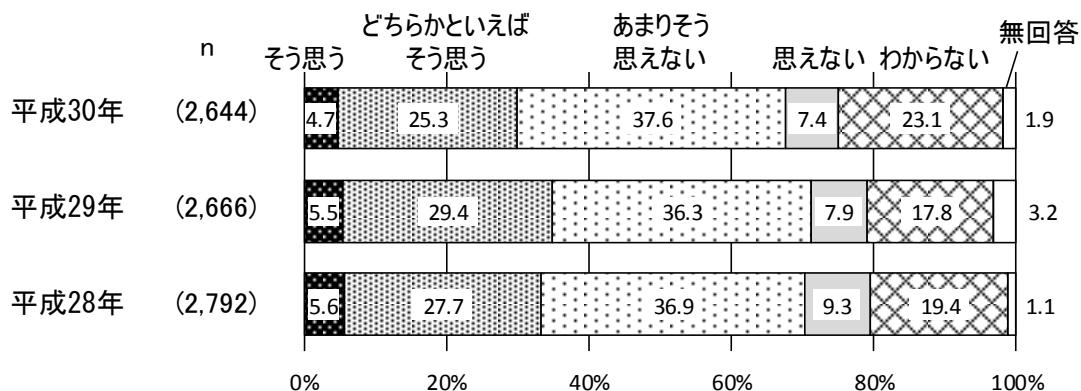
居住地域別にみると、「知っている」は浅川・横山・館（西南部地域）（39.0％）と元八王子・恩方・川口（西部地域）（37.8％）の両地域で3割台半ば以上と多くなっている。（図3-46-3）

(47) 誰もが安全で快適に暮らせるまち

◇《《そう思う》》が3割

問47 あなたは、市内の道路、公共・民間施設、交通機関などにおいて、高齢者や障害者、子ども連れなど誰もが安全で快適に移動したり、施設を利用したりできるまちになっていると思いますか。(〇は1つだけ)

図3-47-1 誰もが安全で快適に暮らせるまちー全体、経年比較

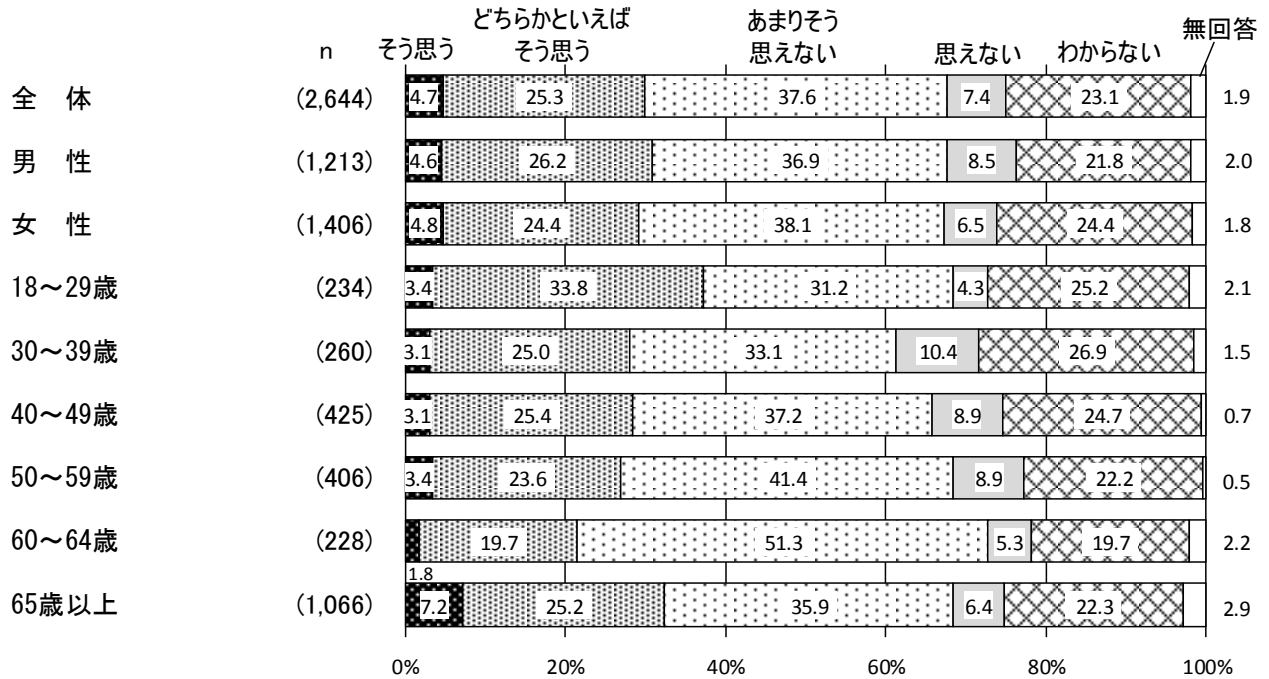


市内の道路、公共・民間施設、交通機関などにおいて、高齢者や障害者、子ども連れなど誰もが安全で快適に移動したり、施設を利用したりできるまちになっていると思うか聞いたところ、「そう思う」(4.7%)と「どちらかといえばそう思う」(25.3%)を合わせた《《そう思う》》(30.0%)が3割となっている。一方、「あまりそう思えない」(37.6%)と「思えない」(7.4%)を合わせた《《そう思えない》》(45.0%)は4割台半ばとなっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》の割合は最近3年間の中で最も低くなっている。

(図3-47-1)

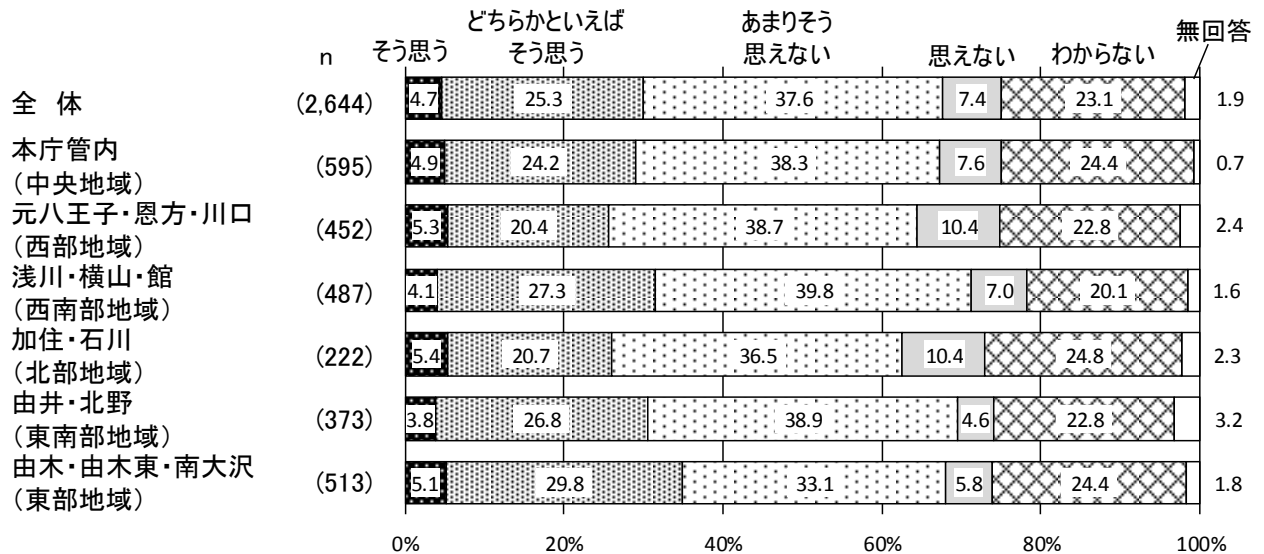
図 3-47-2 誰もが安全で快適に暮らせるまち—性別、年齢別



性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、「《そう思う》」は18～29歳（37.2%）で4割近くと多くっており、一方「《そう思えない》」は60～64歳（56.6%）で6割近くと多くになっている。（図 3-47-2）

図 3-47-3 誰もが安全で快適に暮らせるまち—居住地地域別



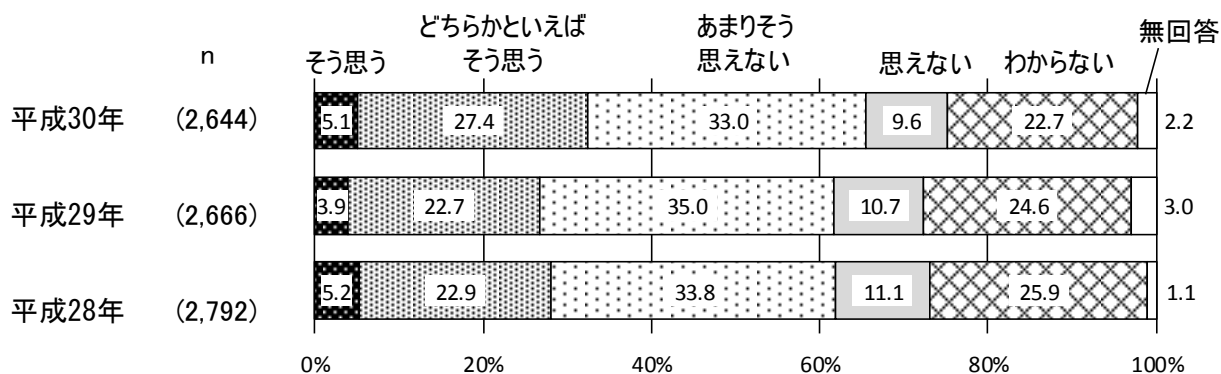
居住地地域別にみると、「《そう思う》」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（34.9%）が3割台半ばで多くになっている。（図 3-47-3）

(48) 市内の交通渋滞緩和

◇《《そう思う》》が3割強

問48 あなたは、市内の交通渋滞が緩和されていると思いますか。(○は1つだけ)

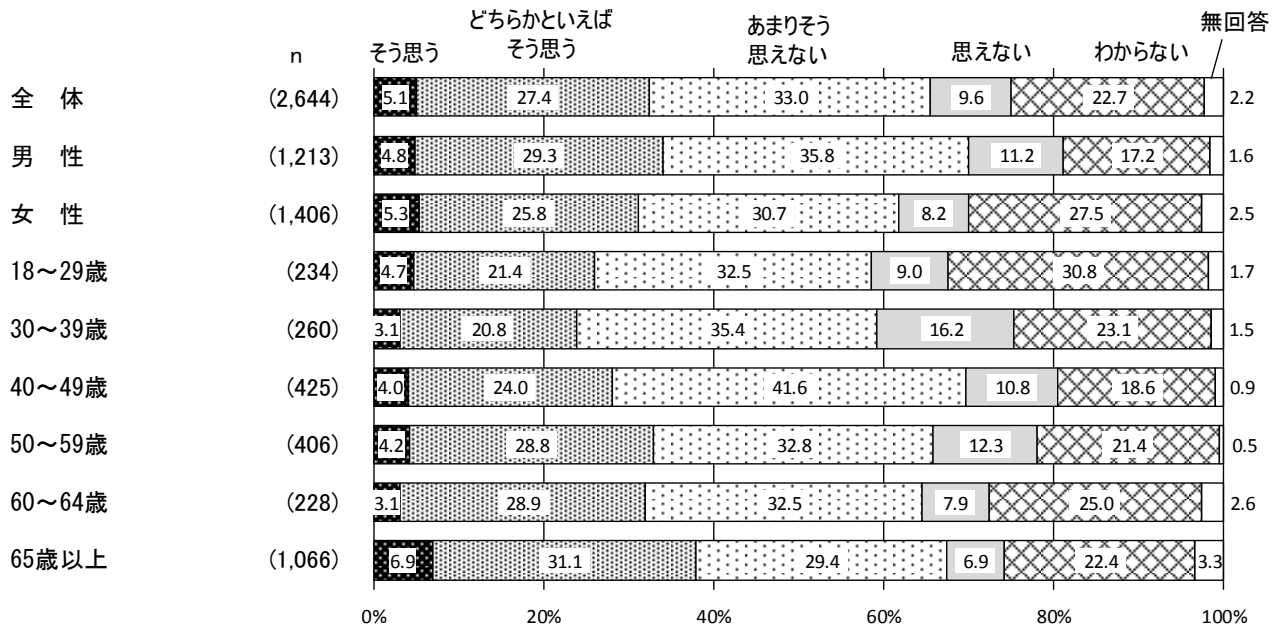
図3-48-1 市内の交通渋滞緩和—全体、経年比較



市内の交通渋滞が緩和されていると思うか聞いたところ、「そう思う」(5.1%)と「どちらかといえばそう思う」(27.4%)を合わせた《《そう思う》》(32.5%)が3割強となっている。一方、「あまりそう思えない」(33.0%)と「思えない」(9.6%)を合わせた《《そう思えない》》(42.6%)は4割強となっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》の割合が平成29年から5.9ポイント増加し、最近3年間の中で最も高くなっている。(図3-48-1)

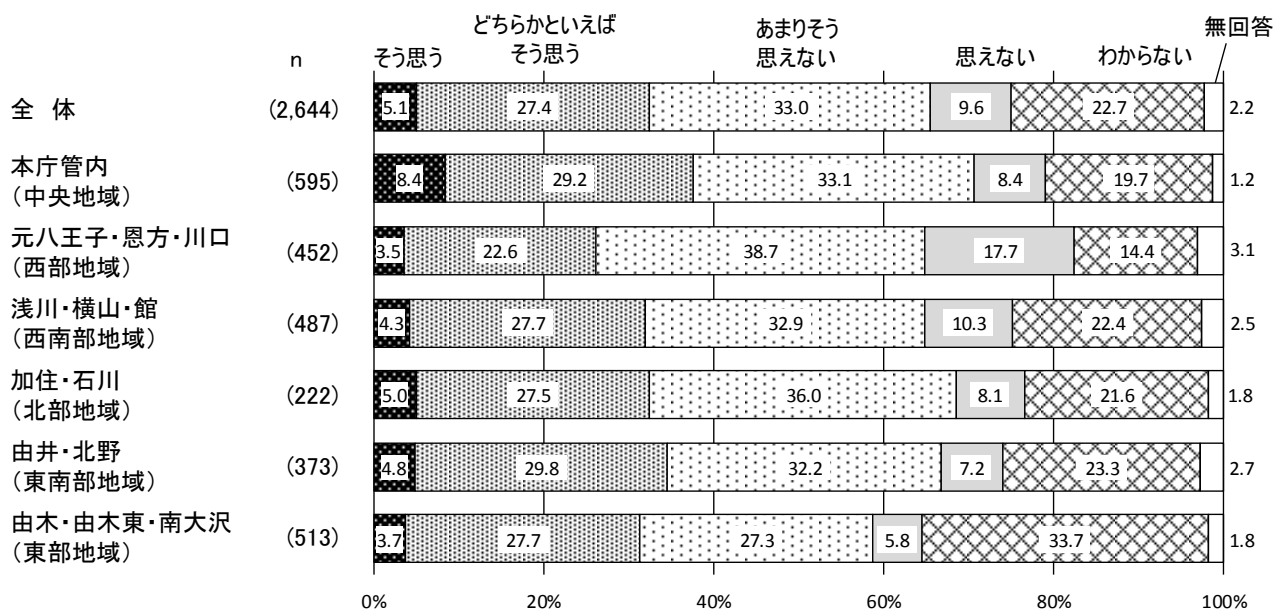
図 3-48-2 市内の交通渋滞緩和—性別、年齢別



性別にみると、《そう思えない》は男性（47.0%）が女性（38.9%）より8.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《そう思う》は65歳以上（38.0%）が4割近くと多く、《そう思えない》は40～49歳（52.4%）と30～39歳（51.6%）でともに5割強と多くなっている。（図 3-48-2）

図 3-48-3 市内の交通渋滞緩和—居住地域別



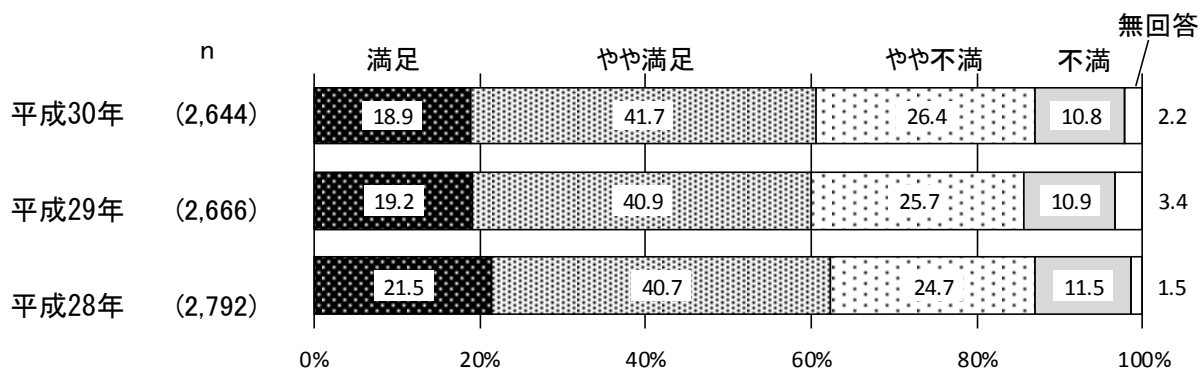
居住地域別にみると、《そう思えない》が元八王子・恩方・川口（西部地域）（56.4%）で6割近くと多くなっている。（図 3-48-3）

(49) 公共交通の利便性の満足度

◇《満足》が約6割

問49 あなたは、あなたのお住まいの地域の公共交通（バスや鉄道等）の利便性に満足していますか。（○は1つだけ）

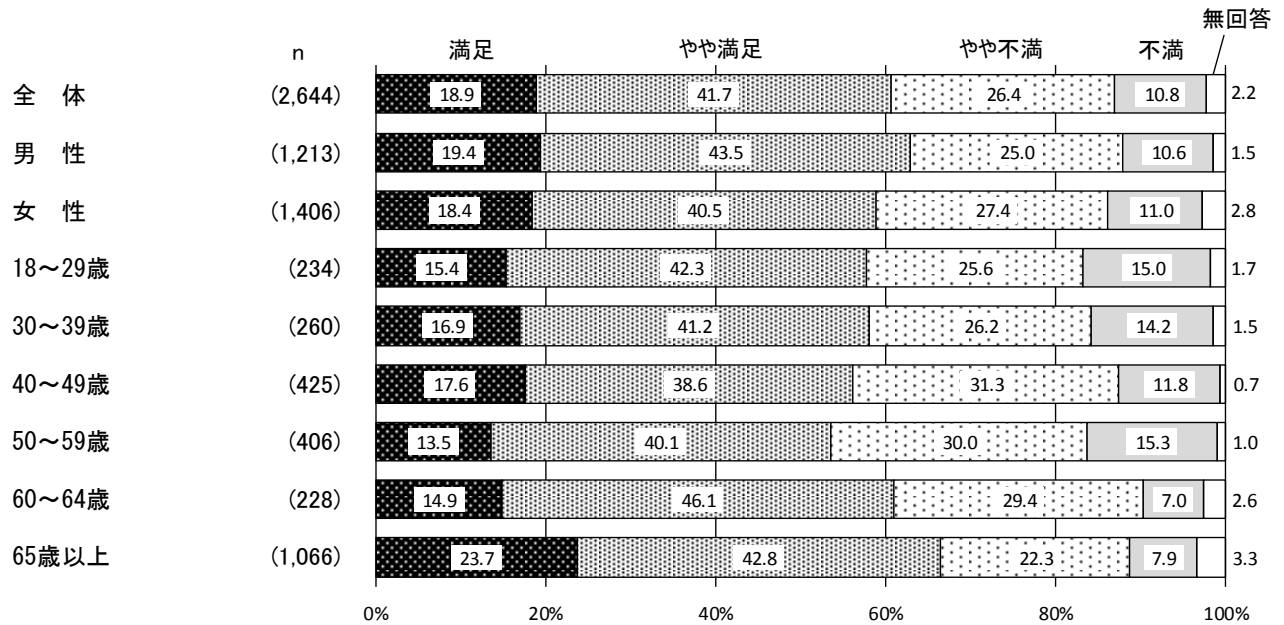
図3-49-1 公共交通の利便性の満足度－全体、経年比較



地域の公共交通（バスや鉄道等）の利便性に満足しているか聞いたところ、「満足」（18.9％）と「やや満足」（41.7％）を合わせた《満足》（60.6％）が約6割となっている。一方、「やや不満」（26.4％）と「不満」（10.8％）を合わせた《不満》（37.2％）は4割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられない。（図3-49-1）

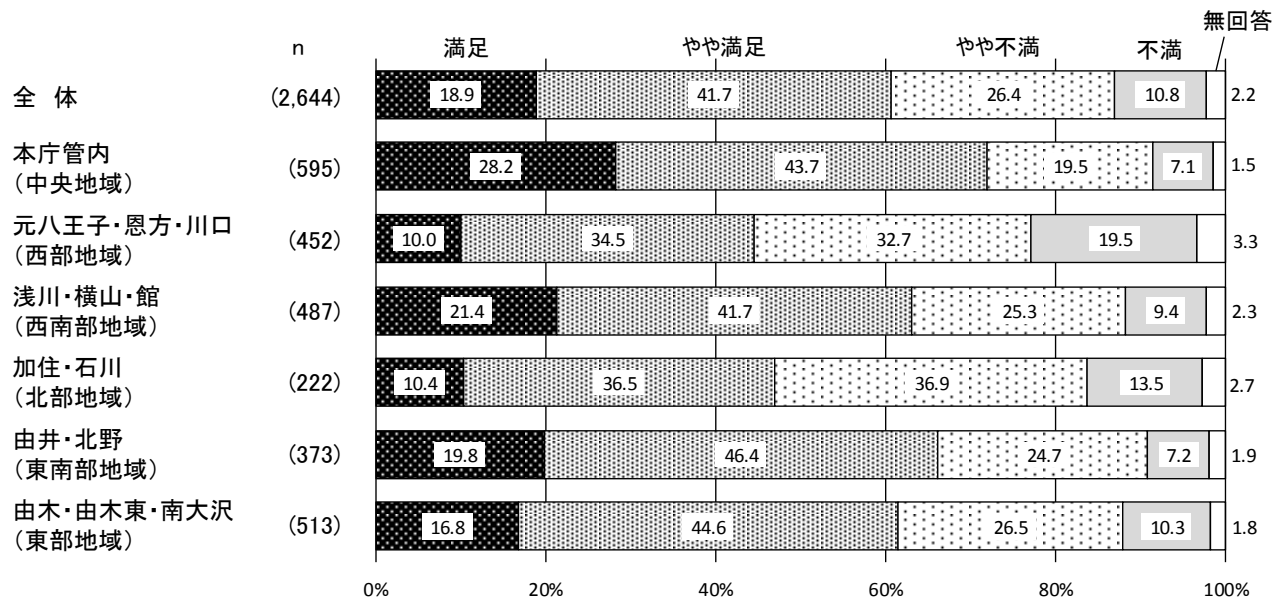
図 3-49-2 公共交通の利便性の満足度－性別、年齢別



性別にみると、《満足》は男性（62.9％）が女性（58.9％）より4.0ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《満足》は65歳以上（66.5％）が7割近くと多くっており、《不満》は50～59歳（45.3％）が4割台半ばで多くなっている。（図 3-49-2）

図 3-49-3 公共交通の利便性の満足度－居住地域別



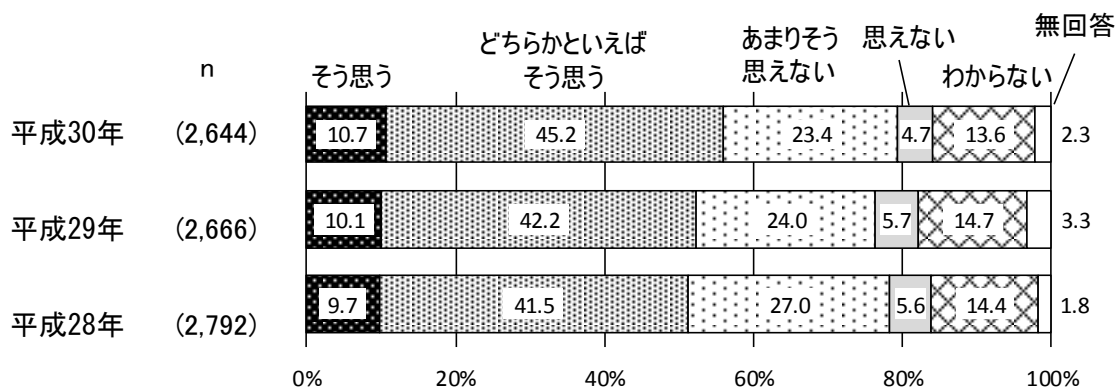
居住地域別にみると、《満足》は本庁管内（中央地域）と由井・北野（東南部地域）で多く、中でも本庁管内（中央地域）（71.9％）で7割強と多くなっている。一方、《不満》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（52.2％）と加住・石川（北部地域）（50.4％）の両地域で5割台と多くなっている。（図 3-49-3）

(50) 都市の美観が保持されたまち

◇《《そう思う》》が5割台半ば

問50 本市は、都市の美観が保持されているまちであると思いますか。(○は1つだけ)

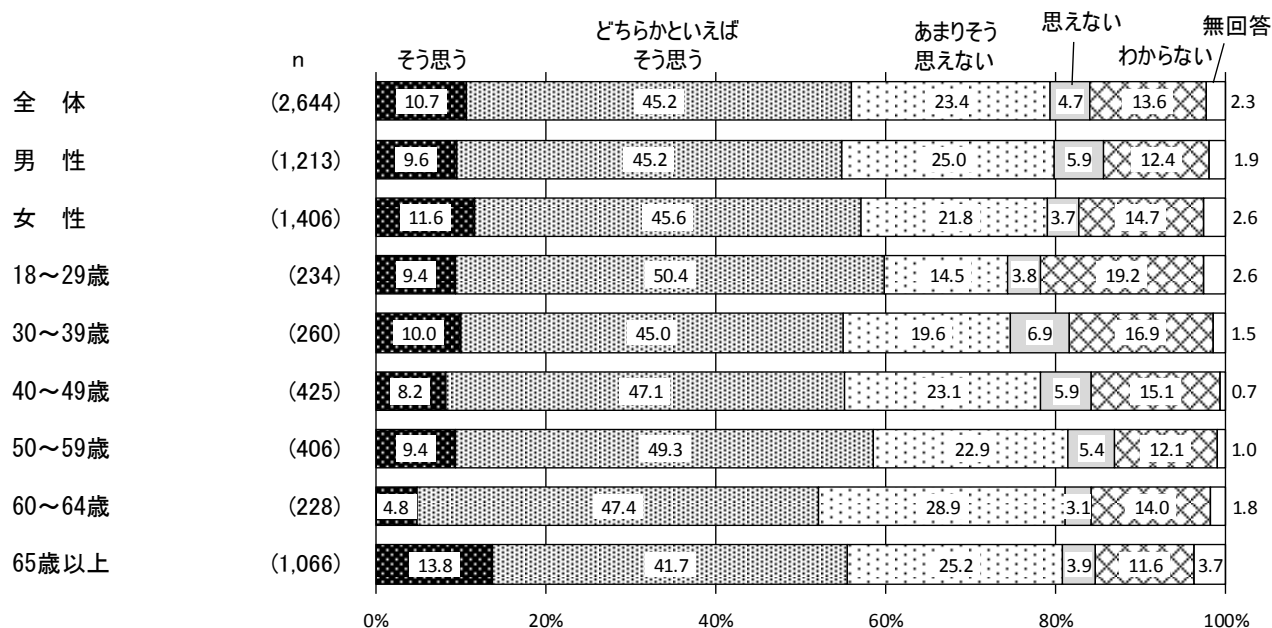
図3-50-1 都市の美観が保持されたまち－全体、経年比較



都市の美観が保持されているまちであると思うか聞いたところ、「そう思う」(10.7%)と「どちらかといえばそう思う」(45.2%)を合わせた《《そう思う》》(55.9%)が5割台半ばとなっている。一方、「あまりそう思えない」(23.4%)と「思えない」(4.7%)を合わせた《《そう思えない》》(28.1%)は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》は2年連続で増加傾向にある。(図3-50-1)

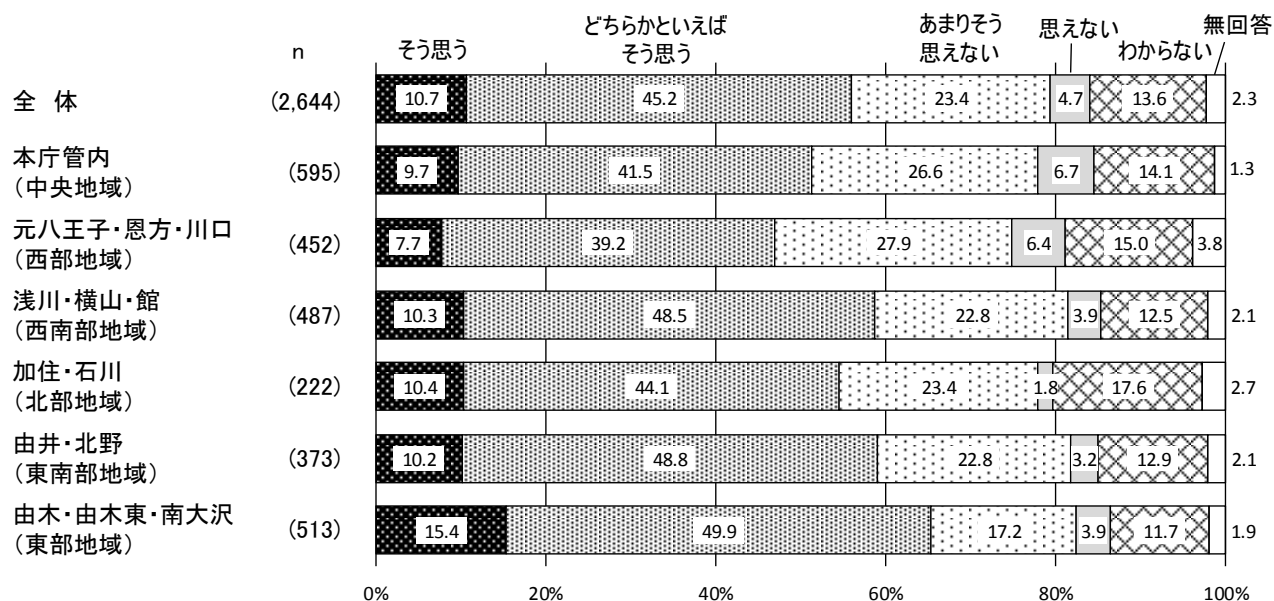
図 3-50-2 都市の美観が保持されたまち－性別、年齢別



性別にみると、《そう思えない》は男性（30.9%）が女性（25.5%）より5.4ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《そう思う》は18～29歳（59.8%）が6割弱で多くっており、《そう思えない》は60～64歳（32.0%）が3割強で多くになっている。（図 3-50-2）

図 3-50-3 都市の美観が保持されたまち－居住地域別



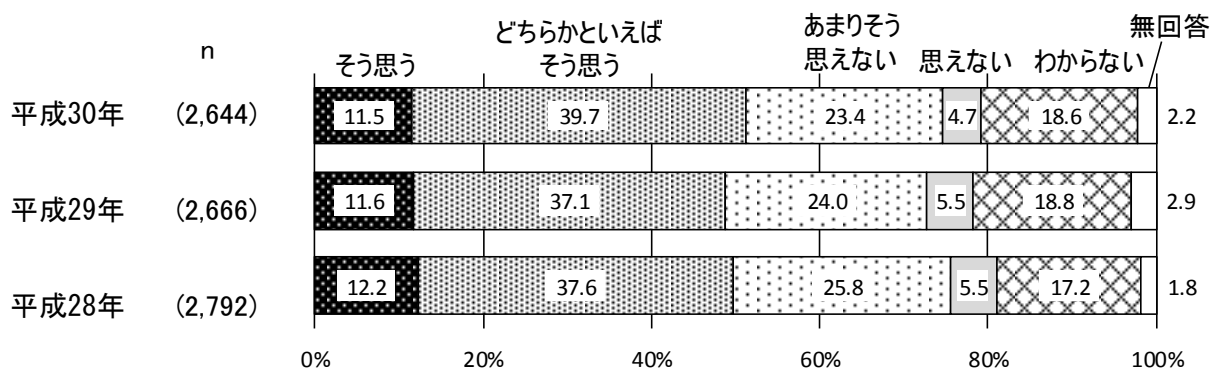
居住地域別にみると、《そう思う》は由木・由木東・南大沢（東部地域）（65.3%）で6割台半ばと多くっており、《そう思えない》は本庁管内（中央地域）（33.3%）と元八王子・恩方・川口（西部地域）（34.3%）の両地域で3割強～3割台半ばと多くになっている。（図 3-50-3）

(51) 自然、歴史、文化が生かされた景観

◇《《そう思う》が5割強

問51 あなたは、市の豊かな自然、歴史、文化などが、あなたのお住まいの地域やまちの景観に生かされていると思いますか。(〇は1つだけ)

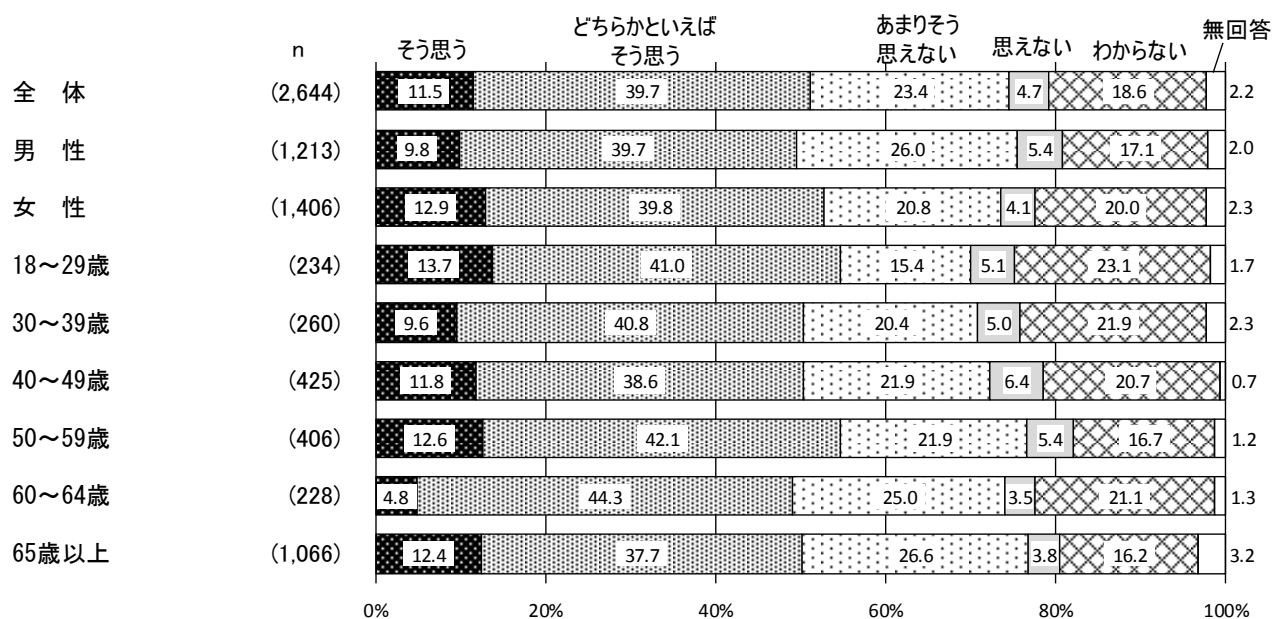
図3-51-1 自然、歴史、文化が生かされた景観－全体、経年比較



市の豊かな自然、歴史、文化などが、あなたのお住まいの地域やまちの景観に生かされていると思うか聞いたところ、「そう思う」(11.5%)と「どちらかといえばそう思う」(39.7%)を合わせた《《そう思う》》(51.2%)が5割強となっている。一方、「あまりそう思えない」(23.4%)と「思えない」(4.7%)を合わせた《《そう思えない》》(28.1%)は3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられないが、《《そう思えない》》は2年続けて微減傾向にある。(図3-51-1)

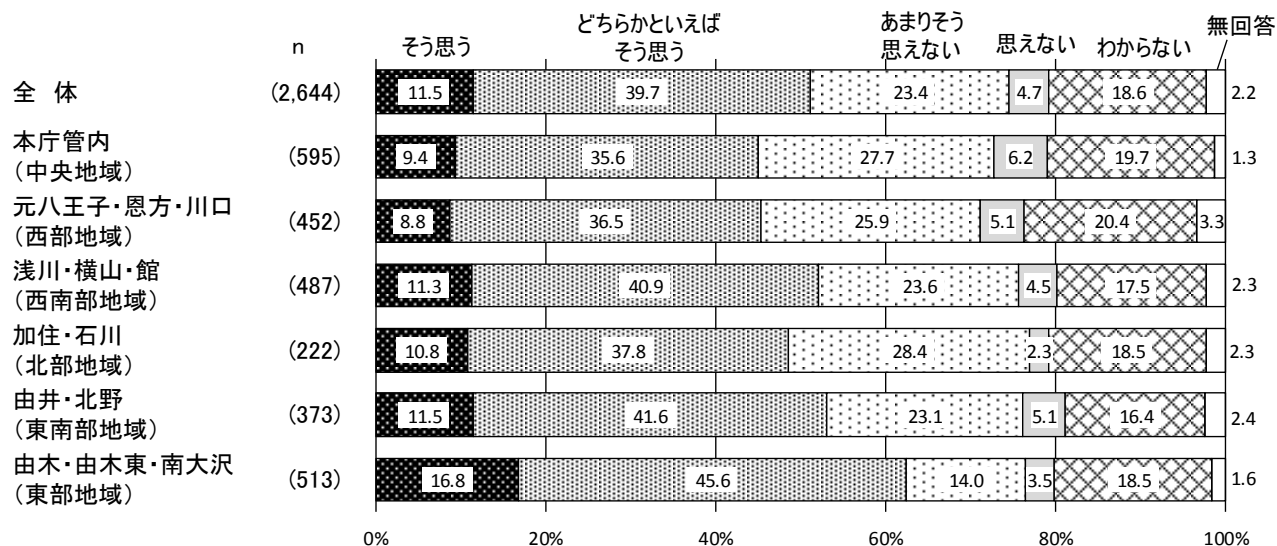
図 3-51-2 自然、歴史、文化が生かされた景観－性別、年齢別



性別にみると、「そう思えない」は男性（31.4%）が女性（24.9%）より6.5ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「そう思う」は18～29歳（54.7%）と50～59歳（54.7%）の両層が5割台半ばで並んで多くなっている。（図 3-51-2）

図 3-51-3 自然、歴史、文化が生かされた景観－居住地域別



居住地域別にみると、「そう思う」は由木・由木東・南大沢（東部地域）（62.4%）が6割強で多くっており、「そう思えない」は本庁管内（中央地域）（33.9%）が3割強と多くなっている。

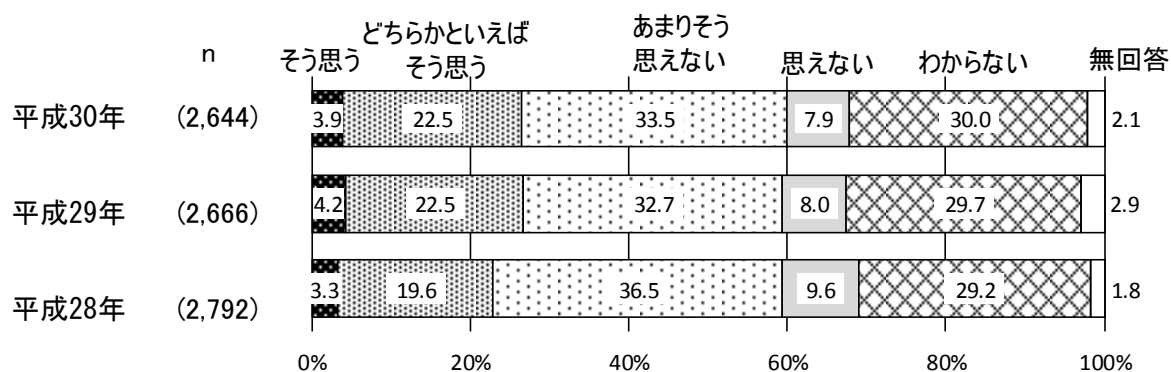
（図 3-51-3）

(52) 市内の産業活動

◇《《そう思う》が3割近く

問52 あなたは、商業や観光業、農業、工業など、市内の産業活動が活発に行われていると思いますか。(○は1つだけ)

図3-52-1 市内の産業活動－全体、経年比較

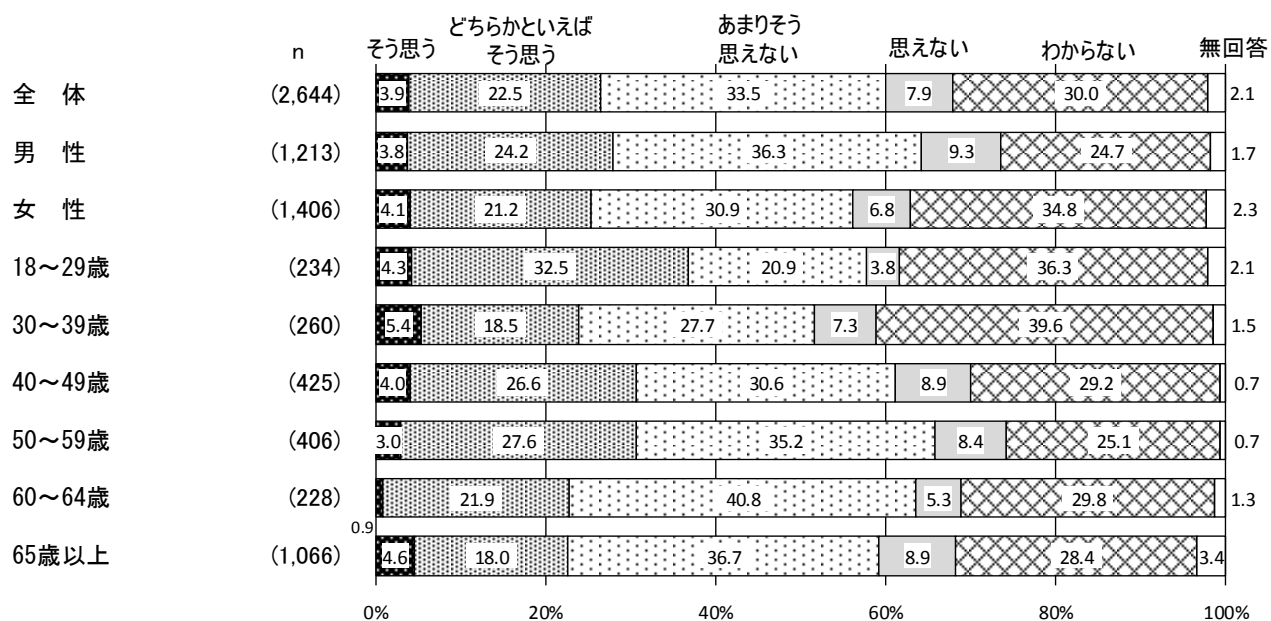


商業や観光業、農業、工業など、市内の産業活動が活発に行われていると思うか聞いたところ、「そう思う」(3.9%)と「どちらかといえばそう思う」(22.5%)を合わせた《《そう思う》》(26.4%)が3割近くとなっている。一方、「あまりそう思えない」(33.5%)と「思えない」(7.9%)を合わせた《《そう思えない》》(41.4%)は4割強となっている。

前回までの調査と比較すると、平成29年と似た回答分布で、大きな傾向の違いはみられない。

(図3-52-1)

図 3-52-2 市内の産業活動—性別、年齢別

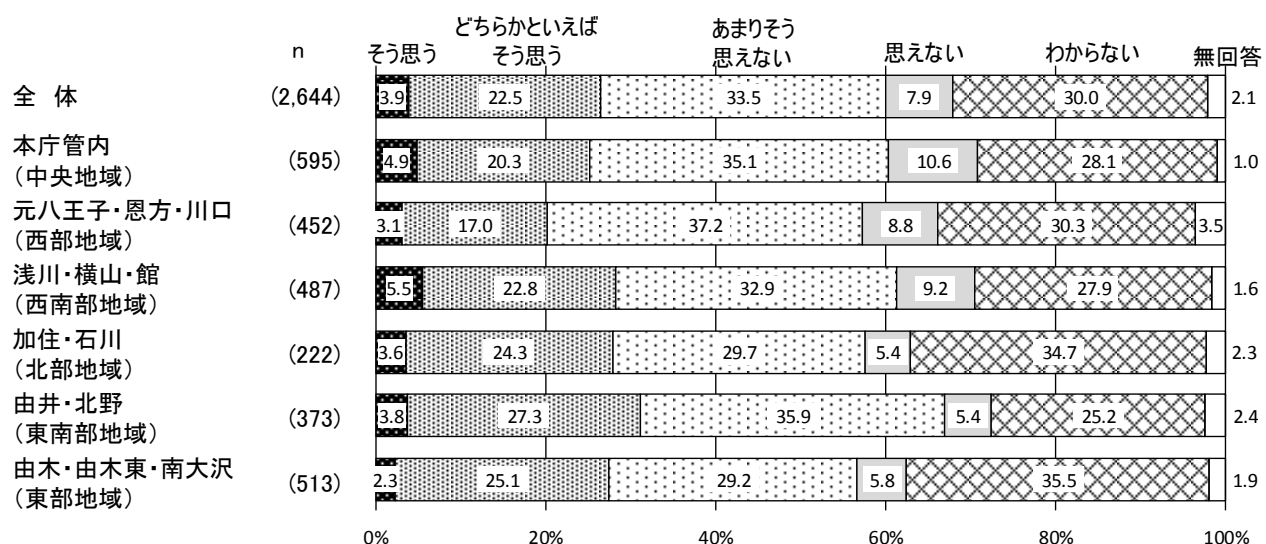


性別にみると、「あまりそう思えない」は男性（45.6%）が女性（37.7%）より7.9ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「そう思う」は18～29歳（36.8%）で4割近くと多く、「あまりそう思えない」は60～64歳（46.1%）と65歳以上（45.6%）でともに4割台半ば～5割近くと多くなっている。

（図 3-52-2）

図 3-52-3 市内の産業活動—居住地域別



居住地域別にみると、「そう思う」は由井・北野（東南部地域）（31.1%）で3割強と多くなっている。（図 3-52-3）

(53) 地球環境への配慮

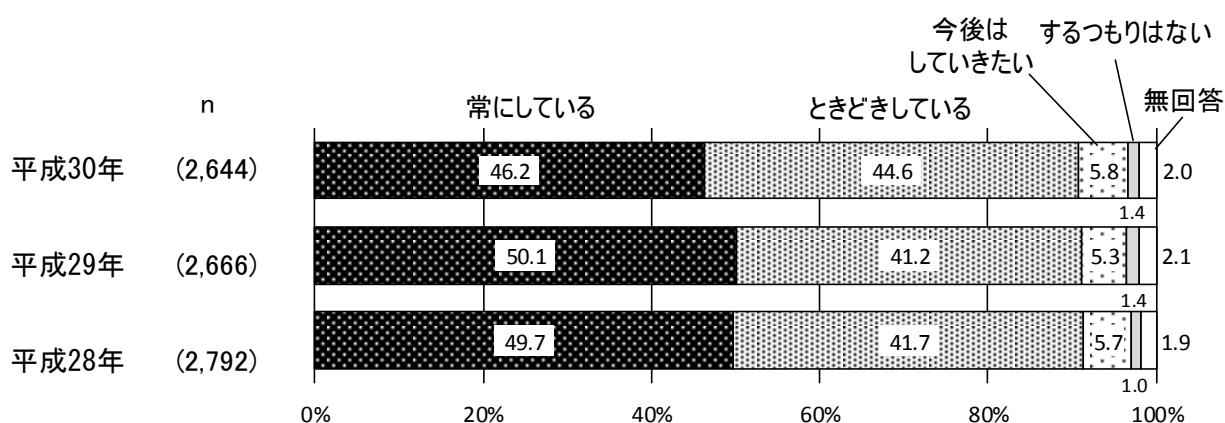
◇「常にしている」が5割近く

問53 あなたは、ふだんから省エネ・省資源など、地球環境に配慮した暮らしをしていますか。
(○は1つだけ)

※ふだんの暮らしの中で地球環境のためにできる取り組みとは・・・

- 過度な冷暖房の使用を控える
- マイカーの使用を控える
- 電気をこまめに消す
- 省エネ製品を利用する
- 冷蔵庫の開閉に気を使う
- 買物用のバッグを持参して買い物に行く
- ごみと資源物を分別し、適正に排出する
- など

図3-53-1 地球環境への配慮－全体、経年比較

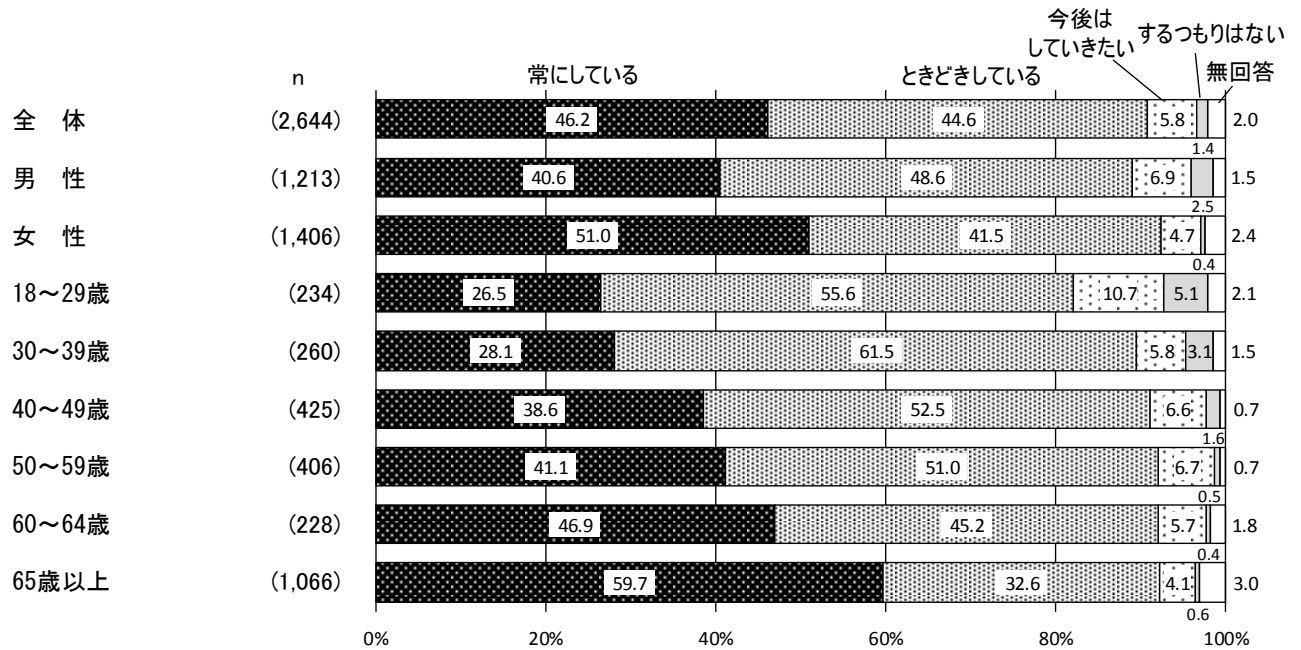


ふだんから省エネ・省資源など、地球環境に配慮した暮らしをしているか聞いたところ、「常にしている」(46.2%)が5割近くで最も多いが、「ときどきしている」(44.6%)も4割台半ばとなり、両者の差は1.6ポイント差と小さくなっている。

前回までの調査と比較すると、「常にしている」は平成29年より3.9ポイント減少している。

(図3-53-1)

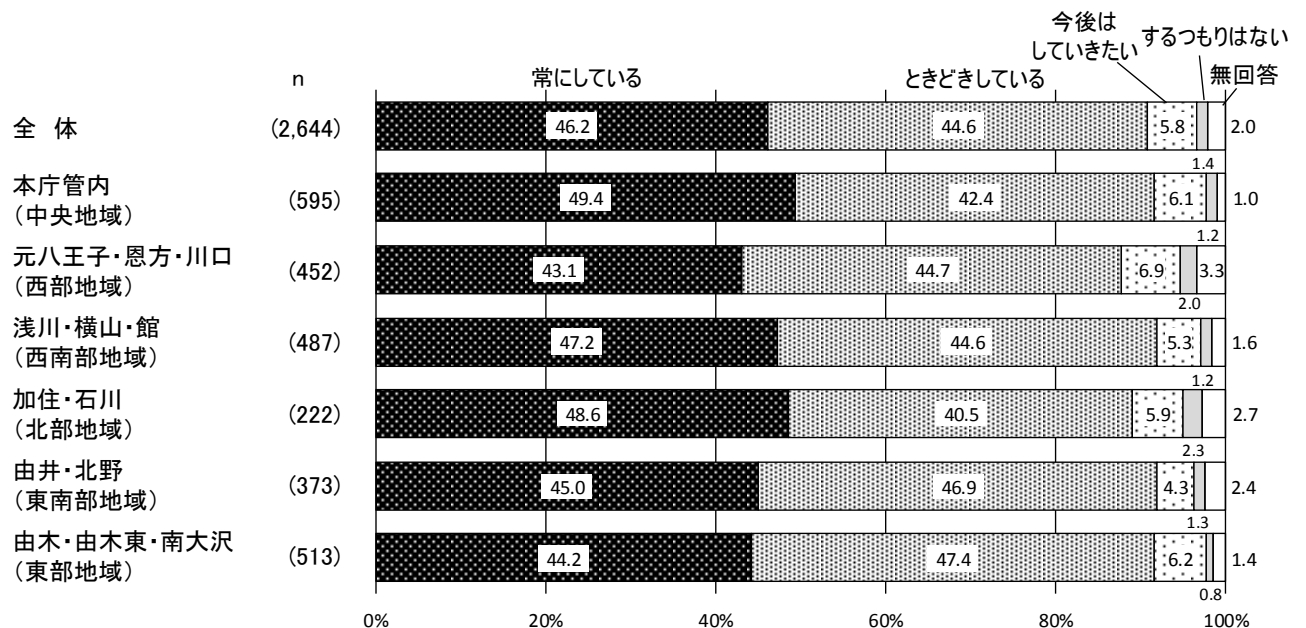
図 3-53-2 地球環境への配慮—性別、年齢別



性別にみると、「常にしている」は女性（51.0%）が男性（40.6%）より10.4ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「常にしている」は年代が高まるにつれて割合も高くなっており、65歳以上（59.7%）で6割弱と多くなっている。「ときどきしている」は50歳代以下で多くなっており、中でも30～39歳（61.5%）で6割強と最も多くなっている。（図 3-53-2）

図 3-53-3 地球環境への配慮—居住地域別



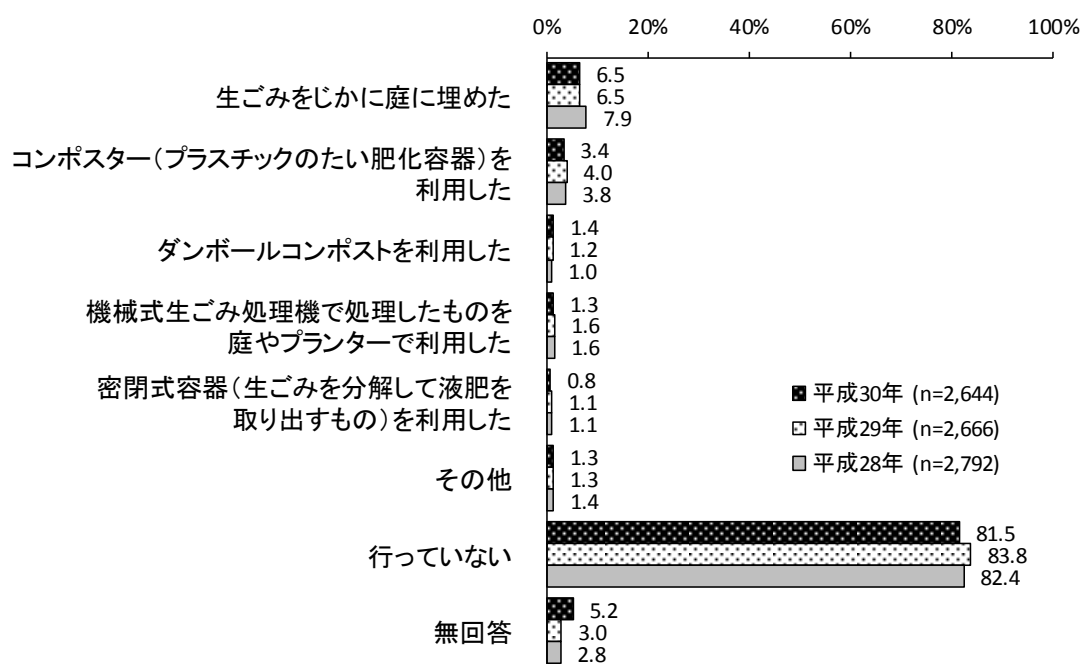
居住地域別にみると、「常にしている」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（43.1%）で少なくなっている。（図 3-53-3）

(54) この1年間に行った生ごみのたい肥化

◇「行っていない」が8割強

問54 あなたの世帯は、この1年間に何らかの方法により生ごみのたい肥化を行いましたか。
(○はいくつでも)

図3-54-1 この1年間に行った生ごみのたい肥化－全体、経年比較

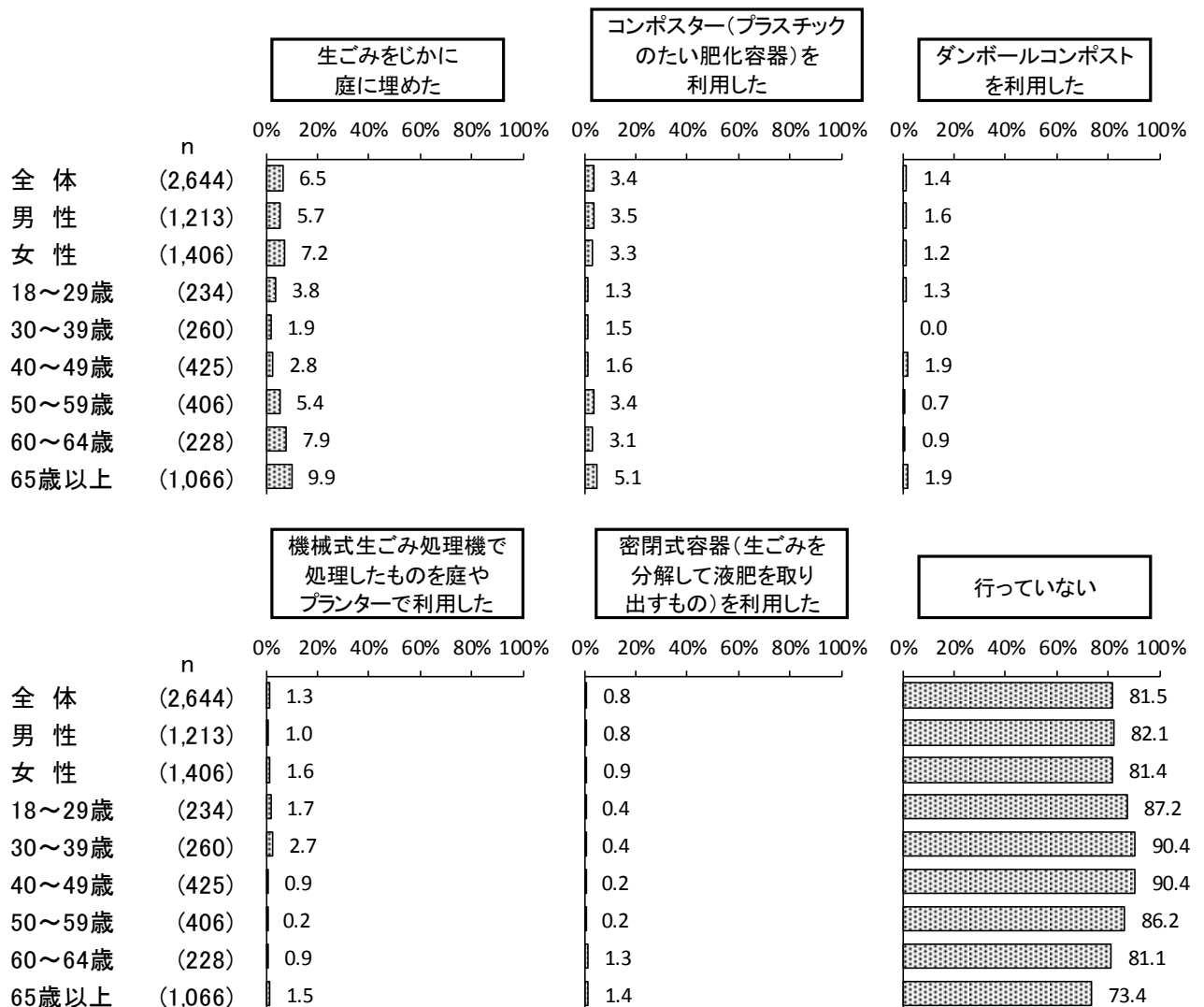


この1年間に何らかの方法により生ごみのたい肥化を行ったか聞いたところ、「行っていない」(81.5%)が8割強を占めて多い。なお、行った割合が最も高いのは「生ごみをじかに庭に埋めた」(6.5%)で1割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、各年似かよった結果で、大きな傾向の違いはみられない。

(図3-54-1)

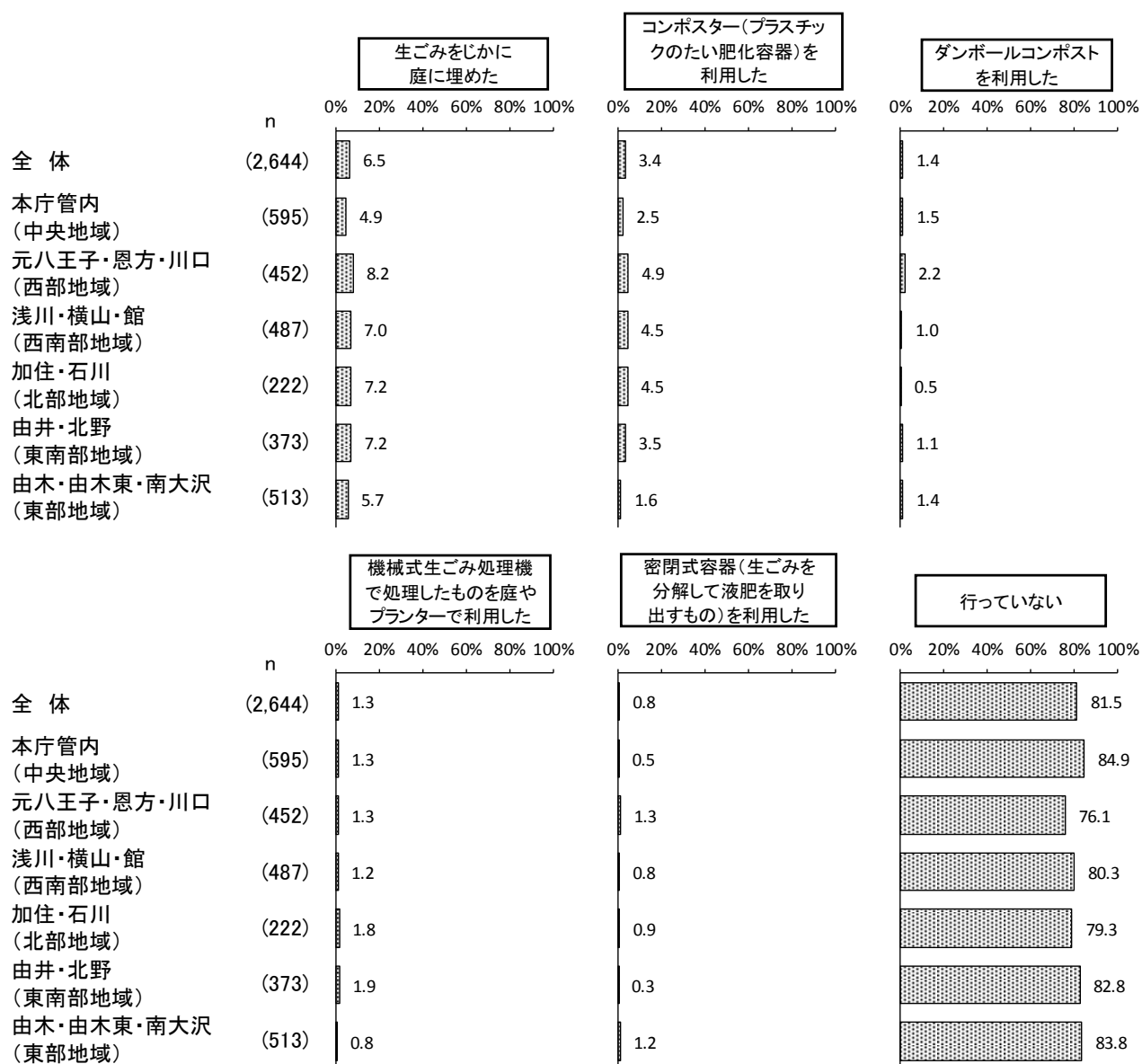
図 3-54-2 この1年間に行った生ごみのたい肥化—性別、年齢別



性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、生ごみのたい肥化を「行っていない」の割合は50歳代以下で高くなっており、中でも30～39歳と40～49歳（各90.4%）の両層で約9割と多くなっている。一方、65歳以上（73.4%）で7割強と少なくなっている。（図3-54-2）

図 3-54-3 この 1 年間に行った生ごみのたい肥化－居住地域別



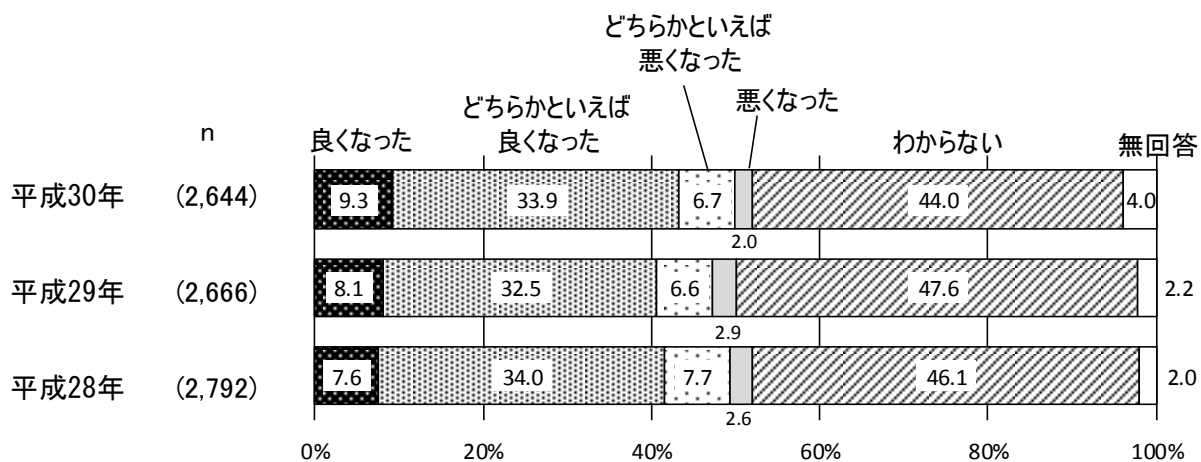
居住地域別にみると、生ごみのたい肥化を「行っていない」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（76.1%）が 8 割近くと少なくなっている。（図 3-54-3）

(55) 市の生活環境

◇《良くなった》が4割強

問55 あなたは、市の生活環境（水・みどり・ごみ・大気・騒音・振動など）が以前と比べどうなったと思いますか。（○は1つだけ）

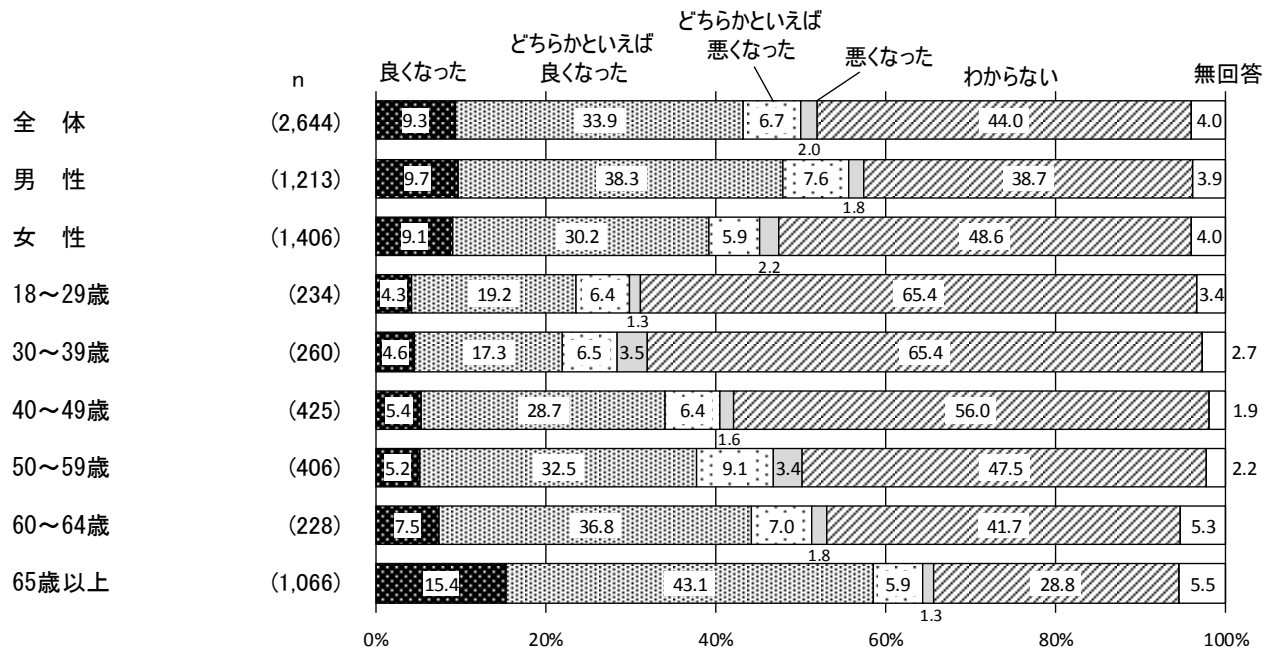
図3-55-1 市の生活環境－全体、経年比較



市の生活環境（水・みどり・ごみ・大気・騒音・振動など）が以前と比べどうなったと思うか聞いたところ、「良くなった」（9.3％）と「どちらかといえば良くなった」（33.9％）を合わせた《良くなった》（43.2％）が4割強となっている。一方、「どちらかといえば悪くなった」（6.7％）と「悪くなった」（2.0％）を合わせた《悪くなった》（8.7％）は1割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられないが、《良くなった》の割合は前2回の調査より微増している。（図3-55-1）

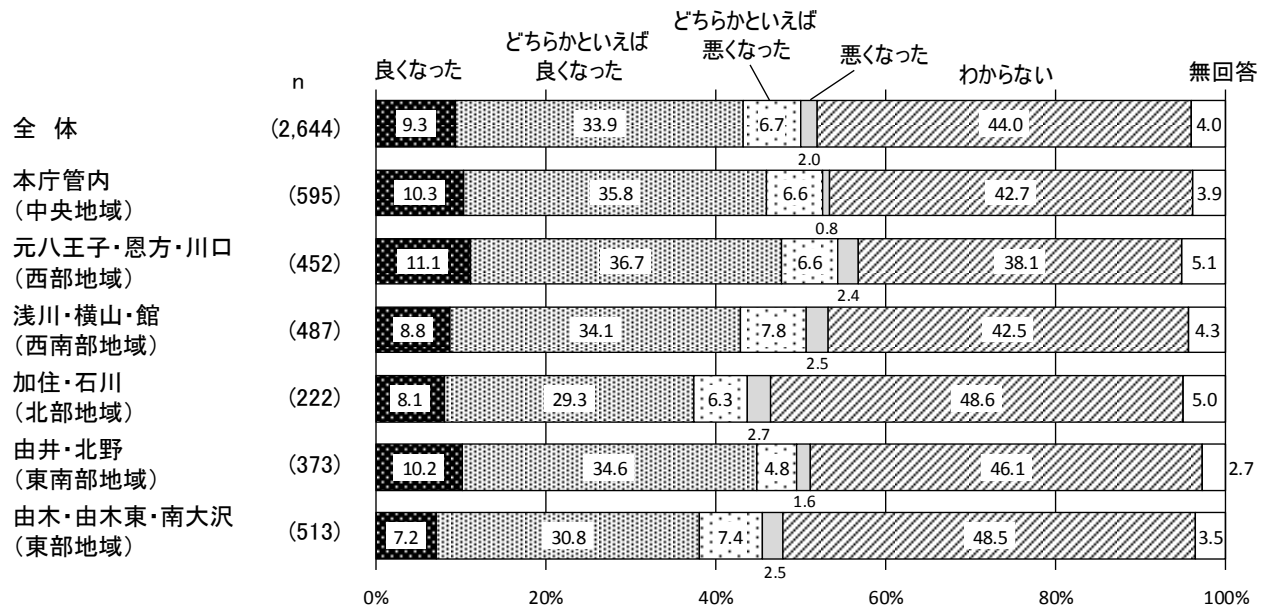
図 3-55-2 市の生活環境—性別、年齢別



性別にみると、《良くなった》は男性（48.0%）が女性（39.3%）より8.7ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《良くなった》は65歳以上（58.5%）で6割近くと多くなっている一方、18～29歳（23.5%）と30～39歳（21.9%）の両層で2割強と少なくなっている。（図 3-55-2）

図 3-55-3 市の生活環境—居住地域別



居住地域別にみると、《良くなった》は元八王子・恩方・川口（西部地域）（47.8%）で5割近くと多くなっている一方、加住・石川（北部地域）（37.4%）と由木・由木東・南大沢（東部地域）（38.0%）の両地域で4割近くと少なくなっている。（図 3-55-3）

(56)「生物多様性」の周知度

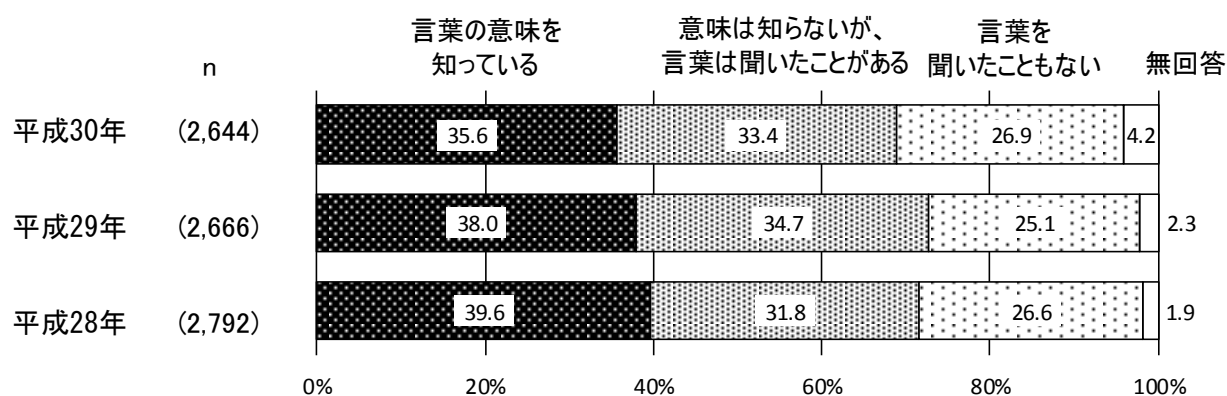
◇「言葉の意味を知っている」が3割台半ば

問56 あなたは、「生物多様性」という言葉を知っていますか。(○は1つだけ)

※生物多様性とは・・・

動物や植物、昆虫などのいろいろな生きものがいて、それらがつながり合っていることをいいます。この生きものたちのつながりにより地球では豊かな生態系が保たれています。生物多様性は、衣・食・住だけでなく、きれいな水や空気、薬の原料、文化の源泉など、様々な恵みをもたらしてくれます。

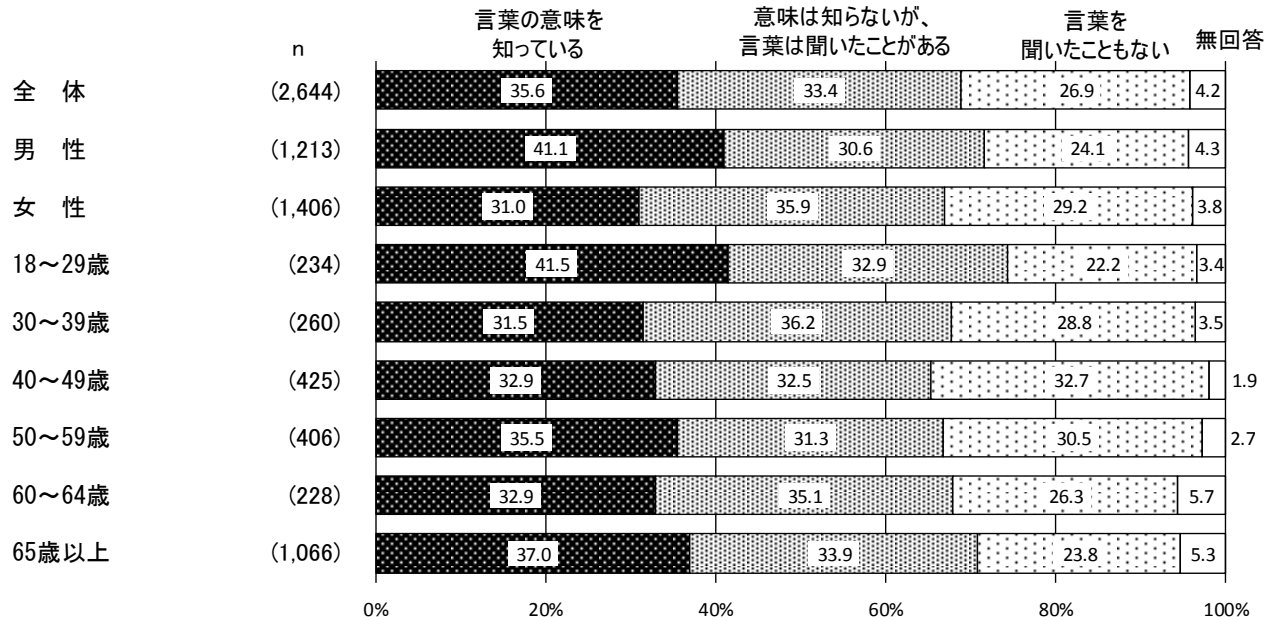
図3-56-1 「生物多様性」の周知度－全体、経年比較



「生物多様性」という言葉を知っているか聞いたところ、「言葉の意味を知っている」(35.6%)が3割台半ばとなっている。「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」(33.4%)は3割強で、「言葉を聞いたこともない」(26.9%)が3割近くとなっている。

前回までの調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられないが、「言葉の意味を知っている」は2年続けて微減している。(図3-56-1)

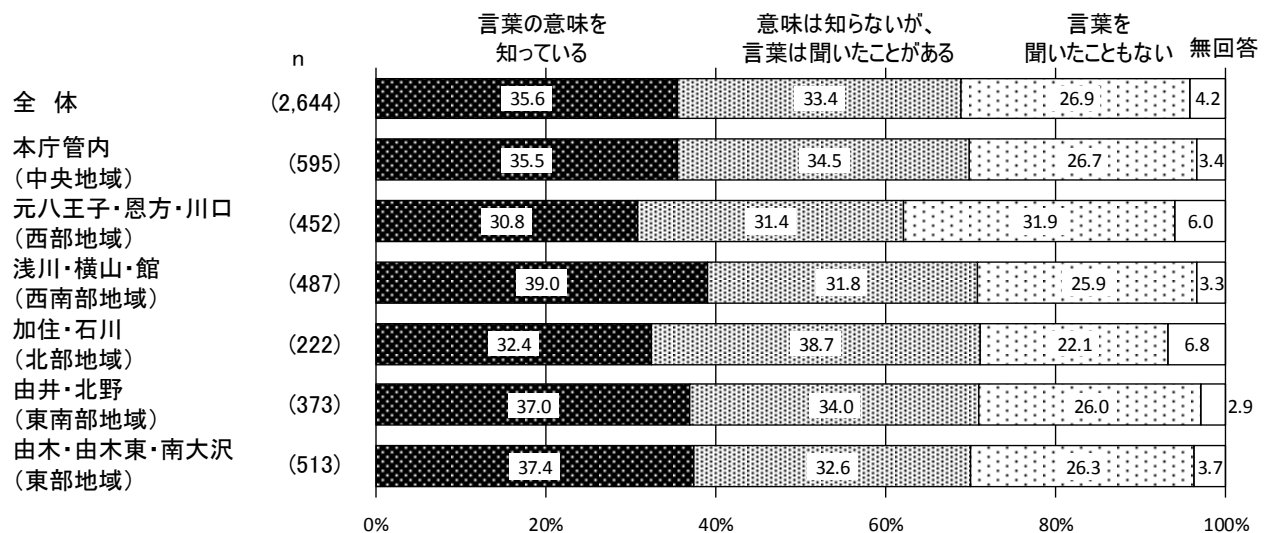
図 3-56-2 「生物多様性」の周知度－性別、年齢別



性別にみると、「言葉の意味を知っている」は男性（41.1％）が女性（31.0％）より10.1ポイント高くなっている。

年齢別にみると、「言葉の意味を知っている」は18～29歳（41.5％）で4割強と多くっており、「言葉を聞いたこともない」は40～49歳（32.7％）で3割強と多くになっている。（図 3-56-2）

図 3-56-3 「生物多様性」の周知度－居住地域別



居住地域別にみると、「言葉の意味を知っている」は浅川・横山・館（西南部地域）（39.0％）で4割強と多くっており、「言葉を聞いたこともない」は元八王子・恩方・川口（西部地域）（31.9％）で3割強と多くになっている。（図 3-56-3）

(57) ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度

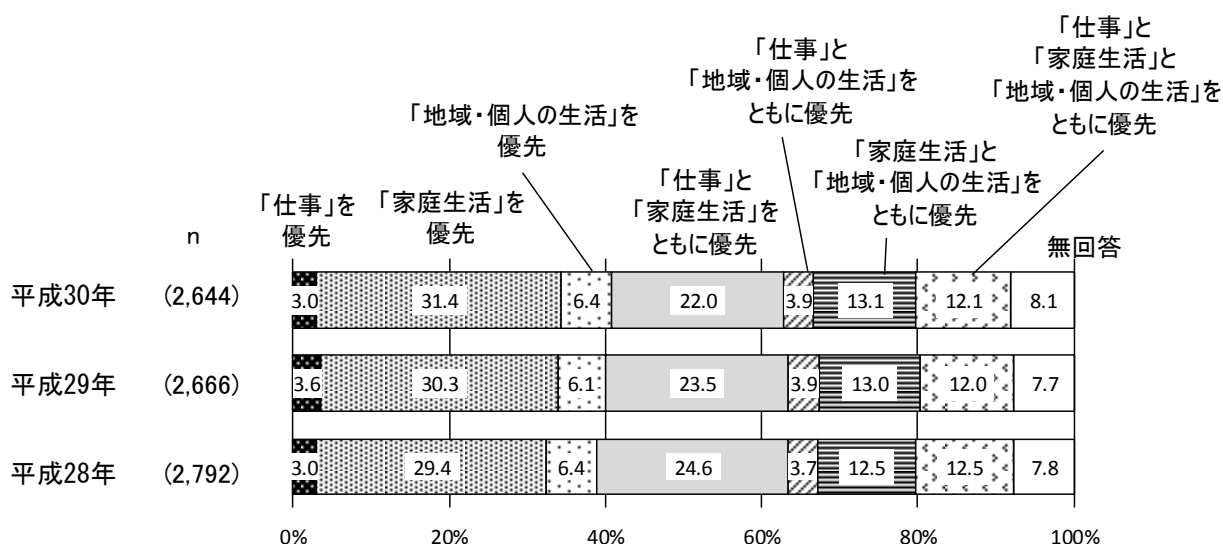
◇希望する優先度は「『家庭生活』を優先」が3割強

問57 仕事と生活の調和（ワークライフバランス）についておたずねします。あなたの生活の中での、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、それぞれあてはまるものに○をつけてください。（○はそれぞれ1つずつ）

※仕事と生活の調和（ワークライフバランス）とは・・・

人それぞれの希望に応じて、「仕事」と、子育てや親の介護、地域活動等の「仕事以外の生活」の調和が図られる状態のことです。望ましいバランスは、人によって異なります。

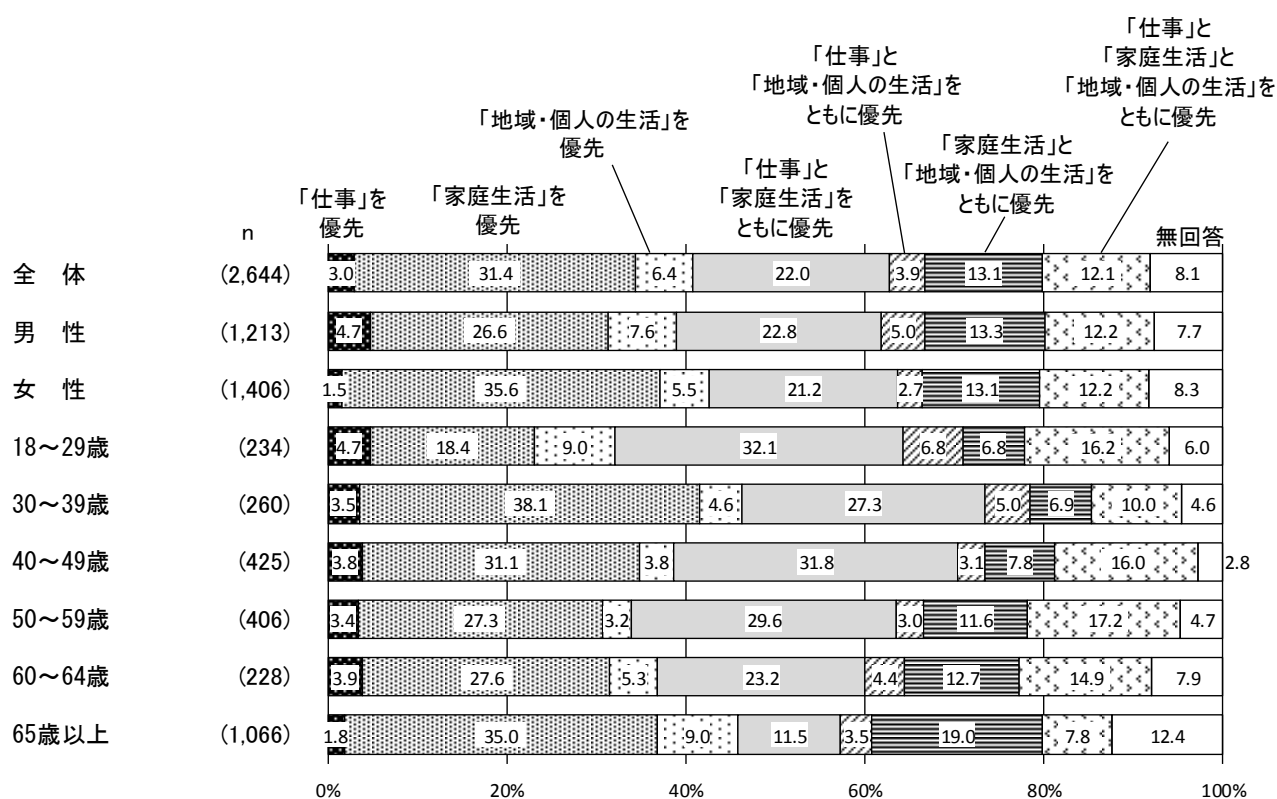
図3-57-1 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度－全体、経年比較



「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、希望する優先度を聞いたところ、「『家庭生活』を優先」（31.4%）が最も多く3割強となっている。次いで「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」（22.0%）が2割強で続き、以下「『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先」（13.1%）、「『仕事』と『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先」（12.1%）などの順となっている。

前回までの調査と比較すると、大きな傾向の違いはみられないが、「『家庭生活』を優先」は2年連続で微増傾向にある一方で、「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」は2年連続で微減傾向となっている。（図3-57-1）

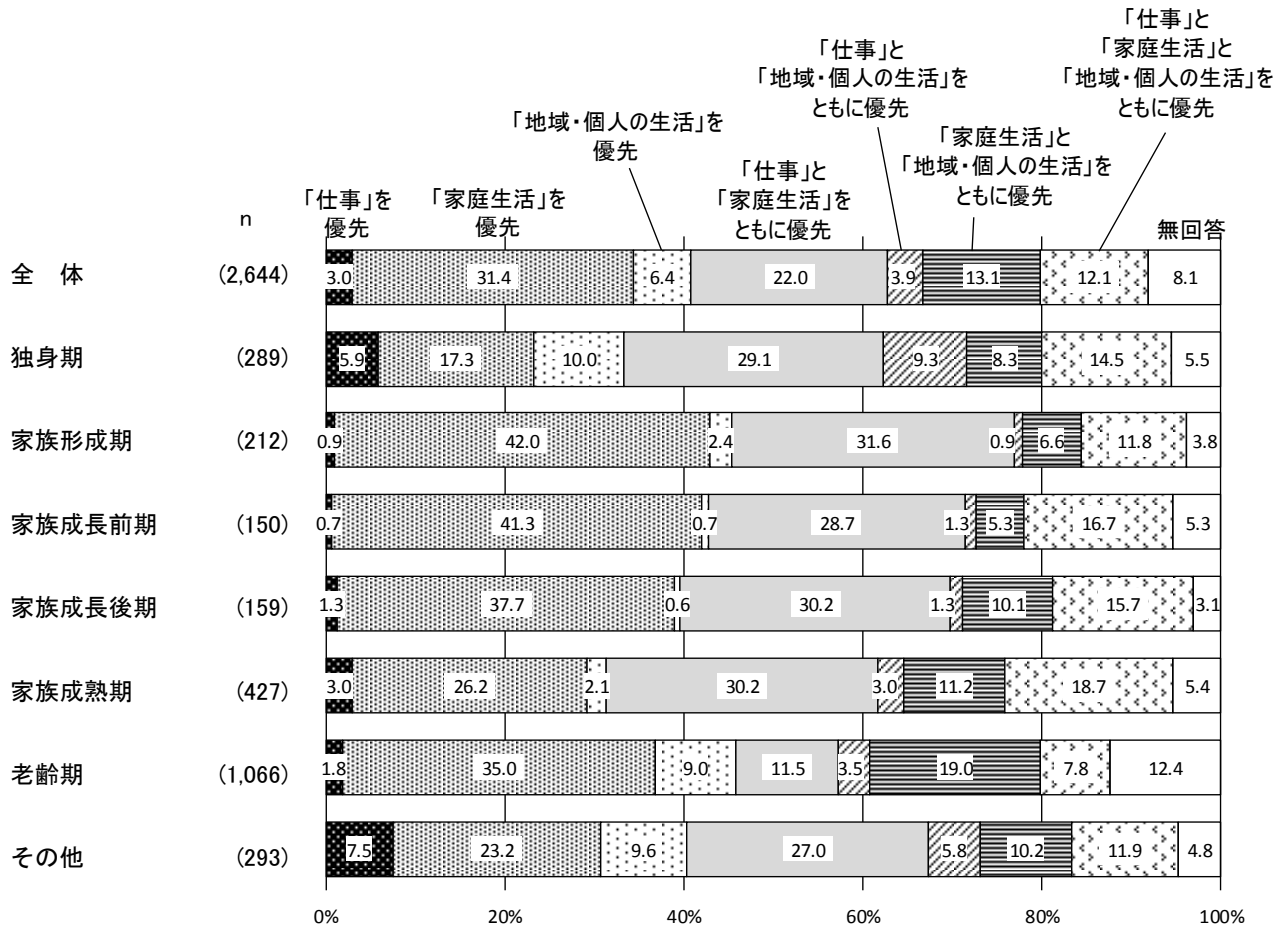
図 3-57-2 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度－性別、年齢別



性別にみると、『家庭生活』を優先は女性（35.6％）が男性（26.6％）より9.0ポイント高くなっている。

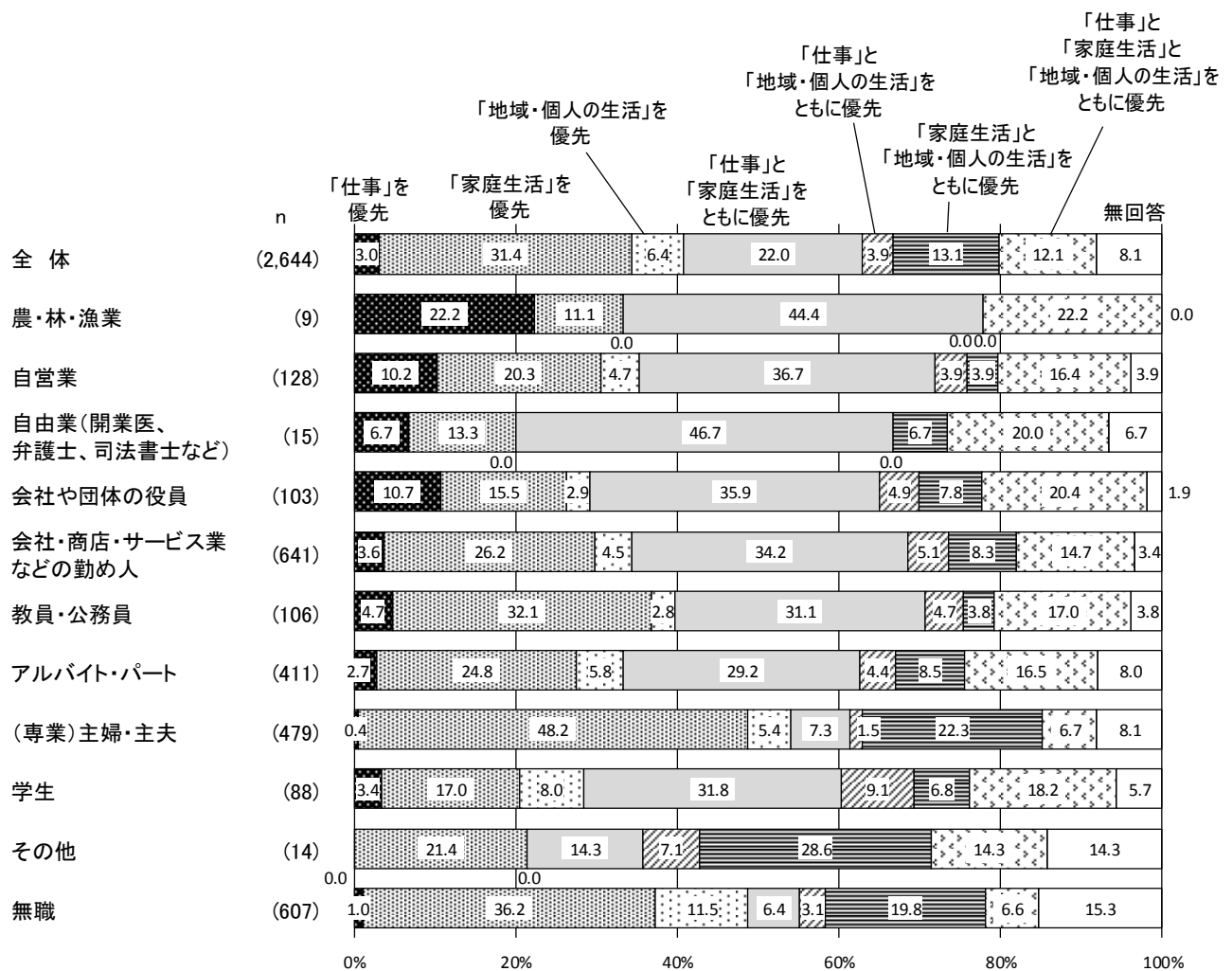
年齢別にみると、『家庭生活』を優先は30～39歳（38.1％）で4割近くと多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は50歳代以下で多く、中でも18～29歳（32.1％）と40～49歳（31.8％）の両層で3割強と多くなっている。（図 3-57-2）

図3-57-3 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度－ライフステージ別



ライフステージ別にみると、「『家庭生活』を優先」は家族形成期～家族成長後期で多くっており、中でも家族形成期（42.0%）と家族成長前期（41.3%）で4割強と多くなっている。「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」は老齢期以外の各層で多くなっており、中でも家族形成期（31.6%）で3割強と最も多くなっている。なお、「『仕事』と『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先」は家族成熟期（18.7%）が2割近くで最も多くなっている。（図3-57-3）

図 3-57-4 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度－職業別



職業別にみると、『家庭生活』を優先は(専業)主婦・主夫(48.2%)で5割近くと多くっており、『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先も(専業)主婦・主夫(22.3%)で2割強と多くなっている。(図 3-57-4)

(58) ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度

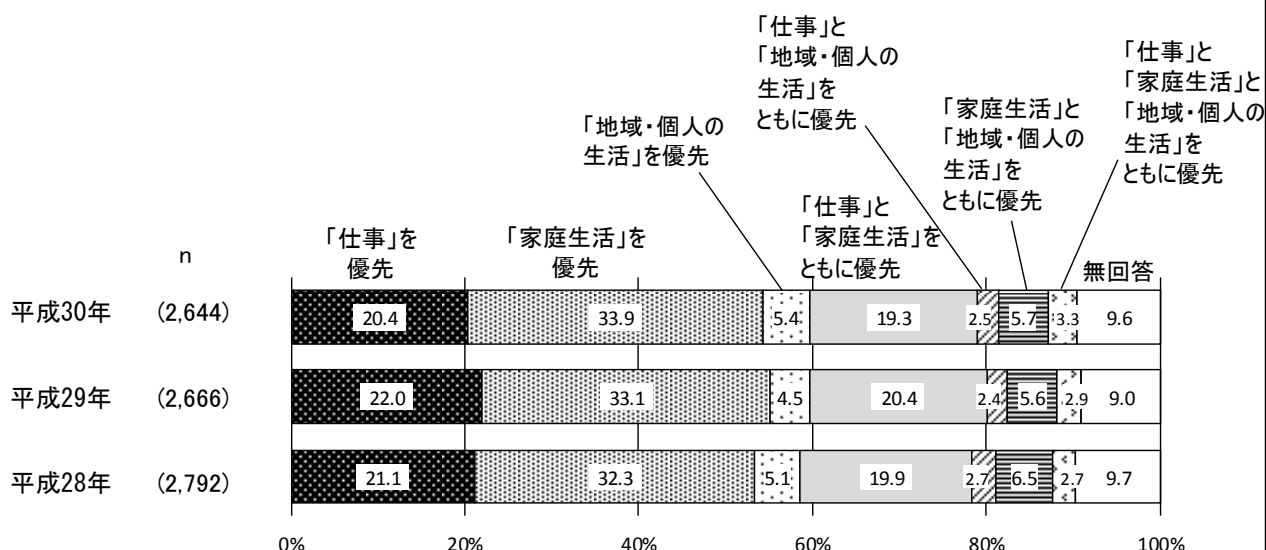
◇実際の優先度は「『家庭生活』を優先」が3割強

問57 仕事と生活の調和（ワークライフバランス）についておたずねします。あなたの生活の中での、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、それぞれあてはまるものに○をつけてください。（○はそれぞれ1つずつ）

※仕事と生活の調和（ワークライフバランス）とは・・・

人それぞれの希望に応じて、「仕事」と、子育てや親の介護、地域活動等の「仕事以外の生活」の調和が図られる状態のことです。望ましいバランスは、人によって異なります。

図3-58-1 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度—全体、経年比較

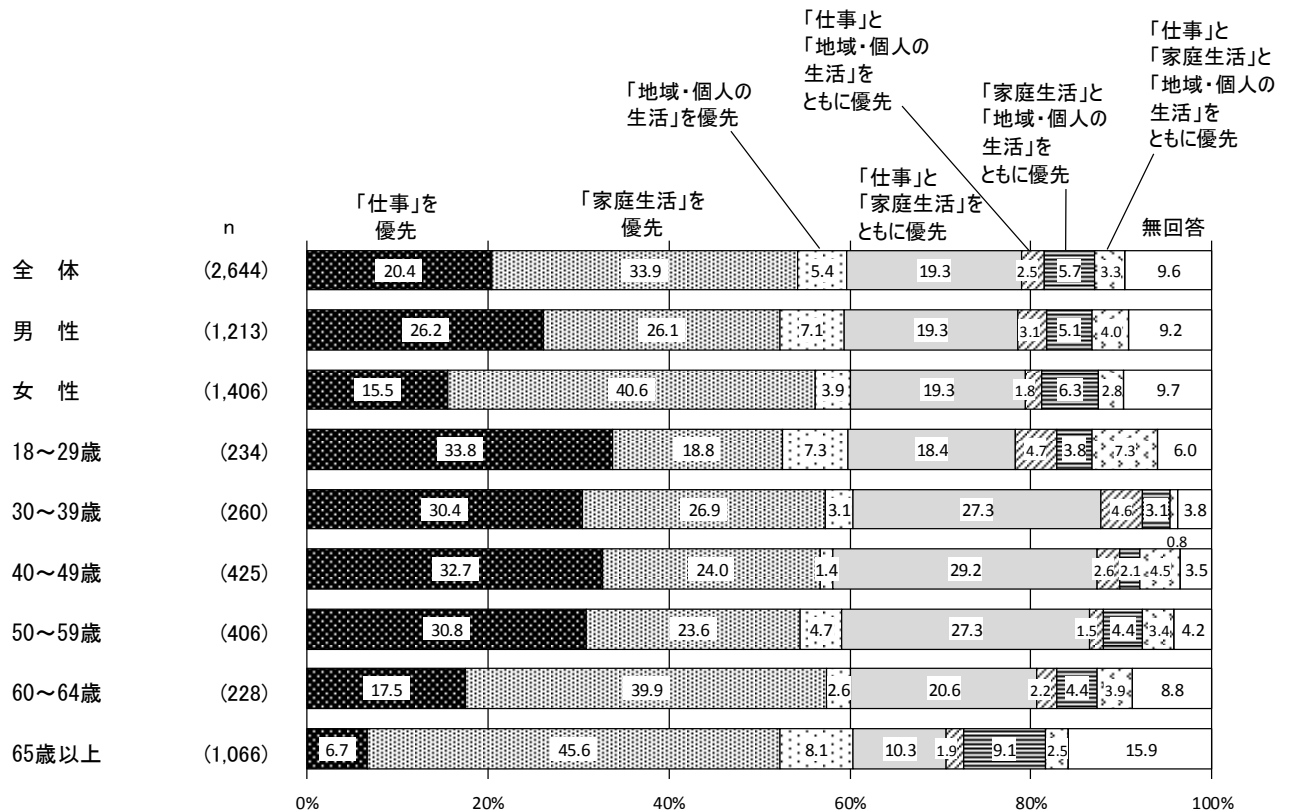


「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度について、実際の優先度を聞いたところ、「『家庭生活』を優先」（33.9%）が最も多く3割強となっている。以下「『仕事』を優先」（20.4%）、「『仕事』と『家庭生活』をともに優先」（19.3%）などの順となっている。

前回までの調査と比較すると、各年似かよった回答分布で、大きな傾向の違いはみられない。

（図3-58-1）

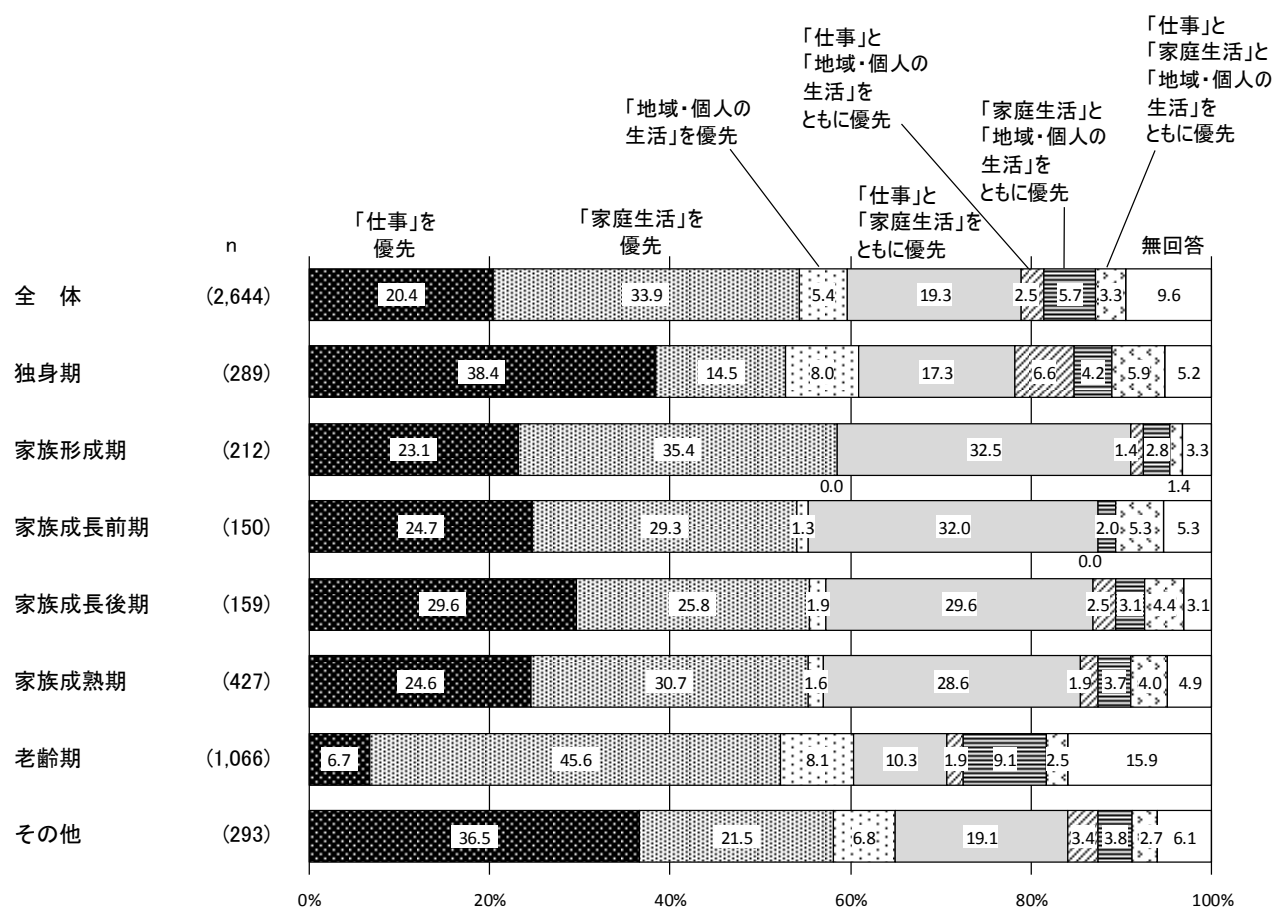
図 3-58-2 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度－性別、年齢別



性別にみると、『仕事』を優先は男性（26.2%）が女性（15.5%）より10.7ポイント高くなっており、『家庭生活』を優先は女性（40.6%）が男性（26.1%）より14.5ポイント高くなっている。

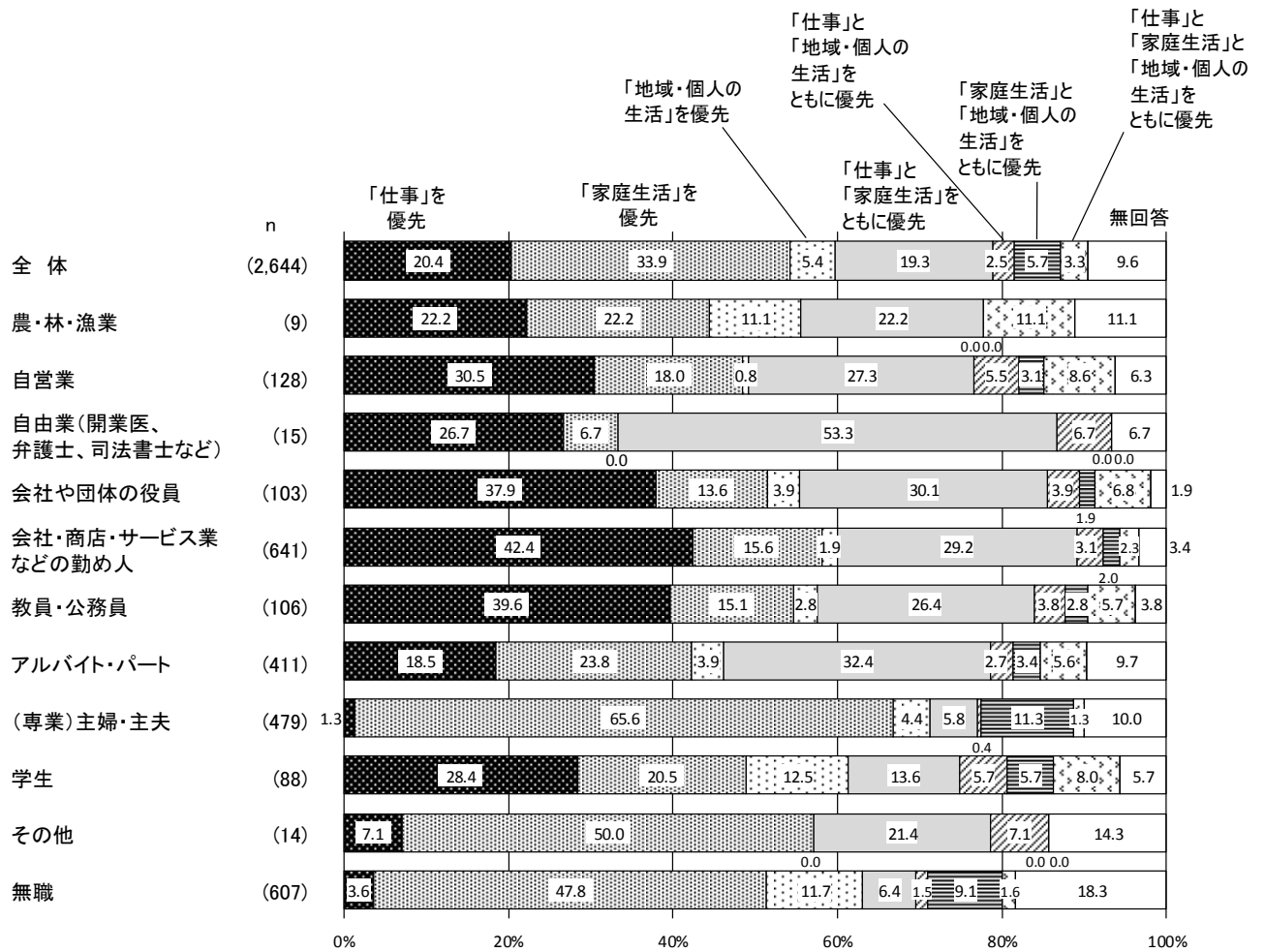
年齢別にみると、『家庭生活』を優先は60歳代以上で多くなっており、中でも65歳以上（45.6%）で4割台半ばと多くなっている。『仕事』を優先は50歳代以下で多くなっており、中でも18～29歳（33.8%）と40～49歳（32.7%）の両層で3割強と多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は30歳代～50歳代で多くなっており、中でも40～49歳（29.2%）が3割弱と最も多くなっている。（図 3-58-2）

図 3-58-3 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度－ライフステージ別



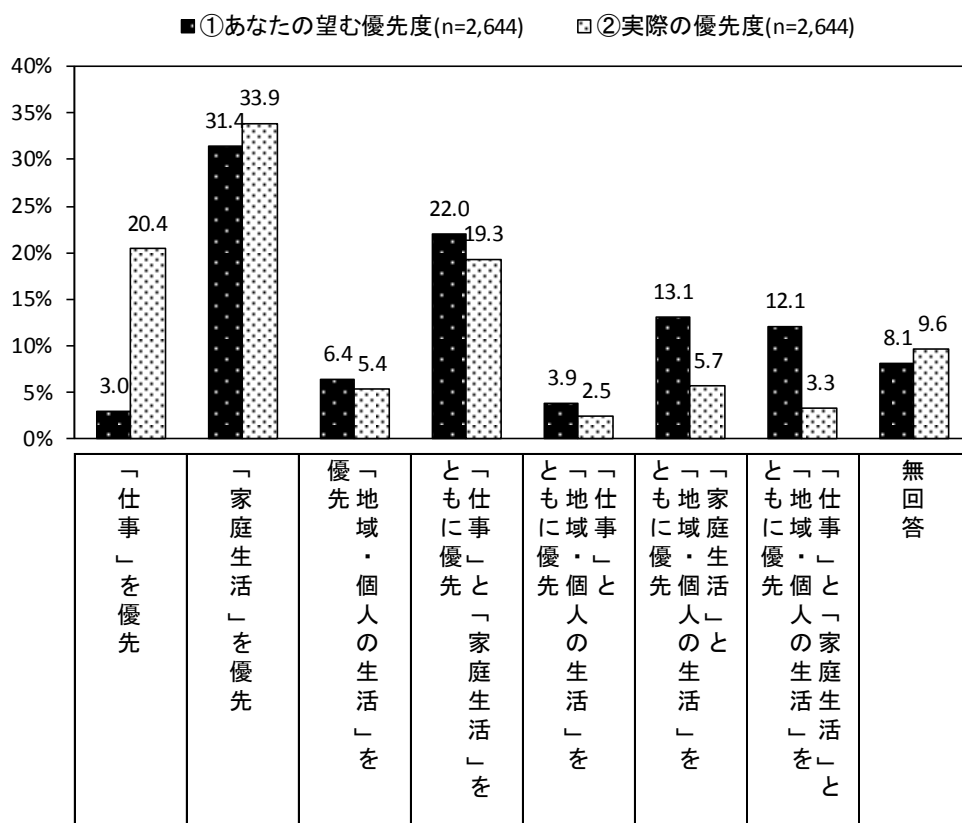
ライフステージ別にみると、『家庭生活』を優先は老齢期（45.6%）で4割台半ばと多くなっており、『仕事』を優先は独身期（38.4%）で4割近くと多くなっている。『仕事』と『家庭生活』をともに優先は家族形成期～家族成熟期で多くなっており、中でも家族形成期（32.5%）と家族成長前期（32.0%）の両層で3割強と多くなっている。（図 3-58-3）

図3-58-4 ワークライフバランスの実現 ②実際の優先度－職業別



職業別にみると、『家庭生活』を優先は(専業)主婦・主夫(65.6%)で6割台半ばと特に多くなっており、『仕事』を優先は会社・商店・サービス業などの勤め人(42.4%)で4割強と最も多くなっている。(図3-58-4)

図 3-58-5 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度と②実際の優先度



「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度における、①希望する優先度と②実際の優先度について比較したところ、『「仕事」を優先』は②実際の優先度（20.4%）が①希望する優先度（3.0%）を17.4ポイント上回って、全7項目の中で最も両者の比率の差が大きくなっている。次いで比率の差の大きい『「仕事」と『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先』は②実際の優先度（3.3%）が①希望する優先度（12.1%）を8.8ポイント下回っている。3番目に比率の差が大きい『「家庭生活」と『地域・個人の生活』をともに優先』も②実際の優先度（5.7%）が①希望する優先度（13.1%）を7.4ポイント下回っている。

一方、全7項目の中で最も比率の差が小さいのは『「地域・個人の生活』を優先』で②実際の優先度（5.4%）と①希望する優先度（6.4%）の比率の差が1.0ポイントとなっている。

(図 3-58-5)

図3-58-6 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度-②実際の優先度別

(%)

		問57 ①あなたの望む優先度								
		基数 (n)	「仕事」 を優先	「家庭生活」 を優先	優先 「地域・個人 の生活」を	「仕事」と 「家庭生活」を	「仕事」と 「地域・個人 の生活」を	「仕事」と 「地域・個人 の生活」を	「仕事」と 「地域・個人 の生活」を	無 回 答
② 実 際 の 優 先 度	全 体	2644	3.0	31.4	6.4	22.0	3.9	13.1	12.1	8.1
	「仕事」を優先	539	10.4	23.6	4.3	39.1	5.6	5.0	11.5	0.6
	「家庭生活」を優先	895	0.6	59.8	5.5	9.7	1.1	16.8	5.5	1.1
	「地域・個人の生活」を優先	143	1.4	14.0	46.9	4.2	9.8	16.1	7.0	0.7
	「仕事」と「家庭生活」をともに優先	510	1.8	18.2	1.6	49.8	2.5	5.3	20.4	0.4
	「仕事」と「地域・個人の生活」 をともに優先	65	0.0	3.1	10.8	10.8	41.5	10.8	23.1	0.0
	「家庭生活」と「地域・個人の生活」 をともに優先	151	0.7	12.6	4.0	3.3	0.7	62.3	15.2	1.3
	「仕事」と「家庭生活」と「地域・ 個人の生活」をともに優先	88	2.3	8.0	4.5	6.8	2.3	12.5	62.5	1.1
	無 回 答	253	1.2	10.3	2.4	2.4	2.0	3.2	1.2	77.5

注) は項目内での最高値

「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度における、①希望する優先度と②実際の優先度の相関をみると、実際に『「仕事」を優先』している人（539名）においては、『「仕事」と『家庭生活』をともに優先』することを希望する人（39.1%）が4割弱で最も多くなっており、『「仕事」を優先』することを希望する人（10.4%）は約1割となっている。一方、実際の優先度で『「仕事」を優先』以外の項目を回答した人たちにおいては、①希望する優先度と②実際の優先度が一致している人の割合がそれぞれ最も多くなっている。（図3-58-6）

図 3-58-7 ワークライフバランスの実現 ①あなたの望む優先度と②実際の優先度の一致

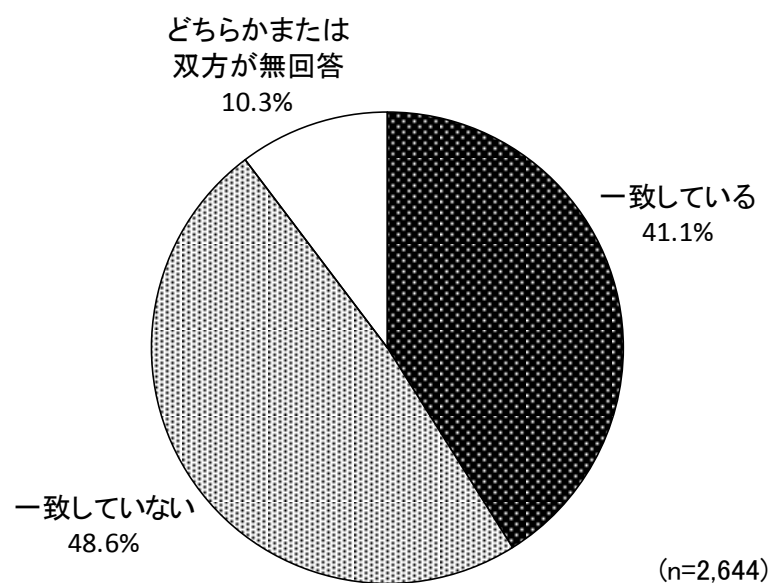


図 3-58-6 に示した、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」（地域活動・学習・趣味等）の優先度における、①希望する優先度と②実際の優先度の相関をもとに、①希望と②実際の 2 つの回答が一致した人、すなわち①希望する優先度のとおり②実際の優先度が実現できている人の割合（41.1%）は 4 割強となっている。

一方、2 つの回答が一致しない人、すなわち①希望する優先度のとおり②実際の優先度が実現できていない人の割合（48.6%）は 5 割近くとなっている。（図 3-58-7）

(59) 市の相談体制の充実度

◇《《そう思う》が3割台半ば

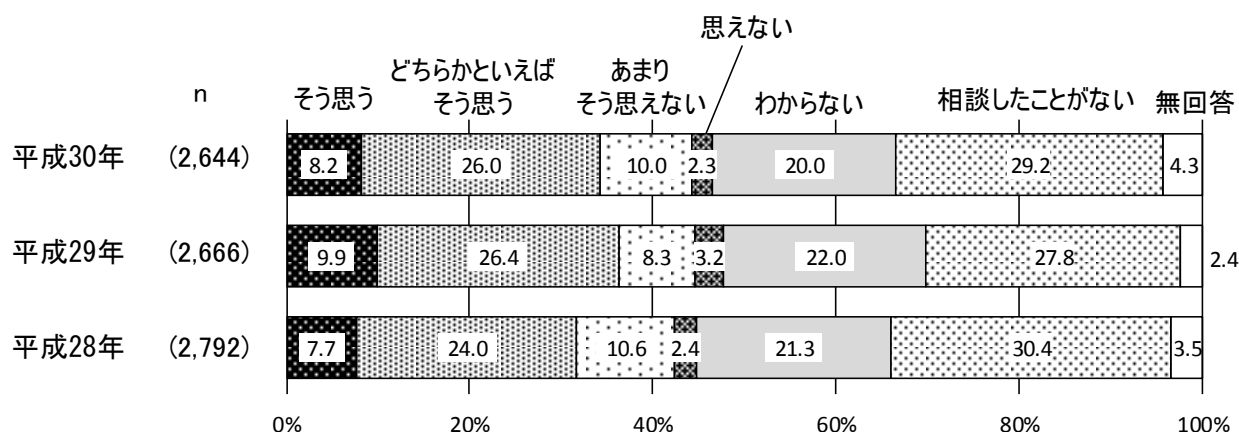
問58 あなたは、市が実施する相談体制は充実していると思いますか。(○は1つだけ)

※市では、専門機関・専門家と連携し、次のような相談を行っています。

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| ○人権、女性福祉、女性のための相談 | ○高齢者の福祉と介護、高齢者総合 |
| ○生活にお困りの方の自立相談 | ○専門家による成年後見制度・権利擁護相談 |
| ○法律、司法書士法律、不動産、登記、
相続・遺言等暮らしの手続 | ○ひとり親家庭、子ども家庭総合、
専門家による子育て相談 |
| ○年金・雇用保険・労働条件 | ○総合教育相談、こども電話相談 |
| ○交通事故 ○税金 ○行政 ○消費生活 | ○あなたの心の相談室、こころの健康相談 |
| ○外国人のための生活相談、行政書士相談 | ○H I Vに関する相談・検査 |
| ○地域活動への参加 ○起業 ○就職 | ○保健福祉・栄養・歯科 |
| ○住まいのなんでも相談、
住宅の増改築に関する相談 | ○理学療法士による健康相談 |
| | ○医療に関する電話相談 |
- など

※これらの相談の「日時・会場・問い合わせ先」については、広報はちおうじの「相談まどぐち」（毎月1日号に掲載）や、市ホームページをご覧ください。

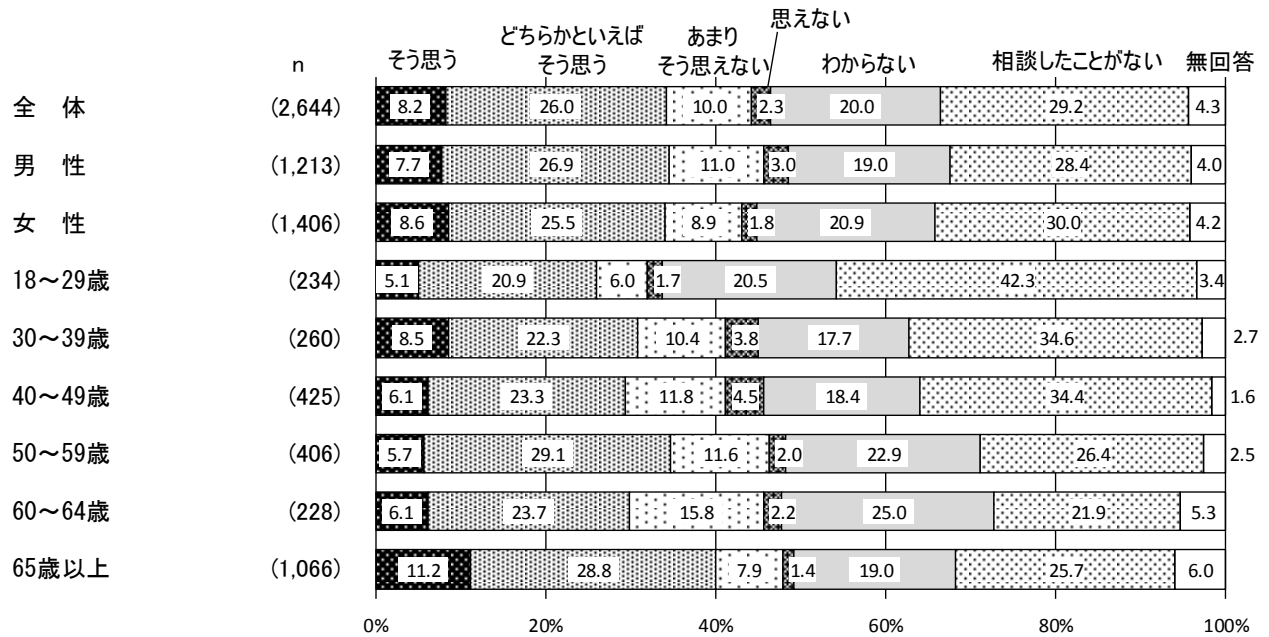
図3-59-1 市の相談体制の充実度—全体、経年比較



市が実施する相談体制は充実していると思うか聞いたところ、「そう思う」（8.2％）と「どちらかといえばそう思う」（26.0％）を合わせた《《そう思う》》（34.2％）は3割台半ばとなっている。一方、「あまりそう思えない」（10.0％）と「思えない」（2.3％）を合わせた《《そう思えない》》（12.3％）は1割強となっている。なお、「相談したことがない」（29.2％）は3割弱となっている。

前回までの調査と比較すると、《《そう思う》》が平成29年（36.3％）より2.1ポイント減少しているものの、それを除くと大きな傾向の違いはみられない。（図3-59-1）

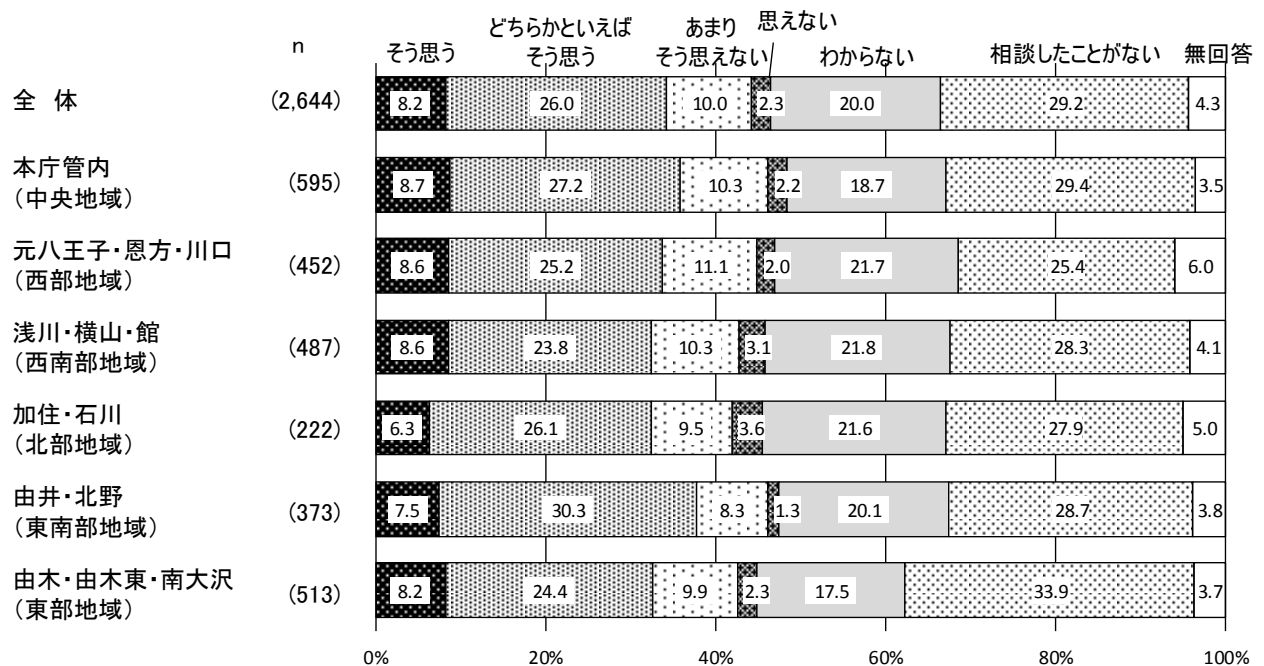
図 3-59-2 市の相談体制の充実度－性別、年齢別



性別にみると、大きな傾向の違いはみられない。

年齢別にみると、「《そう思う》」は65歳以上（40.0％）で4割と多くなっている。一方、「《そう思えない》」は60～64歳（18.0％）が2割近くと多くなっており、「相談したことがない」は18～29歳（42.3％）で4割強と多くなっている。（図 3-59-2）

図 3-59-3 市の相談体制の充実度－居住地域別



居住地域別にみると、「《そう思う》」は由井・北野（東南部地域）（37.8％）で4割近くと多くなっている。（図 3-59-3）

(60) 行財政運営

◇《評価する》が5割台半ば

問59 市は、下欄のような取り組みにより、効果・効率的な行政運営をはかることで、健全な財政運営の維持に努めています。

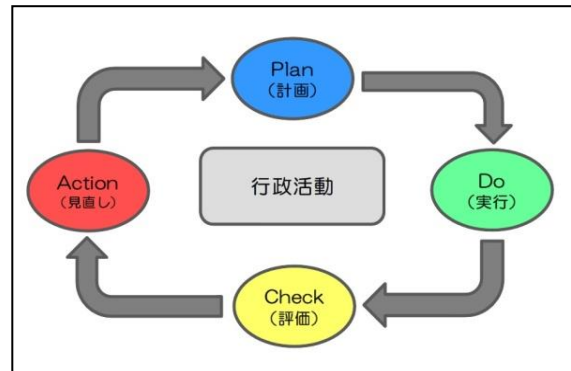
このような市の取り組みに対するあなたの評価をお選びください。(○は1つだけ)

(1) 計画行政の推進

○市の基本構想・基本計画である「八王子ビジョン2022」に掲げた49の施策の実現に向け、向こう3か年に実施する主な事業を示した「アクションプラン（実施計画）」を毎年策定し、計画的な行政運営を行っています。

○安定的・継続的な市民サービスを提供するために、計画・実行・評価・見直しのPDCAサイクルによる行政運営をしています。

PDCAサイクル



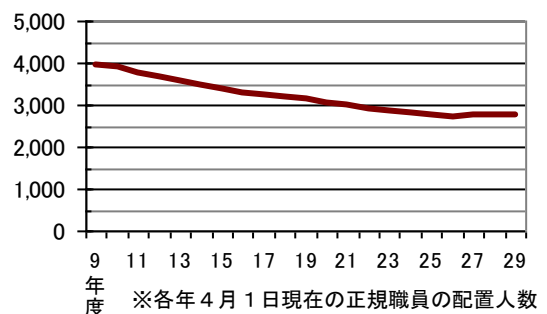
(2) 行政運営の効果・効率性を高める取り組み

○公共施設の管理・運営などにおいて、市が実施するよりも効果・効率的で質の高いサービスを提供できるものについては、民間事業者のノウハウを積極的に活用しています。

○交通至便な八王子駅南口総合事務所と南大沢事務所において、休日や夜間に開庁時間を延長してサービスを提供しています。

○職員が担うべき役割を明確化し適正な定員管理を行うことにより、20年間で職員数を3,950人から2,767人に削減しました。(図1)

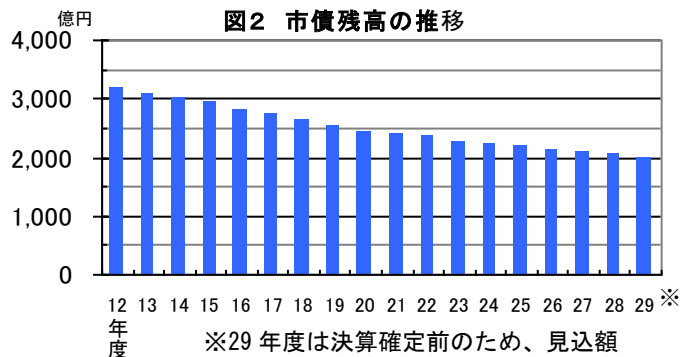
図1 職員数※の推移



(3) 健全な財政運営

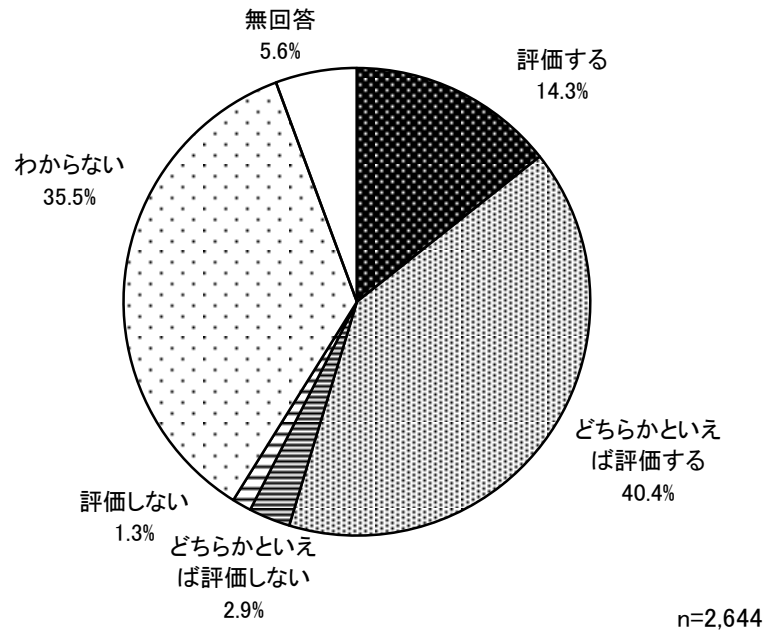
○市の借金である市債の残高をピーク時の約3,184億円(平成12年度末)から約1,999億円(29年度末決算見込)に削減し(図2)、市の貯金である基金の残高は、約112億円(12年度末)から約261億円(29年度末決算見込)に増やしました。

図2 市債残高の推移



○市の支出のうち、児童福祉や障害者福祉など社会保障制度に基づき支出する「扶助費」が継続して増加する中、「人件費」(職員給与など)や「公債費」(市の借金返済に要する経費)などを内部努力で抑制し、適切な市民サービスを維持するために必要な財源を生み出しています。

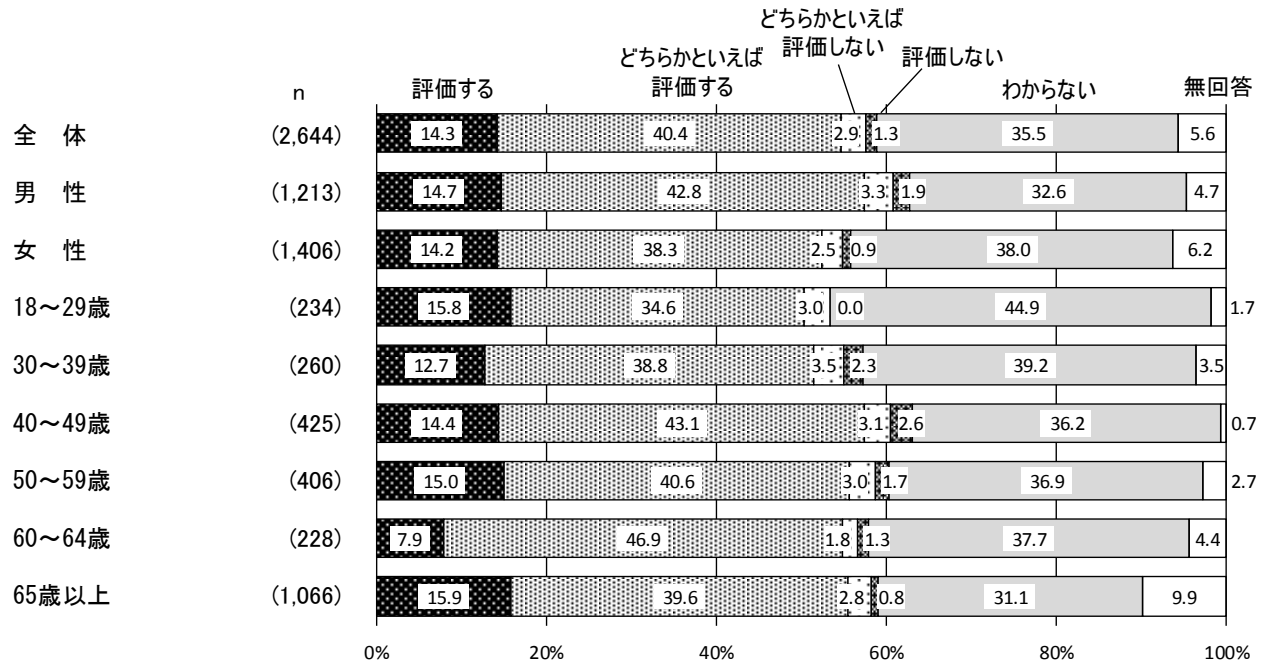
図 3-60-1 行財政運営－全体



(注) 平成30年度では質問文および選択肢が変わったため、経年比較はない。

効果・効率的な行政運営をはかることで、健全な財政運営の維持に努める市の取り組みに対して評価するか聞いたところ、「評価する」(14.3%)と「どちらかといえば評価する」(40.4%)を合わせた《評価する》(54.7%)が5割台半ばとなっている。一方、「どちらかといえば評価しない」(2.9%)と「評価しない」(1.3%)を合わせた《評価しない》(4.2%)は1割未満となっている。(図3-60-1)

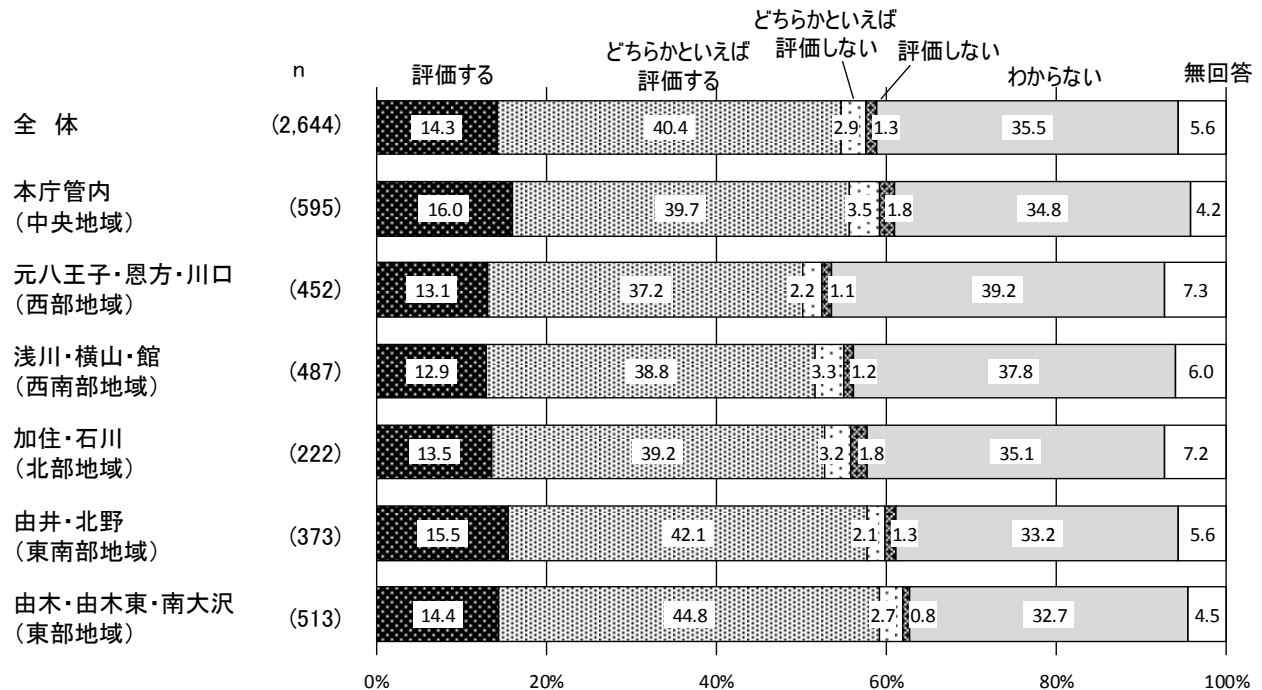
図 3-60-2 行財政運営－性別、年齢別



性別にみると、《評価する》は男性（57.5%）が女性（52.5%）より5.0ポイント高くなっている。

年齢別にみると、《評価する》は40～49歳（57.5%）で最も多くなっている一方、18～29歳（50.4%）で最も少なくなっている。（図 3-60-2）

図 3-60-3 行財政運営－居住地域別



居住地域別にみると、《評価する》は由木・由木東・南大沢（東部地域）（59.2%）で6割弱と多くなっている。（図 3-60-3）

(61) 市の行財政運営を評価しない理由（自由意見）

（問59で「どちらかといえば評価しない」または「評価しない」とお答えの方に）

問59－1 評価しない理由があれば、お書きください。（自由記述）

効果・効率的な行政運営をはかることで、健全な財政運営の維持に努める市の取り組みに対して、「どちらかといえば評価しない」または「評価しない」と答えた111人に、評価しない理由を自由記述形式で聞いたところ、88人から回答があった。その中から抜粋した意見を掲載する。なお、内容については、記述の趣旨を損なわないように留意しながら一部要約したものがある。

- 職員数の減少により非正規化が進んで、雇用環境の悪化や窓口サービスの質の低下につながるの
は良くない。（男性18～29歳）
- そのような取り組みが実際に活かされていることを生活していて実感する機会がないから。
（女性18～29歳）
- 取り組みが実を結んでいるように見えない。道路建設が遅れるなどインフラ整備において投資が
不十分であると考えから。（男性18～29歳）
- 市債を減らしたのは評価できるが、職員給与を減らすのは良くないのでは。（女性30～39歳）
- もっと市政をわかりやすく誰もが理解できるようにしてほしい。（女性30～39歳）
- 市の財政運営向上のためには、日本で誇れる魅力をつくり発信することが必要だ。人がいなければ
活気も金も生まない。（男性30～39歳）
- この資料では評価しようがない。特に職員数に関し人件費削減のため押し付けるように削減して
いる企業もある。職員のアンケート結果もないと適正かは評価できない。（男性30～39歳）
- 職員の非正規雇用化が進み、教員、保育士などは臨時職員やパートタイマーが多すぎると思う。
必要な相談がしづらいことがある。（男性40～49歳）
- 道路の補修ばかりして、駅前の駐輪場の不足が解消されず、市民が本当にしてほしいことにお金
をつかっていないと思う。マンションの乱立も許可しないでほしい（女性40～49歳）
- 高齢化社会に向けてのビジョンが不足している。よりITの活用を進め、情報の偏りのない市政
や高齢者の活用を意識すべき（男性40～49歳）
- 生活保護の不正受給者がいても、調査しない。無駄な税金の使い方をしている。（男性50～59歳）
- 健全な財政運営をしていると市民は思っていない。緑化フェアで市民が富士森グラウンドを使用で
きずにいる。駅前のエスカレーターも中途半端な上に、また東急の前に作ると聞いた。税金の無
駄遣いが多すぎる。（女性50～59歳）
- 職員の人件費を削るのは限界。それより議員の報酬を下げるべき。そして箱物ばかりが増える箱
物行政はやめていただきたい（女性60～64歳）
- 民間事業者の活用より、「市が実施する」ことで効果、効率を高める余地がまだあると感じてい
る。職員数や市債残高の減少推移のような目に見える量的なことだけでなく、質的なところを向
上してほしい。職員数が減ればよいとは思わない。市で実施することが適切なものは市でしっか
り（効果的、効率的、質の高い）行ってほしい。（男性65歳以上）
- 高齢者への負担軽減や「はちバス」を充実させるなど、住みやすさ向上のために財政を使ってほ
しい。（女性65歳以上）